日本開国－異文化交錯の劇空間

神　徳　昭　甫

第一章　出島から見た「世界」―― 鎖国の中の「開国」

はじめに　いわゆる「鎖国令」というのは，江戸時代の初期，キリスト教の禁止，貿易の制限を目的として寛永十年から十六年（1633年～1639年）までの六年間に徳川幕府の出した五回の法令のことを言っています。最後の「第五次鎖国令」で「ポルトガル船の来航の禁止」を打ち出し，これによって鎖国が「完成」したとされておりますが，幕府はさらに二年後の寛永十八年（1841年），肥前松浦藩平戸のオランダ商館を長崎の出島に移転させることによって一層の管理・統制を強めています。以後外国との交渉は，すべてこの長崎・出島に限られ，しかもその通商・交流の相手はオランダと中国（当時は清）のみに限って行われることになるわけです。従って出島は，日本における「唯一の海外交流の舞台」となり，世界との交渉における「唯一の窓口」[1] となって行く。この「鎖国」が，嘉永六年六月（1853年7月）ペリーの率いる四隻の「黒船」によって「開国」へと余儀なくされるまでの，実に二百十五年もの長きにわたって続いたことは，周知の通りです。

このように，長期に亘る「鎖国」とその影響力，またその「開国」が，他ならぬ「黒船」によって行われたこと，これらの影響力は，後の日本人にとって測り知れない意味を持っているように思われます。しかしながら，その本題に入る前に，まずこの「鎖国」がどのようにして形成されたのか，鎖国の背景と，その形成の過程を見ていくことにしたいと思います。

大航海時代　「地球は丸い」のだから西へ西へと行けば，いつかはインドや，あるいはマルコ・ポーロ（1254～1324）が『東方見聞録』（1299）で説いた「黄金の国ジパング」に到達するはずだ，という信念を抱いて1492年8月，スペインのリスボンを出港したコロンブス（1446？～1506）[2] は2ケ月後，「アメリカ」大陸を「発見」，こうして15,16世紀の「大航海時代」の幕が切って落とされました。彼はイタリアのジェノヴァの出身ですが，スペインのイザベラ女王

1）「唯一の海外交流舞台」，「唯一の窓口」…形式的にはそうであるが，実際には，松前藩は蝦夷との交易を行い，琉球は明・清と，また対馬も朝鮮との交易を認められていた。

2）本論のテーマ「日本開国」と最もかかわり合いの深い人物の一人である，マッシュー・カルブレス・ペリー（1794～1858）は，日本遠征は，コロンブスの遺志を引き継いだものであり，自分の達成したものは「彼（コロンブス）の企図した事業の一部」であることを『ペルリ提督日本遠征記』の冒頭に記している（ホークス(一)28)。

の庇護を受ける前，ポルトガルのホアン二世（在位1481～95）に話を持ちかけ断られています。というのは，ポルトガルは「航海王」エンリケ（1394～1460）によって東洋への新航路発見のための多くの探検隊を組織し，幾つかの「地理上の発見」をした「先進国」だったからで，すでにバートロメオ・ディアス（1450？～1500）が，アフリカの南端に到達して，「喜望峰」（the Cape of Good Hope）を発見したのが1488年，またヴァスコ・ダ・ガマ（1469～1524）は，1497年，ディアスの発見した，アフリカ南端を迂回し更に距離を延ばして遂にインドのカリカッタに到達していました（東航路の発見）。彼らヨーロッパ人の探検家をして長く危険な航海へと衝き動かしたもの，それは東洋の富である香辛料でした。事実ガマはインドの香料を満載してポルトガルへ帰港し，莫大な利益を手にしているのです。

同じポルトガル人ですが，スペイン王カルロス（在位1516～56）の援助を受けたマジェラン（1480～1521）は，1519年，五隻の船隊と237人の部下と共にコロンブスと同じ西回りで南米南端の海峡（マジェラン海峡）を経由し太平洋に出てフィリッピン諸島の一つに着陸，彼は現地人との戦闘で命を失うが，残った一隻の船と18名の部下は，モルッカ諸島に寄り，そこで大量の香辛料を積んで喜望峰を迂回して三年ぶりの1522年，セヴィリアに帰港した。その航海は四隻の船と大勢の船員を失った損失を補ってなお余りある，巨額の利益を生み出したそうです。こうしてポルトガルに遅れを取ったスペインもまた東方の富，ことに「胡椒，肉桂（にっけい），丁香（ちょうこう），肉豆蔻（にくずく），生姜」などの香辛料，薬品の確保を可能にしたのです。ちなみになぜ，ヨーロッパではこれらの香辛料の需要が高まっていたのかと言えば，調味料として利用する他に，腐敗した牛・豚肉，あるいは保存用の塩漬け肉の悪臭を消すために特に胡椒は必要不可欠だった（会田　36）と言われています。

以上見てきたように，当時オスマン・トルコのアジア進出によって絶たれていた古代ローマ時代以来の地中海東部コースを通らず，直接アジアに達する東西の両航路の発見によって東西通商の道が復活することになり，まずはイベリア半島に位置する二つの国，ポルトガル，スペインを先頭にヨーロッパはアジア，アフリカ，新大陸アメリカにおける植民地の開発と経営に乗り出していくのです。これに反して東方とヨ-ロッパの内陸地方との仲介貿易によって栄えた地中海沿岸の，ジェノヴァ，ヴェネツィアなどの都市国家は衰退を余儀なくされました。

日本漂着と鉄砲伝来　ポルトガルはインド航路開拓の十年後の1510年にインドのゴアを占領して総督府とし，東アジア貿易の拠点とします。さらに香辛料貿易を支配していたイスラム商人を破ってマラッカや，モルッカ諸島を占領し，明朝の中国に接近，マカオにも居住権を得ています。これにやや遅れてスペインは，マジェランの発見したフィリッピン諸島を領有し，マニラを基点にしてアジア経営に乗り出すことになりますが，コロンブスの発見したアメリカ大陸では，コルテス（1485～1547），ピサロ（1476～1514）がそれぞれ1521年，1533年にアステカ，インカ両帝国を征服して莫大な金を手にし，さらにボリビアのポトシで銀山を開発して

アジア，とくに中国貿易における生糸の対価とし，利潤をあげたのです。

さて天文十二年（1543），マカオを出た一隻のポルトガル船が嵐によって日本の種子島に漂着した事件は，まさにこのような時代のさ中に起こった出来事でした。また，これは西洋にとってはマルコ・ポーロ以来，150年にわたって夢見てきた「黄金の国」の発見が遂に実現した画期的な事件でした。

ともあれ，この「南蛮」の異国船がもたらした鉄砲は「戦国時代」の真っ最中だった日本に瞬く間に普及して国産化され，そしてこの鉄砲の威力を最も知り尽くした大名の織田信長（1534～1592）が，天正三年（1575），長篠の合戦で武田騎馬隊を撃破して天下統一の名乗りをあげたわけです。

キリスト教が日本に伝来したのは，天文十八年（1549）のことで，イエズス会（耶蘇会）のフランシスコ・ザビエル（1506～52）らの一行六人が鹿児島に到着します。

キリシタン弾圧と南蛮貿易　好奇心が旺盛で新しいものが好きだった信長は，旧勢力である仏教への反発もあってキリスト教を篤く保護したので各地の大名や武士，庶民も改宗し，信者の数は1582年，西日本だけで15万人を越えたと言います。また彼の下でポルトガルとの貿易（南蛮貿易）も発展しました。なお，スペイン（イスパニア）は，ポルトガルに40年遅れて天正十二年（1584），肥前の平戸に上陸し，日本との交易[3)]に参加しています。

信長のあとを継いで天下統一を成し遂げた豊臣秀吉（1537～98）の場合，最初はキリシタンの布教を認めていましたが，その後，九州出兵（島津討伐）の際，キリシタン大名（長崎・大村純忠）がイエズス会に所領を寄付していることや，ポルトガル人が日本人を奴隷にして輸出していることを知って天正十五年（1587）「バテレン追放令」を出し，宣教師を国外追放，布教を禁止しております。とはいえ，南蛮貿易は奨励していたため，この禁教令は余り徹底せず，キリシタンは増え続けるのです。

鎖国に至る過程　最初に述べたように，寛永十年（1633）に第一次鎖国令が発布されたわけですがしかし，実質的な「鎖国」は，その前の元和二年（1616）から始まっていたとする説

3）　これら両国との交流・交易の結果，多くの人や物資が行き交って花開いたのが，キリシタン文化，あるいは南蛮文化といわれるものである。前者は，秀吉時代やまた徳川初期の弾圧によってその多くは姿を消し，その後の「鎖国」期間中に完全に根絶されたかに見えたが，しかし実際は「カクレキリシタン」によって，信仰の内実は変容を遂げながら明治まで何とかその命脈は受け継がれていったし，後者もまた「ボタン，テンプラ，カステラ，シャボン，カッパ，パン，カルタ」などポルトガル語由来の「外来語」の中に，その名残りを今も留めているといえよう。なお芥川竜之介(1892～1927)は，この時代を題材に，「煙草と悪魔」(1916)，「奉教人の死」(1918)，「神神の微笑」(1922)，「おしの」(1923)などの「南蛮物」，「切支丹物」と言われる短編を幾つか描いている。また，遠藤周作(1923～1996)も「鎖国時代」の初期を舞台に，殉教か，棄教かの選択を迫られたパードレ・フェレイラの内面の葛藤を「沈黙」(1966)の中で克明に描写しているが，芥川が「造りかえる力」(芥川185)と呼んだ，日本人の海外文化受容・摂取能力を，「どんな苗でもその根を腐らせてしまう恐ろしい沼地」(遠藤295)であると，既に「ころんだ」先任の司祭に言わせている。

がもっぱら有力です（朝尾 25）。というのは，この年四月，大御所・家康（1542～1616）が死去し，二代将軍秀忠（1579～1632）の治世となったばかりの八月，彼は五人の老中に命じて「キリシタン禁令」に加えてヨーロッパ商人の貿易地制限を発布させているからです。それには，

元和二丙辰年八月八日
追って唐船之儀は，何方へ著候共，船主次第賣買可被仕旨被仰付候。
以上。
急度申入候，仍伴天連門徒之儀，堅御停止之旨，先年（慶長十七年）相国様被仰出候上者，彌被得其意下々百姓以下に至迄，彼宗門無之候様に可被入御念候に將又黒船いぎりす船之儀，右之宗體に候間，御領分著岸候共，長崎平戸へ被遣之，御領内にて商賣不仕候様，尤候。此旨依上意，如此候。恐々。
安對馬，土大炊，酒備後，本上野，酒雅樂　　（通航一覧）
（徳富 163）

（きつく申し渡すが，伴天連や信徒の儀これまでかたく御停止の旨，先年家康公より仰せだされておるが，今後はいよいよその旨を帯して，下々百姓以下にいたるまで，かの宗門がなくなるように念をいれて禁圧せよ。さてまた黒船やイギリスの儀も右とおなじ宗門であるから，御領内にてけっして商売しないようにいたせ。この旨は上意によって定められたものである。なお，唐船に関しては，どこへ着岸しても船主の希望によって売買させてよいとの仰せである。以上。
（安藤重信，土井利勝，酒井忠利，本多正純，酒井忠世）

とあって，まずキリシタンの取り締まりをいっそう強化せよといっており，第二に黒船すなわちポルトガル船と，イギリスの船を平戸と長崎の二地に限定しております。その理由として，両国がキリスト教を信奉している点では同じであることをあげているのです。中国船に関しては，船主の希望次第で，自由な通商を認めているのは，キリスト教とは無関係とみられたからでしょう。

このように元和二年八月のこの法令は，キリシタン禁令と貿易統制が結合されているという点において，まさに寛永十年～十六年までの「鎖国令」を先取りし，その原型をなしているといえるのであり，実質的な「鎖国令」と言われる理由はそこにある（朝尾 26）のです。

ところで「元和偃武」という言葉があるように，慶長五（1600）年9月，関ヶ原の勝利で天

下の形勢をほぼ手中に収め，征夷大将軍に任じられて幕府を開いた（慶長八年＝1603年）徳川家康が，大坂夏の陣で豊臣家を滅ぼし，文字どおり権力を不動の物にしたのが元和元年であり，ここには武器を捨て「平和」の時代が到来したという意味が込められています。

このようにもともと秀吉と違って平和外交を推進する方針をとっていた家康が，突如キリシタン禁教に踏み切った理由はいま一つ定かではありませんが，慶長十六（1611）年の禁教令では「耶蘇は夷狄の邪法」と述べ，またその二年後慶長十八年の「伴天連追放令」の冒頭で「それ日本は元神国なり」と宣言したあと「ここに吉利支丹の徒党，たまたま日本に来たり，ただに商船を渡して資財を通じ，みだりに邪法を弘めて正宗をまどわし，以て城中の政号を改め，己が有となさんと欲す。これ大禍の萌なり。制せずんばあるべからず」（金地院崇伝起草）と記しています。これは，強力なカトリックの教義に対抗して，日本を「神（仏）の國」であるという「思想」を打ち出す必要があったということが考慮されるのですが，その論理的帰結としてこの家康が死後は「神君」，すなわち新国家の守護神として日光東照宮に祀られ，西洋の「絶対神」にも比定される存在になっていくのです。ともかく，ここには後の「鎖国時代」の日本で形成されていく，いわゆる小中国として「華夷思想」の原型が既に胚胎しているのと同時に，誇大妄想的な秀吉の膨張政策と両極端を成す，日本的な，いわゆる「縮み思考」の一つの典型が見られるような気がしてなりません。

いずれにせよ，先の元和二年の法令を初めとして，成立後間もない徳川幕府の地盤を固め，中央集権的な封建国家を作り上げていくため，二代将軍秀忠は，父の家康以上に次々と思い切った政策を実行し，親藩，譜代，外様の如何を問わず，様々な口実を設けて多くの大名の改易，取り潰しを計ったのでした。例えば福島政則（1561～1624）は，広島城を無断で改築したという理由で改易される。秀忠の弟，忠輝（1592～1638）は，キリシタンとの関係，及び謀反を疑われて改易の上，越後・高田から伊勢・朝熊に配流され，甥の忠直（1595 ～1650）もまた「狂乱」の行為を咎められて改易され，越前・北の庄から豊後・萩原へと配流，更に本多正純（1565～1632）も前政権の中枢であったという理由のみで処分の対象になっているのです。

また当初は奨励した朱印船貿易も慶長十四（1609）年の五百石以上の「大船」の保有を禁ずる法令と，「御領内にてけっして商売いたさぬように」という今度の通達によって，海外渡航や貿易は不可能となり，これまでそれによって潤っていた西国大名は財政的，経済的に大きな痛手を蒙ったわけです。

話は遡りますが，慶長五（1600）年関ヶ原の決戦を半年前に控えた三月のこと，オランダ船リーフデ号が豊後の臼杵湾に漂着するという事件が起こりました。家康は航海士ヤン・ヨーステン（1557？～1623）と水先案内人，イギリス人ウイリアム・アダムズ＝三浦按針（1564～1620）を江戸城に呼び寄せ，彼らを外交・貿易上の顧問にしています。こうしてポルトガル，スペインにはかなり遅れながらも，オランダは1609（慶長14）年，続いてイギリス

は1613（慶長18）年，平戸に商館を開くことになった[4]のですが，この両国に対しても当然上述の元和二年（1616）の法令は適用されることになりました。

ところで同じキリスト教を信仰してはいても，旧教国のポルトガルやスペインと違って新教国であるオランダ，イギリスは貿易上の競争に遅れを取ったこともあって，この両国に対して非常な競争心と敵対心を抱いており，ことに16世紀はスペインの支配下にあったネーデルランド＝オランダの場合（1609年独立），ことあるごとにポルトガル，スペインの日本に対する領土的な野心を幕府に吹聴しており，日本側の警戒心を煽ってきました。事実，信者の数も急増して，慶長十九年（1614）の段階で，キリシタン信者の総数は，各派合わせて全国で六，七十万と言われ，本州全土を席巻し蝦夷地にまで広がろうとする勢いでした。それでも家康の存命中は宣教師の血を流すことはなかったのですが，その死後，元和三年（1617）には，大村でイエズス会とフランシスコ会の宣教師が一名づつ，ついでドミニコ会，アウグスチノ会の宣教師も各々一名斬首されており，このようにして元和八年八月（1622年9月），長崎でいわゆる「大殉教」が起こったのです。このとき，イエズス会やドミニコ会の伴天連，フランシスコ会の各会派の宣教師をはじめ，その他の伝道者やこれをかくまったもの，その家族など，男女・老若の信者あわせて55人が火刑（火炙り）になりました。国籍からいうとスペイン人，イタリア人，日本人，朝鮮人あり，年齢からは，八十歳の老婦など女性12人，また三歳から五歳までのいたいけな小児も5人いた（岩生 286）と言います。

鎖国の完成　秀忠の時代に出された幾つかの厳重な法令も，特に海外貿易において様々な抜け道を見つけて脱法行為を行うものが少なくなく，統制は徹底されなかったようです。そこで寛永九年正月，秀忠が没して家光（1604～51）が次の将軍になると，更に一層の取り締まりの強化がなされることになり，こうしていよいよ「鎖国制度」が断行されることになるのです。

第一次は前述したとおり寛永十年（1633）の十七ケ条で次のような内容になっています。

寛永十酉年二月

長崎奉行江之奉書　寛永十一年

同文

覺

一，異國江奉書船之外，舟遣候儀，堅停止之事（第一条）。

4）　オランダは1602年，バタヴィア（現ジャカルタ）に半官半民の株式組織，東インド会社を設立したが，平戸の商館はその一出張所として置かれた。一方，イギリスは1600年，エリザベス女王の勅許を得たロンドン商人たちがインドに株式組織の東インド会社を設立，マドラス，ボンベイ，カリカッタを基地としてインド貿易を行い，17世紀末における世界商業の覇権をオランダから奪った。平戸のイギリス商館はオランダに対抗して開かれたものであったが，オランダ側に押され気味で経営は当初からおもわしくなかった。

一，奉書船之外ニ，日本人異國江遣申間敷候。若忍候而乗まいり候もの於有之ハ，其ものハ死罪，其船并船主共ニ留置，言上可仕之事（第二条）。

一，異國江渡リ，住宅在之日本人来候ハヽ，死罪可申付候。但，不及是非仕合有之而，異國ニ致逗留，五年より内ニ罷歸ものハ，遂穿鑿，日本ニとまり可申ニつきては，御免，併異國江又可立歸ニおゐては，死罪可申付候事（第三条）。

一，伴天連宗旨有之所江ハ，從兩人可申遣之事（第四条）。

一，伴天連訴人ほうひ之事（第五条）。

附，上之訴人には銀百枚，それより下ハ，其忠にしたかひ可相計之事。

一，異國船申分有之而，江戸江言上之間，番船之事，如前々大村方江可申越之事（第六条）

一，伴天連宗旨弘候南蠻人，其外惡名之もの之有時，如前々大村方之篭ニ可入置之事（第七条）。

一，伴天連之儀，船中之改迄，入念可申付事（第八条）。

一，諸品一所江買取申儀，停止之儀（第九条）。

一，奉公人於長崎異國船之荷物唐人前より直ニ買取候儀停止之事（第十条）。

一，異國船荷物之書立，江戸江注進候而返事無之以前にも，如前々商賣可申付事（第十一条）。

一，異國船ニつみ來り候白絲，直段を立候而，不殘五ケ所へ割符可仕之事（十二条）。

一，絲之外諸色之儀，絲之直段極候而之上，相對次第商賣可仕之事（第十三条）。

附，荷物代銀直段立候而之上，可爲廿日切之事。

一，異國船もとり候事，九月廿日切たるへき事（第十四条）。

但，遲來候船ハ，着候而五十日切たるへき事。

一，異國船賣殘し之荷物，預置候儀も又預り候事も停止之事（第十五条）。

一，五ケ所之商人長崎江來着候儀，七月廿日切たるへし。それより遲く參候者ハ割符をはつし可申事（第十六条）。

一，薩摩平戸其外いつれ之浦に着候船も，長崎之絲之直段之如くたるへし。長崎にて直段立候ハぬ以前，商賣停止之事（十七条）。

右條々，可被守此旨もの也。仍執達如件。

寛永十年酉二月廿日八日　　伊　賀
信　濃
讃　岐
大　炊

曾我又左右衛門殿
今村傳四郎殿

引書　〇御當家令條

これを要約すると

1. 第一条から第三条までは日本人の海外往来の禁
2. 第四条以下第八条に至る五箇条はキリシタン宗，特にバテレン取り締まり令
3. 第九条以下は外国船貿易取り締まりの規定

となる。即ち寛永十年の条令では，奉書船（海外渡航の船には，朱印のほかに，更に老中の奉書をその都度長崎奉行に差し添えて下すことになったことをいう）のほか，外国へ船をつかわすことも，日本人が行くことも禁じ，違反者は死罪に処し，船も船主を留置して届け出ることを命じています。また，外国在住の日本人が帰ってくると，死罪，やむをえない事情で在住し，五年以内に帰国した者については，取り調べの上，日本に留まるなら許し，ふたたび外国にもどるときは死罪としたのです。逆にいうと，まだ奉書船による渡航は認めていたわけです。いずれにせよ，この三点は，後の四つの鎖国令のすべてにおいて繰り返されています。

寛永十一年の第二次鎖国令は，次のように前年のとほぼ同じ内容を繰り返した簡単なものに留まっています。

寛永十一年五月廿八日

長崎制札

禁制

一，伴天連日本江乗渡事

一，日本之武具異國江持渡事

一，奉書船之外日本人異國江渡海事

附日本住宅之異國人同前事

右條々於違反之族ハ速可被處嚴科者也仍執達如件

寛永十一年五月廿八日　　奉　　行

引書　〇嚴制録

ところが第三次鎖国令（寛永十二年）の十七ケ条を見てみると

寛永十二亥年

條々　　長崎

一，異國江日本之船遣之儀，堅停止之事。

一，日本人異國江遣し申間敷候。若忍ひ候而乘渡る者於有之ハ，其者ハ死罪，其船船主共ニ留置，言上可仕事。

一，異國江渡り住宅仕有之日本人來り候ハヽ，死罪可申付事。

一，伴天連之宗旨有之所江ハ両人より申遣し，可遂穿鑿事。

一，伴天連訴人褒美之事。

*上之訴人ニハ銀子百枚，其より下ニハ其忠にしたかひ可相計事。

一，異國船申分有之而，江戸江言上之間，番船之事，此以前之如く大村方江可申越事。

一，伴天連之宗旨改候南蠻人，其外惡名之者有之時ハ，如前々大村之篭ニ可入置事。

一，伴天連之儀，船中之改迄，念入可申付事。

一，諸色一所江買取申儀，停止之事。

一，武士之面々，長崎におゐて異國船之荷物，唐人よりじかニ買取候儀，停止事。

一，異國船荷物之書立，江戸江注進候而，返事無之以前ニも，前々之如く商賣可申付事。

一，異國船つみ來白絲，直段を立候而，不殘五ケ所其外書付所割符可仕事。

一，絲之外諸色之儀，絲之直段極り候而之上，相對次第商賣可仕，但，唐船者小船之事ニ候，見計可申付事。

附，荷物之代銀直段而之上，可爲廿日切事。

一，異國船もとり候事，九月廿日切たるへし，若たうく來り候ハ着候而より可爲五十日切也。唐船者見計，かれうたより跡ニ出船可申付事。

一，異國船賣殘し之荷物預ケ置候儀も停止之事。

一，五ケ所惣代之者，長崎江參着之儀，七月五日切たるへし。其よりもおそく參り候者ニハ，割符をはつし可申事。

一，平戸江着候も，長崎之絲之直段之如くたるへく，長崎ニ而直段立候ハぬ以前ニ，商賣停止之事。

右，可被守此旨者也。仍而執達如件。

寛永十二年　　加賀守　判

豊後守　判

伊豆守　判

讃岐守　判

大炊頭　判

榊原飛騨守殿

仙台大和守殿

この一条から三条までに見られる通り，外国へ日本船が渡航することは一切禁止され，在住

日本人の帰国する者も，先のような条件を付けず，すべて死罪となっています。これによって関ヶ原合戦の後から四十年にわたって三百数十隻の朱印船が渡海し，繁栄した日本人の東南アジア，南海諸島との交易[5)]は完全に息の根を停められたわけです。

ついで寛永十三（1636）年の第四次鎖国令では十九ケ条に増えており，ここでの特色は，まず伴天連の取り締まりにおいて，寛永十年から十二年までほとんど変わっていなかったのが，十三年に至って密告者への褒賞銀が引き上げられて，銀百枚から事情によって三百枚，二百枚にまで与えられることになったことです。しかし，ここでもまだ取り締まりの中心は伴天連，すなわち布教の幹部であるパードレ（神父）におかれていて，宗旨そのものについては，全面的な処罰の対象にはなってはいません。

寛永十三年ノ奉書左ノ三條ヲ改正増加シテ餘ハ寛永十二年ニ同シ因テ全文ヲ畧シテ茲に附記ス

改正

一，伴天連之訴人者其品ニ寄或ハ三百枚或ハ貳百枚たるへし。其外ハ此以前之如く相計可申事。

増加

一，南蠻人子孫不殘置詳ニ堅可申付事若令違背殘置族有之ニおゐてハ其者ハ死罪一類之者ハ科之輕重ニより可申付事。

一，南蠻人長崎ニ而持候子并右之子共之内養子ニ仕族之父母等悉雖爲死罪身命を助ケ南蠻人江被遣間自然彼者共之重而日本江來歟又者文通有之おゐてハ本人者勿論死罪親類以下迄隨科之輕重可申付事。

引書〇御触書

元和九年（1623）の追放令（日本には現存せず）をさらに強めたこの条目によって，日本

5）　日本人の海外進出は豊臣秀吉時代に続いて盛んで，ルソン・トンキン・アンナン・カンボチャ・タイなどに渡航する商人の船も多かった。幕府は海外渡航を許可するのに，朱印状を与えた。この船が朱印船である。朱印船貿易が栄えると，海外に移住する日本人も増え，南方の各地に自治制をしいた日本人町がつくられた。中でも駿府出身の山田長政（？～1630）はアユタヤ（タイ）朝の王室に重んじられ，日本人町の長や隣国リゴールの太守（長官）となったが，政争で毒殺された（石井172）

人がポルトガル人，およびその家族（日本人の妻，混血児），関係者と接触する道はほぼ完全に断ち切られたわけです。

続く最後の鎖国令と呼ばれている第五次のそれは，寛永十四～十五年（1637～1638）にかけての島原の乱後に発布されております。これは藩主の苛政と，信仰（キリスト教）の弾圧という，両面に対して抵抗した農民一揆であり，天草の原城に立てこもった天草四郎時貞を首領とする三万余の一揆勢は二月の攻防のあと，約十二万の幕府軍の総攻撃によって全滅したのです。

いずれにしても，これによって幕府はキリスト教をますます怖れて，1639（寛永十六）年七月，ポルトガル船の来航を禁じる次の三ケ条（第五次鎖国令）を発令するのです。

寛永十六卯年七月四日

太田備中守御前江被告出御用之學書被渡下所謂御当家令條ニハ肥前長崎制札トアリ

條々

一，日本國被御制禁候切支丹宗門之儀乍存其趣弘彼宗之者今ニ密々差渡之事。

一，宗門之族結徒黨企邪儀則御誅罰之事。

一，伴天連同宗旨之者かくれ居所江彼國よりつけ届物送りあたうる事。

一，右因茲自今以後かれうた渡海之儀被停止之畢此上若差渡ニおゐては破却其船并乗來者速可被處斬罪之旨所被仰出也仍執達如件。

寛永十六年卯七月五日

對馬　守在判
豊後　守在判
伊豆　守在判
加賀　守在判
讃岐　守在判
大炊　頭在判
掃部　頭在判

ここに至ってポルトガル船（ガレウタ船）の来航はまったく差し止められて，天文以来，一世紀つづいたポルトガル船の対日貿易は完全に終止符が打たれたわけです。この旨は早速，中国，オランダへも伝えられ，これによって鎖国の体制は一応整備されたことになります。

オランダ商館出島へ　前述したように島原の乱後，幕府はさらに禁教と鎖国令の補強を計り，これまで平穏無事にいたかに見えたオランダ人にもその矛先は向けられました。第五次鎖国令によって来航を禁じられたポルトガルの東洋貿易の拠点，マカオは，通商再開のために翌寛永十七年（1640）5月17日，長崎に使節を派遣しますが，幕府は，使節と主な乗組員61人を斬って首級をさらし，残りの13名をマカオに追い返し鎖国令を厳重に実施する姿勢を見せています。その三ヶ月後の9月26日，平戸のオランダ商館にキリシタンの取締まりで辣腕を揮った，大目付井上筑後守政重がやってきて，商館の取り壊しを命じたのです。理由は，最近増築した石造倉庫の前面破風に，オランダ東インド会社の紋章とともに，建築年を示す1639年という西洋紀元の年号を記したことを表向きは咎めたものでした。

使節は我々を呼び，次のように言った。「皇帝は貴下がポルトガル人と同様キリシタンである，との確かな報告を受けている。貴下は日曜を守り，キリスト生誕の年をわれわれの國の一般の人々から見える貴下の家の破風に書いている。十戒・主の祈り・洗礼・晩餐礼・旧新約聖書・モーゼ・予言者・使徒などを信じている。…そこで皇帝は私に，上記の年号の入っている貴下の住居を，一つも例外なしに取り壊わさせるよう命令した。…オランダの商館長は，今後一年以上日本にとどまってはならず，毎年交代するように。これはマカオの人々の場合に行っていたのと同様で，国民と長い間接触して，教えを弘めないためである。...」我々は皇帝の禁令に対して，「承知した」という以外に何も言ってはならず，これについて要求したり，返事をしたりするのは，後で行わねばならないことを知っていたので，冷静に度量をみせて，しかし恭しく「皇帝が我々に命令したことに，すべて正確に従うだろう。」と応えた。

（永積[1]　429）

こうして翌（1641）年5月，彼らは32年間にわたって住み慣れた平戸を離れて，ポルトガル人が追放されて空家になっていた「筑島」（出島）に商館を築いて移転，ここに「鎖国制度」は完成されたわけです。

ところで先に第四次鎖国令（寛永十三年＝1636）によってポルトガル人および日本人の妻，更にその間にできた子供を，マカオに追放したことを述べましたが，幕府はこれでもまだ安心できなかったのでしょう，これまで取り締まりの圏外にあったオランダ系在留民ならびに混血児をジャワのバタビア（現ジャカルタ）に放逐したのです。

寛永十六（1639）年十月，平戸からオランダ船ブレダ号が出帆しましたが，この船には乗組員の外に在留オランダ人や其の妻子三十一人が乗っていました。この三十一人は，同年二月二十一日に発令された「外人取り締まり規則」に基づいて，ジャガタラに追放される人々で，

この中に長崎築町の住民で当時十五歳の娘お春とその母・姉の姿もありました。

お春の洗礼名はジェロニモ・マリナといい，酒屋町在住の峯七兵衛の姉マリアと，ポルトガル船の航海士でイタリア人のニコラス・マリンの間に生まれています。ジャガタラ到着後の六年，二十一歳になったお春は，東インド会社の事務員補で平戸生まれの青年シモン・シモンセンとバタビアの教会にて挙式，夫の仕事上の成功，昇進もあって幸福に暮らし，夫との間に四男三女をもうけたのでしたが，しかしこの幸せも長くは続かず，夫の死（1672年）後，七人の子供のうち三人が早世し，裁判官に嫁いだ長女のマリアもまもなく未亡人となっています。

1648年，長崎に来たオランダ商館長の伝えるところによれば，ジャガタラに移住した日本人のうち，男子はほとんど死亡して，わずかに三名か四名の婦人が生き残っているだけだった（岩生 367）といいます。

このような祖国や，肉親との絆を絶たれた人たちが，その望郷の思いを切々と綴って故国に書き送った手紙が，世にいう「ジャガタラ文」[6]であります。これらの人々は「鎖国」という非情な国策による痛ましい犠牲者でありますが，平戸から出帆のおり，親族・知人たちは，三味線，太鼓等で涙ながらに見送った，との記録が残っているのです。「長崎物語」（梅木三郎作詞，佐々木俊一作曲）という，かつて愛唱された歌謡曲は，オランダ屋敷という言葉によって醸し出される異国情緒とともに，お春によって代表される，これら祖国を追われた人々の哀切な生涯を今も我々に語り伝えています。

一，　赤い花なら　曼珠沙華
　　阿蘭陀屋敷に　雨が降る
　　濡れて泣いてる　じゃがたらお春
　　未練な出船の　ああ鐘が鳴る
　　ララ鐘が鳴る

　　・・・・・・・・・・・・

四，　平戸離れて　幾千里
　　つづる文さえ　つくものを
　　なぜに帰らぬ　じゃがたらお春
　　サンタクルスの　ああ鐘が鳴る

6）　西川如見が『長崎夜話草』の中で紹介しているものは，如見の創作の手が入ったものであるが,しかしそれらは「ジャガタラ文」の一部と考えられている（『日本歴史大辞典』２，小学館，2000年）。西川如見「長崎夜話草」『町人嚢・百姓嚢・長崎夜話草』（岩波文庫，昭和22年），230～238参照。

ララ鐘が鳴る

出島から見た「世界」　出島は長崎港の中に築造された三千九百六十九坪（約1万538平方メートル）の面積を持つ扇型の人口の島であります。寛永十一年（1634）幕府が長崎の有力町人25人に命じて築かせ，寛永十三年（1639）に竣工し，ポルトガル人をそこに移したのですが，島原の乱のあと，寛永十六年（1639）の「第五次鎖国令」によってポルトガル人とその妻子である日本人が悉く追放されて空家になっていたことは先に述べました。年間の賃貸費は銀五十五貫で，建築費用を出した二十五名の出島町人に支払われ，これはオランダ商館の年間総支出の10～12パーセントに相当したそうで，相当な負担であったわけです。

出島は明治三十七年（1904）港湾埋め立てによって消失し，もはや往時の姿を目の当たりにすることはできませんがしかし，日本，オランダをはじめ，世界各地の博物館などには，内外の職業画家や，その他の人が描いた絵図が現存していて，かつての優雅な姿を想像することができます。中でも1990年長崎市の出島史跡整備審議会の刊行した『出島図－その景観と変遷』によって我々は，内外の資料から厳選した二百数十点の絵図を目にすることができるのです。その一部を見てみましょう。

北側に，島と長崎の町を結ぶただ一本の橋（出島橋）があり，西端に水門と荷役場があって，異国船の運んだ積み荷がここから運び入れられる（右図参照）。しかし，この辺りは浅瀬で大船は近づくことができないために，沖合いで停泊し，その船と出島の間を「バッテイラ」と呼ばれた艀（はしけ）（小舟）が行き交いして「人」と「荷物」を運んだようです。

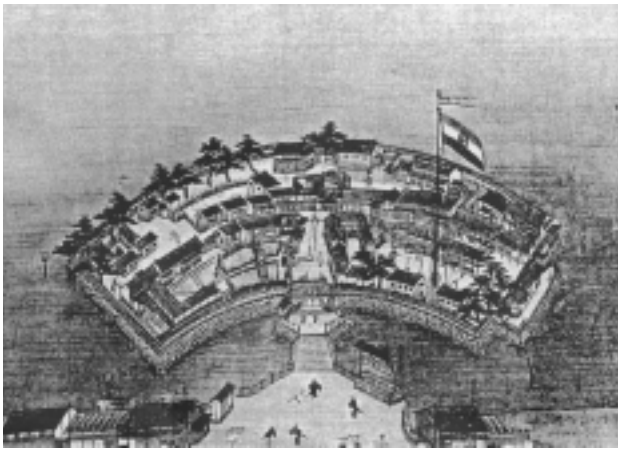

図１　円山応挙「長崎港之図」部分　長崎県立美術博物館蔵

入港・検使の手続きにおいて最も重要視されたのは次の四つの書類でした。

1. 異国風説書
2. 乗船人名簿
3. 積荷目録
4. 横文字封之物

これらの書類を受け取った奉行所は直ちに通詞[7]（通訳）に回し翻訳が命じられたわけですが，中でも1.の異国風説書は，来航する唐とオランダの両国に報告を義務づけられました。オランダ商館長が提出する「異国風説書」は「オランダ風説書」と呼ばれ，こうして海外，ことにヨーロッパの情報（国際情勢）を掴むために幕末の開国時に至るまで重要視されたわけです。

次の例は寛永十八年（1841）の風説書，第一号とされているものです。

（譯文）

一六四一年七月二十四日「寛永十八年六月十七日」

兩船[(1)]から手に入った書類並びにレヘモルツス君[(2)]の書翰を通讀して，ポルトガル人がカンボヂヤに居住し，土着人並びにシナ人を用ゐて再び手早く當地に通商する計畫をしてゐることを知り，風説「nieuws」として（正確ではないが）奉行に報告した。奉行はこの報告に非常に満足したやうで，長い文書を作り，通詞三人と會社の通詞二人とが誓約して，我らから聞いた風説「novos」である旨を記して署名した。今後はこのような風説については何も言はぬ方が適當ではないかと考えた。

十月二十八日「九月二十四日」

これより先，二十二日に通詞が我々に話したところによれば，皇帝陛下に對する我らのなし得る最大の奉仕は，ポルトガル人およびイスパニア人が宣教師やその他を用ゐ，秘密に日本に於て行はうとする事件を報告することである。カンボヂヤのことについて我らが明らかにしたことは，その意にかなひ，宮廷に於て皇帝陛下と重臣連がその眞相を悉く諒解したであろう。

十一月八日「十月六日」

さらにまた今，書翰（3）および口頭で得た海外の情報を奉行に通知し，これを出來るだけ多く誓約した通詞にも話した方がよいと命ぜられた。

「註」阿蘭陀商館長 Maximilian le Marie および Jan van Elseracq の日誌より採録。

（1）両船名は Roch，Orangieboom.

（2）Pieter van Rogemortes. カンボヂヤのオランダ商館長。

（3）此の頃の風説書原上の方法は，一部を文書に認め，一部は口頭でしたもののようである。

7） オランダ通詞の数は多いときは百人を超えた。世襲制であり，その職階は細分化され，大・小通詞，小通詞助，小通詞並，小通詞末席，稽古通詞などで構成されていた（岩生387－388）。唐通詞の場合も事情はまったく同じであった。

商館長　Maximilian le Marie（14 Feb. 1641～Oct. 1641）
長崎奉行　馬場三郎左右衛門利重，柘植平右衛門正時
入津蘭船　九艘

（日蘭学会上巻 3－4）

なお，一年に一度，夏の間，季節風に乗って積み荷を運んでバタビアと出島を往き来するオランダ船の船長，および船員は，臨時の滞在であったわけですが，商館に常駐する館員には次の人々がいました。

１．カピタン（商館長）２．コープマン（ヘトル＝副商館長）３．デイスペンシール（荷倉役）４．シキリーバー（筆者頭）５．オップルメイストル（上外科）６．オンドルメーストル（下外科）７．ニゴシーブックホウドル（簿記役）８．ホフメーストル（料理人）９．テンムルマン（大工）の他，縫物師，鍛冶師，バター製造人なども見られたと言います。

また，出島に出入りする日本人は，
１．出島町人（出島乙名）…出島の所有者・管理人　２．阿蘭陀通詞（常駐２名）３．（貿易期間中）長崎奉行検使・役人・町役人大勢　４．コンプラドール（諸色売込人）５．大工・伊万里商人　６．遊女・禿（かむろ）などでした（片桐[1] 217－218）。

商館長は一年交代が原則でしたが，必ずしも守られたわけではなく，やむを得ない事情で七，八年滞在した商館長も何人かいました。例えばヘンドリック・ドウーフ[8)]は，フランス革命後の1795年以来，オランダ本国がフランスの治下にあった間，交替，迎えのない船のないまま出島に留まり，1808年のフェートン号事件[9)]，1813・14年イギリス東インド総督ラッフル

8）　Hendric Doeff（1777～1835）。ヅーフとも。1799（寛政十一）年筆者頭として来日。1803（享和三）年11月～17（文化十二）年12月まで商館長。アムステルダム生まれ。当時オランダは戦乱下にあり，1809年以降派船は途絶え，以下本文及び注で述べるような幾つかの困難の続く中で商館を維持した。また「ドゥーフ（ヅーフ）ハルマ」を編纂。17年離日した。著書『日本回想禄』。

9）　イギリス軍艦フェートン号は，敵国となっていたオランダ船を追い，オランダ国旗を掲げて長崎に入り，オランダ商館員を捉えて人質にし薪水・食糧を強要して，やがて退去した。この当時ナポレオンのフランスと戦っていたイギリスは，フランスの属国となっていたオランダが東洋各地に所有していた拠点を奪おうとしており，ラッフルズの出島奪取計画と同じく，この事件もイギリス・フランス間の戦争の余波と看做される。

ズ[10]の出島奪取計画などを冷静に切り抜け，合間に通詞を指導し，その協力で蘭日辞典（ドゥーフ・ハルマ）を編纂して日本の蘭学発展に大きく貢献しました。

また商館付きの医師たちもまた阿蘭陀通詞や日本人医師に大きな影響を及ぼしました。これらの医師たちは，オランダ以外の国から公募によって来日した人が多いことも特徴的ですが，

中でもケンペル[11]，ツュンベリー[12]，シーボルト[13]は「出島の三学者」として，滞在中は熱心に蘭学者を育成するとともに[14]深く日本を研究し，かつ資料・情報を集め，帰国後は著書を発表して広く日本を世界に紹介したのでした。

長崎貿易　オランダ船がもたらす積荷には，生糸，絹織物などの中国（清）商品を仲介したものや，オランダ本国で織られた金糸・銀糸，羅紗などの毛織物，薬品，医療器具，砂糖，辞書・年鑑などの書籍や，時計，「遠目鏡」（望遠鏡），「鼻目鏡」，硝子器，その他ありとあらゆる「珍奇なもの」が含まれていましたが，一方日本からは，銀，金（小判），銅が主で，樟脳，陶磁器，銅や漆細工物，青貝細工などをわずかながら輸出しています。

対中国貿易では，17世紀半ば（1644）に明が滅び，これに変わって清が長崎へ来航し，年々貿易額が増えています。清船は，清國産の生糸，絹織物，書籍の他，ヨーロッパからの綿織物，毛織物，南洋産の砂糖，蘇木，香木，獣皮，獣角などをもたらし，日本の輸出品は，銀，銅，海産物などが主であったようです。またオランダ人が出島に商館を構えたのに対して，清国人

10）　トーマス・スタンフォード・ラッフルズ Thomas Stamford Raffles（1781～1826）。イギリスの植民地政治家で，シンガポールの建設者。極東における大英帝国の発展に寄与したが，それまでの重商主義的植民政策がアジア各地の原住民の利害を無視して行われていたのを改め，啓蒙主義的で人道的なやり方を取り，原住民社会の福祉を増進することを目的の一つとした。信夫清三郎『ラッフルズ伝』東洋文庫，昭和43年参照。

11）　Engelbert Kaempfer（1651－1716）。ドイツ人医師・旅行家。レムゴー生まれ。ヨーロッパ各地で学んだ後，スウェーデンのロシア・ペルシャ両国への使節団に加わり，ついでオランダ東インド会社艦隊の軍医となり，1689年バタビアに来着。90年（元禄三年）長崎につき，92年までの商館在任中，91・92年の二度江戸へ参府。オランダ通詞今村源右衛門を助手にえて日本の政治・社会・風俗・蚕業・動植物・鉱物などを研究。その成果の大著「日本誌」は死後，まず英訳本で出版された（『日本史広辞典』742）。

12）　Carl Peter Thunberg（1743－1828）。ツンベリ，ツンベルク，トゥーンベリとも。スウェーデン人医師・植物学者。イェンヒュービング生まれ。ウプサラ大学のリンネのもとで動植物学・医学を修め，1771年オランダ東インド会社の船医となり，喜望峰・バタビアをへて75年（安政四年）来日。76年まで長崎商館医を勤めた。通詞らに医学・薬学・植物学を教え，江戸参府の際も多くの学者の訪問を受けた。多数の植物標本を持ち帰り，学名をつけて分類した。「日本紀行」のほか植物誌・植物図等の著述がある（『日本史広辞典』1642）。

13）　Philipp Franz Jhon kher Balthasar von Siebold（1796－1866）。ドイツ人医師・博物学者。ビュルツブルク出身。1823年（文政六年）オランダ商館付医師として長崎に着任。日本の歴史・地理・言語・動植物などを研究。翌年成滝塾を開き，診療のかたわら岡研介・高良斎・二宮敬作・高野長英ら数十人の門人に医学・博物学を教授し，蘭学発展に寄与した。26年商館長に従い江戸に参府，桂川甫賢・大槻玄沢・高橋景保らと交流。28年の帰国の際，いわゆるシーボルト事件がおこり，翌年国外追放。59年（安政六年）オランダ商事会社顧問として再来日。江戸幕府の外交に参与し，62年（文久二年）帰国。ミュンヘンで没した。著書「日本」「日本植物誌」「日本動物誌」（『日本史広辞典』1019）。

14）　オランダ商館の医師たちと日本の通詞，あるいは医者たちとの交流によって生まれた「蘭学」は，明治維新後，西洋の近代科学・技術を導入する際，それらをスムーズに摂取・吸収する土台，下地となったと考えられる。これもまた，「異文化の交錯」から生まれた大きな結実と言えるであろう。

もまた後に，「唐人屋敷」と呼ばれる居住区を長崎の町内に持つようになりますが，それは元禄二年（1689）四月のことでした[15)]。

鎖国の中の「開国」　これまで見てきたように，幕府は，寛永年間の五度の「鎖国令」の後は，長崎・出島のみに貿易，海外通商を一手に集中することによって，これらの貿易・外交を独占し，幕藩体制を固めたのでした。

しかし注意すべきは，「鎖国」という言葉が，國を鎖ざすという意味ならば，ここでは必ずしも完全に國を鎖ざしたわけではない，ということです。しかも交渉相手も，これら長崎・出島のオランダ，中国のみに限らず，朝鮮，さらに琉球とも「通信使」を交換し，貿易を行っているのです。そもそも寛永十年（1633）から十六年（1639）までに出した法令の中にも一度も「鎖国」という言葉は使われていませんし，今でも正式には『徳川禁令考』という本の中でしか「鎖国令」なるものの全体を知ることはできません。要するに，もともと「鎖国」という言葉が使われるようになったのは，先ほど述べたオランダ商館医ケンペルが著した『日本誌』の中の一章を，幕末の蘭学者・志築忠雄（1760～1806）が訳出し，『鎖国論』（享和元年＝1801）という著書を出して話題になったことに由来しているのです。

元の章題は「今の日本が全国を鎖して，国民をして国中国外に限らず，敢えて異域の人と通商せざらしむる事，実に所益あるに与れりや否やの論」（志築訳）というはなはだ長いもので，これを約めて「鎖国」とした（小堀 59-60）わけですが，ケンペルの原著は，むしろ鎖国の妥当性を論証するものでした。

ともあれ，日本人の海外渡航は不可能になったが，この出島を通じて世界との貿易・通商，人や物・情報の交流は完全には閉ざされてはいなかったわけで，出島は「異文化接触・交流の舞台」であり，二つの異なる文化が交錯して互いに変容を遂げる劇的空間というに相応しい，格好の場を提供することとなったわけです。完全な鎖国でも，開国でもない，この特殊な体制を「鎖国の中の『開国』」（鶴見・春名3）と名付け，この章の副題にした理由もまた，その辺りにあるのです。

参考文献：

（*印は，本章で引用・言及した文献を示す）

*会田雄次『ルネサンス』世界の歴史12，河出書房新社，1989年

*朝尾直弘[1]『鎖国』日本の歴史17，小学館，1977年

*――――[2] 他編集『日本歴史大事典』1～4，小学館，2000～2001年

15）　唐人屋敷は長崎港沿岸の十善寺御薬園に建設された。また方形の「唐人荷物蔵」が，「出島」と同じく長崎湾内に作られたが，敷地は60年後の宝暦期には総坪数9300余坪（大庭 128）となり，出島の二倍以上の規模であった。

*石井進他『詳説日本史』山川出版社，2003年
板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館，昭和34年
井上光貞他『詳説日本史』山川出版社，1988年
*岩生成一『鎖国』日本の歴史14，中央公論社，昭和48年
*大場脩『漂着船物語-江戸時代の日中交流』岩波新書，2001年
*片桐一男[1]『開かれた鎖国』講談社現代新書，1999年
————[2]『出島--異文化交流の舞台』集英社新書，2000年
上垣外憲一『「鎖国」の比較文明論』講談社，1994年
加藤栄一「出島論」『岩波講座・日本通史』第12巻・近世2，岩波書店，1994年）
————・山田忠夫編『鎖国』講座日本近世史2，有斐閣，昭和56年
川勝平太編著『「鎖国」を開く』同文館，平成12年
ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみた日本』NHK ブックス，1996年
*小堀桂一郎『鎖国の思想--ケンペルの世界史的使命』中公新書，昭和49年
五味文彦他『詳説日本史研究』山川出版社，2003年
*信夫清三郎『ラッフルズ伝』平凡社・東洋文庫，昭和43年
白石一郎『サムライたちの海』NHK 人間講座テキスト2001・8～9月期
*鶴見和子・春名徹「《対談》開国と漂流民群像」『石井研堂これくしょん 江戸漂流記総集』第五巻，日本評論社，1992年，2～61
*『出島図--その景観と変遷』長崎市出島史跡整備審議会編・改訂版，中央公論美術出版平成２年
*『徳川禁令考』法制史学会編，石井良助校訂，前集第六，創文社，昭和34年
*徳富猪一郎『近世日本国民史』第十四巻・徳川幕府上期上巻・鎖国篇，時事通信社，昭和39年
*永積洋子(訳)[1]『平戸オランダ商館日記』一～四，岩波書店，昭和44～45年）
————編[2]『「鎖国」を見直す』（山川出版社，1999年）
————[3]『朱印船』（吉川弘文館，2001年）
————・武田万理子編『平戸オランダ商館・イギリス商館日記--碧眼の見た近世日本と鎖国の道』そしえて，1981年
*西川如見『町人嚢・百姓嚢・長崎夜話草』岩波書店，昭和22年
*日蘭学会編・法政蘭学研究会・岩生成一監修『和蘭風説書集成』上・下巻，吉川弘文館，昭和54年
*日本史広辞典編集会編『日本史広辞典』山川出版社，1997年
フォス・美祢子編訳『幕末出島未公開文書－ドンケル＝クルチウス覚え書』新人物往来社，1992年
村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記』一～三，岩波書店，昭和31～33年
村川堅太郎他『詳説世界史』山川出版社，1994年
山口啓二『鎖国と開国』岩波書店，1997年
山本博文『鎖国と海禁の時代』校倉書房，1997年
山脇悌二郎『長崎のオランダ商館』中公新書，昭和55年
横田冬彦『天下泰平』日本の歴史16，講談社，2002年
和辻哲郎『鎖国--日本の悲劇』上下，岩波文庫，1997年

図録

『週間朝日百科23 日本の歴史・中世から近世へ－③キリシタンと南蛮文化11/3」朝日新聞社，2002年
『週刊朝日百科29 日本の歴史・中世から近世へ－⑨出島と唐人町12/15』朝日新聞社，2002年

第二章 捕鯨船と漂流民（その１）

Ⅰ．宝順丸の漂流とモリソン号事件

大船建造禁止令　慶長十四（1609）年，幕府は西国諸大名に対して大船の所有を禁じ，五百石積以上の船を淡路島に廻送させて焼き沈めたことは既に第一章の「出島からみた『世界』」のときに少し触れましたが[1]，ある意味では，このとき日本の「鎖国制度」が完成したと言ってもよいくらい，これは日本の海運史における大きな出来事だったと考えられるのです。なぜなら以後，日本の海運業は御朱印船と呼ばれた頃の，あの海外雄飛，遠洋航海をも可能にしたほどの優れた造船術と航海術[2]を失って，元々瀬戸内海などの沿岸航海に適した「弁才（べざい）船」と呼ばれる，小規模な一本帆の船型に次第に統一されていくからです。

寛永十二（1635）年，「第三次鎖国令」で日本船の海外渡航が一切禁止されたあと，そのほぼ一ヶ月後の六月二十一日，江戸城大広間では武家諸法度の第十七条「五百石以上之船停止之事」という法文が諸大名に向かって読み上げられます。これが有名な「大船建造禁止令」ですが，しかし翌々年の寛永十五（1638）年，除外例が適用され千石積みが一般民間に許可されることになりました。これより必ずしも千石積めなくとも大船のことを「千石船」と呼ぶようになった所以です。

ところで幕藩体制が確立した江戸時代の中期（享保時代＝1716～35年）には，都市が発達して生産技術が向上した結果，産業が勃り，商品の流通が活発になってきましたが，それに伴う多量の物資の輸送には，陸路より海路の方が便利だったために海運業が著しく発展しました。樽廻船や，菱垣廻船と呼ばれた瀬戸内海を通る定期の貨物船が，米や醤油を運んで江戸-大阪間を往き来し，また蝦夷地（北海道）の松前藩や東北地方の物産（ニシン，昆布）と，北陸の縄，筵や，大阪の酒，塩，雑貨とを交易する西廻りの船－船の回漕が北陸出身の船頭に任されていたので――は北前船（北国船）と呼ばれました。しかしながら海難事故－これから取り上げる漂流はその一形態なのですが――が多発するようになったのは，正にそのような①廻船業をめぐる時代背景②和船の構造と規模③日本近海の海流と気象条件という，三つの要因が複合的に作用として起きたのであり，元を質せば鎖国政策という制度の副産物，つまり，人為的に引き起こされた事故であって，決して純粋な天災なのではありません（池田1－2）。

長者丸の遭難　天保十（1839）年十一月，北前船の一つ，越中富山の長者丸（六百五十石積み，船頭平四郎，十人乗り）は，仙台唐丹（唐二）港の沖合いで嵐に遭遇し，操縦不能に陥っ

1）　拙論第一章89頁参照。

2）　「かつて鎖国以前に遠洋航海に使っていた天体航法などは，国内海運まで普及しないうちに消え失せ」て「これらの回想船は沿岸にそって，陸上の目標を頼りにしながら，いわゆる山見航法に頼る外なかった。ひとたび暴風雨に遭って太陽に吹き流され，日本の山や島影を失うと，最早自分の位置を判断する何の手だてもなくなってしまう」（池田２）。

て漂流を始めます。乗組員は六ケ月の間，飢えと渇に苦しみ，この間，炊（かしき）（賄い方）の五三郎が渇死し，次いで善右衛門（片表＝碇揚げ下ろし）が病死し，更に航海長金六が難破の責任を感じて投身自殺したあと，残った七人は翌年四月アメリカの捕鯨船に救助されています。この船は「ゼンロッパ号」（ジェームス・ローパー号），船長は「ケッカル」（オベット・キャスカート）と言ったと漂流民が後に語っているのですが，彼らは手厚い看護を受けて健康を回復し，それからハワイ，カムチャッカ，オホーツクと捕鯨の手伝いをしながら航海するのです。更に彼らは太平洋を横断してアラスカ南東部のシトカへ運ばれ，四年後の天保十四（1843）年，シトカから再び太平洋を横断した後，エトロフ島に上陸，松前藩に引き渡されて江戸表で取り調べを受けたあと何と六年も抑留されて富山に帰郷を許されたのが嘉永元（1849）年10月，漂流以来，実に十一年を経過してこのとき生存者は「六兵衛（追廻し），次郎吉（同），金蔵（炊）」の三人のみでした。この事件は後に述べるジョン万次郎やジョセフ彦蔵の場合よりはるかに早く，アメリカ捕鯨船と日本の漂流民の接触した最初の例として注目され，その後江戸時代の漂流の記録を集めた『異国漂流奇談集』（石井研堂校訂，1927年）の中に「時計献上の漂民」という題で収められましたが，しかし採録は一部だけで，全文は，『蕃談』（平凡社東洋文庫＝口語訳）あるいは「時規物語」（10巻25冊（前田家尊経閣文庫，『日本庶民生活史料集成・第５巻』）等に拠らなければなりません（参考文献参照）。

宝順丸とモリソン号事件　長者丸の場合もそうですが，漂流の記録というのは，生き残って帰還できた人々がいたからこそ，その事件の外貌が明らかになったわけです。しかしながら，これが不幸にして生還できず，海の藻屑と消えた人たちの場合，なんの手がかりもなく，ただ行方不明者として扱われ，ついには死者としてその名が葬られたであろうことは想像に難くありません。そうした例はこの鎖国時代におそらく無数にあったことと思われるのです。彼らは，歪んだ体制の最も悲惨な犠牲者なのですが，次に取り上げる宝順丸の例は，生存し祖国を目前にしながら，ついに帰郷できず，異郷で一生を送った漂流民の例です。従って前記のような漂流民の記録を集めた本の中にも収録されることなく，詳細はごく最近まで知られていませんでした。以下の記述はその大部分を，川合彦充『日本人漂流記』（昭和42年）と春名徹『にっぽん音吉漂流記』（1979）に拠っています。

天保三年（1832）十月十日，尾張の國知多郡小野浦（現愛知県知多郡美浜町小野浦）の樋口重右衛門の船，宝順丸（千五百石積み，船頭樋口重右衛門）は，尾張を出て遠州灘にて遭難，漂流[3]が始まります。この船は裏日本を代表する北前船に対して表日本を代表する，尾張廻船として大坂で積んだ米を江戸に運ぶ途中でした。この事件で特徴的なのは，漂流が十四ケ月にも及んだことで，このように長期間にわたる例は，漂流史でも珍しい方だと言います。とも

3）　鹿島灘，遠州灘，熊野灘が「名うての難所」として知られていた。

あれ宝順丸は，この間太平洋を横断してアメリカの西海岸のフラッタリー岬に漂着したわけです。これはカナダとの国境に近く，ワシントン州のバンクーヴァー島の少し南で，コロンビア河沿岸のポートランド（当時アストリア）から200キロ遡った場所です。このとき生存者はわずか三名に過ぎず，彼らはこの地方に住むアメリカ先住民（エスキモー？）[4] に救助されるのです。ここで三人がほとんど奴隷のような扱いを受けていたことを伝え聞いた，アストリアを基地とするハドソン湾会社[5] のマックニールという船長によって買い戻されて同社の支店長ジョン・マックラフリン博士に保護されたのでした。

こうして英国人の手にわたった三人は，岩吉（二十九才？），久吉（十六才？），音吉（十五才？）で，日本人漂流者送還を利用して日本との通商交渉を始めるように政府に働きかけようと考えたマックラフリンによって彼らはイギリスのロンドンに送られるのですが，しかし当時の英国は，清国政府との間に阿片問題を抱えていて，対日交渉には消極的でありこの提案は取り上げられ実行されるにはいたりませんでした。結局三人は，1835年12月，ハドソン会社の費用でアフリカの希望峰を経由してマカオに送られたわけです。ここで彼らはギュツラフ[6]というイギリス貿易監督庁勤務の中国語通訳官の元に預けられ，語学の天才と呼ばれた彼に日本語を教えたり，彼の聖書の日本語訳を手伝ったりする間に，新たに肥後川尻の船長庄蔵ら，四人の漂流民が加わることになったのです。

紆余曲折の末，これら七人がモリソン号という，アメリカの貿易商社オリファント[7] 社の船で祖国へ送還されることになったのは，1837年（天保八）7月3日のことであり，音吉ら宝順丸の者にとっては5年ぶり，庄蔵ら肥後組にとっても2年ぶりのことでした。同乗者は船長のデヴィッド・インガソル，オリファント社のキングとその妻，さらに宣教師で自然科学者のサミュエル・ウェルズ・ウイリアムズ（1812～1884），医師のピーター・パーカー（1804～1888）ら総勢38人。7月4日，モリソン号はマカオを出て那覇を経由，7月30日早朝，遂に房総半島の州崎沖を通過し，やがて野比村（現横須賀市野比）沖に停泊したのです。医師のパーカーは次のように書き残しています。

4） この人々は食器に「小便を仕込み，その便水で顔を洗ったりする，という珍しい風俗をもっていた」ことから「エスキモー系の住民だったのではないか」（春名35）と推測されている。

5） Hudson's Bay Company。北アメリカの毛皮取引と，その本国への輸出を目的として1670年に設立されたイギリスの特許会社。毛皮貿易の権益をカナダ政府に委譲する1869年まで，事実上，カナダ貿易を独占した（『世界大百科事典』平凡社，1990）。

6） Carl Friedrich August Gutslaff（1803－51）。「ドイツ宣教師，東洋学者，最初の聖書邦訳者。漢名，郭実猟。オランダ伝道協会からバタビアに派遣されたのちにシンガポール，タイさらにマカオに移る。1835年，R.モリソンの跡をついでイギリス商務省監督官，通訳として浦賀に来航，日本との通交を図ったが，拒まれてマカオに帰着。漂流民から習得した日本語により，同年邦訳の《約翰ヨハネ福音之伝上中下書》をシンガポールで刊行した」（同上）。

7） オリファント社は「アヘン取引を行わない唯一のアメリカ商社であ」（春名93）った。

「七人の漂民たちはふたたび祖国の海岸を見て非常に喜んでいた。彼らは船首からつき出した斜檣に腰を下ろし熱心に『父なる地』に眺め入っていた。なじみのある岬や，島や山を見つけるたびに歓喜の声があがった。間もなくこの世でもっとも親しく，しかも長い間，別れていた人々に会えるのだと考えて，彼らの気持ちが浮き立っていることは疑いもなかった」（春名 109－110）

ところがこの歓声も束の間，正午ごろ，もやに視界を遮られたモリソン号の乗員は遠くで砲声を聞いたように思い，沈まり返りました。しかし砲声は次第にあちこちから聞こえだし，もやが晴れてきてもはや疑う余地もなく，周囲の沿岸の砲台三カ所から発砲されたことがハッキリしたのです。モリソン号が先に述べた野比沖に投錨したとき砲声は止んで，小舟が一隻近づいてきた。さらに漁船が取り巻いてきて大勢の見物人が押し寄せてきた，といいます。役人の手下らしき人物に交渉を依頼するメモを渡したがその日遂に役人は現れなかったそうです。翌7月31日は，彼らにとって忘れ得ぬ「悲運の日」となったのでした。

夜明けとともに砲撃が開始されて，前日の砲門に加え更に四つの大砲が運びこまれており，それらが一斉に火を噴いて，ついにその一発が船の前部に命中するに至るのです。幸い負傷者はいなかったが，「この一瞬は決して忘れることはできない」とパーカーは記しています。江戸湾を離れたモリソン号は鹿児島湾に姿を見せますが，結果は同じ事でした。漂流民を上陸させて交渉させたもの，薩摩藩は彼らの受け取りを拒絶し，砲撃を加えてきたのでした。

何故攻撃されたのか，モリソン号の日本人漂流者も，また同乗の外国人にも理解できなかったのですが，これは要するに十二年前の文政八（1825）年二月二十五日に出た「異国船打払令」が忠実に実行されたに過ぎなかったのです。

8月13日，帆影悄然とモリソン号は鹿児島湾を退去し，マカオに向かって帰航の途についたのでした。8月29日，マカオに到着したとき，まるでモリソン号の不成功を悲しむように雨が沛然として降りしきっていた，といいます。

しかしながらこのときの幕府の対応を批判した洋学者，渡辺華山（1793～1841），高野長英（1804～50）らがやがて弾圧され，捕縛されるいわゆる「蛮社の獄」（天保十年＝1839）に発展するのですが，いずれにせよ，このモリソン号事件は，幕府の対外政策の分岐点であったとみなされ，「打ち払い令」という強硬政策を廃して，天保十三年（1842）の「天保薪水令」へと改められることになるのです。

さて二度も砲撃されて帰国を断念した音吉ら七人のその後の運命はどうなったのでしょうか。それぞれが，生きる術を求めて異郷で数奇な一生を送っているのですが，彼の地で成功し家庭を持つものも少なくなく，物質的には必ずしも不幸ではなかったものの，それは決して幸福な生涯とは言えなかったと思われるのです。

上海のイギリス系貿易会社（デント商会）[8] に勤めて成功し，インド人の妻を娶った音吉の場合，自分自身の帰国は断念しましたが，その後も続々と香港やマカオに送られてくる日本人の漂流民の世話をしたり，彼らの帰国に力を尽しているのです。

嘉永二年閏四月八日（1849年5月29日）江戸湾に来航したイギリス軍艦マリナー号，更に嘉永七＝安政元（1854）年九月，イギリス極東艦隊司令官スターリングが四艦を率いて条約締結のため長崎に来航したとき，旗艦ウインチェスター号には通訳を勤める音吉の姿がありました。

さらに文久二（1862）年1月30日，福沢諭吉ら遣欧使節団が途中，シンガポールに立ち寄ったとき，音吉と名乗る人物が一行の宿を訪れた事を，福沢は日誌に記しています。彼らは音吉によってアヘン戦争（1840～42）や太平天国の乱（1851～64）など中国の事情を教えられ，日本を取り巻く世界の状況を改めて認識するのです。

さて春名徹氏の『にっぽん音吉漂流記』の結末には，次のように記されています。

それから二十年の歳月を経た1869年（明治十二年）6月28日の『東京日日新聞』に次のような記事が載った。

「尾州知多郡の産にして，四十年前亜墨利加へ漂流したる山本乙吉の子」ジョン・ダブリュー・オトソンという者が帰朝して神奈川県に入籍を願い出た，というのである。

同紙に掲載された入籍願いによれば，音吉は「一千八百六十三年上海を去り，シンガポールに赴き，其後同処にて鬼籍に入り申し候」という。

そして息子のオトソンは，

> 兼ねて私父存命の節より，私儀は日本国に帰り日本人民の籍に入り
> 候様の志願に付，日本人民の籍に入り当県へ入籍仕度，此段何卒御
> 領承被成下度様奉願候，再拝謹言

と，その入籍願を結んでいる。

混血の息子を「日本人民の籍」に入れることが，一生を流謫に送った音吉の最後の意志表示

8）　イギリス東インド会社は，18世紀末から統治していたインドでアヘン栽培・精製の専売制度を実行し，アヘンを民間のイギリス商社に売り渡し，中国に密輸入させたが，この中にはデント商会や，同様に日本開国後に横浜に出店をもち，対日貿易をリードした，大商社ジャーディアン・マセソンなども含まれる（井上143-144）。

だったのである。

この願いが受理されたかどうか否かは明らかではない（春名 250-251）。

春名氏の記述はこれで終わっていますが，私は更にこの「後日譚」として次のような事実をつけ加えておきたいと思います。

> オトソンは乙吉の長男二十二歳で，妹二人がいるが，いずれもイギリス人と結婚し，イギリス国籍となっている。かれの容貌は日本人と少しも変わらぬので，申し出に相違ないとして，神奈川県庁は入籍を許可し…（吉村昭 545ー546）

と，あるのですがしかし，話はまだこれで終りではありません。

> それから三年後，山本乙吉と改名して神戸製鉄所に勤務していたジョン，ダブリュー，オトソンが，除籍願を神奈川県庁に提出したことを彦蔵は知った。オトソンは，その願書で父乙吉がジョン・エム・オトソンという名のもとに英領シンガポールでイギリスに帰化していたことを最近知り，自分も父同様にイギリス国籍を得たい，と記していた。（吉村 546）

しかし，この願いは「いったん日本国籍になったのに除籍して欲しいというのは自分勝手にすぎる，として却下」（吉村 546）されたというのです。こうしてみると，明治という新しい時代になってもなお，「鎖国」は続いていた，と言わざるを得ません[9)]。音吉のみならず，息子のオトソンもまた他ならぬ「鎖国制度」の犠牲者に見えてくるのですが，それにしても，それからほぼ百三十年たった平成という我々のこの時代，果たしてもう「鎖国」は終わったと言い切れるでしょうか。

Ⅱ　二人の密航者－マクドナルドと吉田松陰

宝順丸伝説　日本の英学史上，最初の英語教師とされているのが，これからお話しするラナルド・マクドナルド（Ranald MacDonald, 1824～1894）なのですが，この人は正確に言えば，漂流民というより，漂流民を装って鎖国時代の日本を訪れたアメリカ人です。

ところで宝順丸が，フラッタリー岬付近に漂着したとき，音吉ら三人の生存者を救ったのは，

9）　「鎖国」時代を，「鎖国の中の『開国』」と称すれば，この時代は「開国の中の『鎖国』」ということになろう（鶴見・春名 3-4）。

ハドソン湾会社の船長であったことは既に述べたとおりですが，この項の主人公マクドナルドは，このハドソン湾会社の仲買人取締まりのアーチボルド・マクドナルド（1790～1853）を父に，付近のチヌーク・インディアンの族長の娘コム・コムリを母として生まれたという人物です。そればかりか，マクドナルドが数えで十歳のとき「日本の漂流民と会い，多少日本語を習い覚えた。そして成年に達して恋愛を経験したときに自分の出生の秘密を知り，インディアンの起源を日本だと信じたために，次第にあこがれをつのらせるようになり，ついに密入国におよんだ」（春名 45）という伝承がこのアストリア付近に残っている，というのです。

この話には「残念ながら確証がなく，単なる伝説の域を出ない」（春名 45）ようですが，しかし日本人漂流民の話はこの地に広く伝わり，幼いときにそれを耳にしたその印象がマクドナルドの心に深く刻み込まれ，それが日本渡航の動機になった，ということは十分に考えられることです。

マクドナルド自身はその回想録（『日本回想記－インディアンの見た幕末の日本』）で，宝順丸のフラッタリー漂着と，その後のモリソン号打ち払い事件の歴史に触れたあと，日本について次のように書いています。

「神秘の国日本」

> ・・・・現存の人類中もっとも古い民族。はるかな豊饒の海によって岸辺を洗われ養われる「東方の島国」帝国。驚異にみちた大洋のなかの驚異！　ちょうど反対側の岸辺に住み，はるかかなたの沖合いに探索の眼をみはるわれわれにとって，それはいつも強い好奇心の的だった。その国民はどんな国民か。その国民の生活の習慣はどんな習慣か。黄金がきらめき，もっとも貴重な財産を蔵するその比類なき富とはなにか。その国民の社会的，地域的，国民的生活とはどんな生活か。他の国民，とくに彼らの東方の隣人であるわれわれとの交際または友好的な関係に対して，彼らはどんな感情と傾向を――もしあるとすれば――もっているであろうか。（中略）
>
> 私はどれほどの努力を払っても――さよう生命それ自体を犠牲にしてでも，できるならば，この神秘を自分で解いてみようと心に決めた。（マクドナルド 46－47）

インディアンとの混血児という境遇から，就職や恋愛につまずき，幻滅を重ねるたびに，彼は太平洋の遥か彼方で頑なに門戸を閉ざしている，東洋の神秘の国・日本に憧れ，その神秘を自分の手で解いてみたい，そして吾が手で扉を開き，文明の光の中に導き入れたい，と願い，日本訪問を夢見るようになったのです。そのチャンスは以外に早くやってきました。1847年，日本潜入の計画を実行に移すべく，二十一歳のマクドナルドは，サンドウィッチ島（ハワイ諸

島の旧称）から，捕鯨船プリマス号に船員として乗り込んだのです[10]。

日本上陸　1848年三月六日，船が日本近海に入って三ヶ月間，捕鯨に励み，北海道の沖合いでようやく漁獲した鯨で満杯になったころ，マクドナルドは遂に予定の行動に踏み切ったのです。船長や他の乗組員に別れを告げ，一人ボートに乗り込み本船を離れた彼は，最寄りの島，北海道の沖合い，利尻島を目指して漕いで行くのです。彼が辿り着いたのは利尻島ではなくてそれから，南西約70キロ離れた焼尻（やぎしり）島でしたが，ここで二日間ロビンソン・クルーソーのような野営生活をした後，翌朝利尻島に近付き，沖合い5，6マイルあたりで「ボートをわざと転覆させ」（マクドナルド 69），荷物を捨て，一晩海中に漂っているところをアイヌの漁師に救助され，漂流民として島の番所に保護されます。嘉永元（1848年）六月二十七日のことでした。

長崎　マクドナルドは，利尻島から宗谷，松前を経て海路（北前船・天神丸）で，長崎に送られ，座敷牢に監禁されて幕府の役人の取り調べを受けたのです。

湾内に停泊中，船上での簡単な取り調べを終えたあと，長崎に上陸する直前，その目に映ったこの町の印象を，後年彼は次のように回想しています。

> 岸に向かって見て，港の左岸には高さ1000フィート（300メートル）もあろうかと思われる嶮しい急斜面の山があった。反対の右側の谷間に長崎の町があり，その岸はもっと急勾配になっている。
>
> 長崎は町というよりはむしろ都市というべきで，ほぼ千戸の家屋[11]がある。家々は，わが国の都市のそれに比べれば小さいとはいえ，全体として，これまで見たどの都市よりも，ましな部類に属するように思われた。
>
> 街路は幅が50フィートから60フィート（15～18メートル）ぐらいあり，中央は石で舗装されていた。
>
> 内港は長さ約4マイル（6.4キロ），幅は平均して約1マイル半（2.4キロ），その入口に島（オランダ人がペーパンベルクと呼んだ「高鉾山」）があり，港内のオランダ商館のある小さな島「出島」から約200尋くらいのところに，一隻のオランダ船が投錨していた。港内

10）　1840年から一年間，東部カナダのセント・トーマスで銀行見習いとして働いたそのあと，1842年暮れにサンフランシスコに姿を表すまで，『回想記』に書かれていないが，マクドナルドは，自らそれとは知らずに海賊まがいの私略船や，奴隷貿易船に身を投じたこともあった。また，その後1847年ハワイでプリマス号に乗り込むまでの足取りもまったく不明であるという。これらのことは，単に日本渡航の資金かせぎという理由のみで片付けられるものではなく，自暴自棄に陥っていた，その当時のマクドナルドの深刻な精神状況を示すものといえる（富田247）。

11）　「長崎の戸数と人口は，これより十年前の天保九年（1845）で，15181戸，人口27166人だったが，同年火災があり人家1393戸が焼失し」ており「マクドナルドが護送された道筋の一部が罹災地だった」（マクドナルド，219）

には大砲で武装した三隻の大型の中国帆船も停泊していた。日本の帆船の大船隊もいた。

待っている間に，役人と兵士を乗せた大きなボートが外港から近づいてきたかと思うと，岸辺に向かって通り過ぎていった。われわれの船はそのあとについて行き，石段のついた突堤（大波戸）に上陸した。この石段から50ヤード（45メートル）ほども行くと，市の門の一つがあり，そこを通って市内に入った。門扉は見あたらなかった。

（中略）この門構えの近くに肩かごがあり，私はそれに乗った。それは開けっぱなしだったので，私は兵士の縦列の間をかつがれて行きながら，あたりをよく見渡せた。兵士と市民は，背後にまわって列をなした。われわれはいくつかの街路を通り抜けた。街路にはすべて小さな木の家が建ち並び，そのほとんどが一階建てで，わが国の家と同様，とがって突き出した屋根，すべって動く枠の上に張られた油紙の窓がつき，屋根には，アメリカの屋根板（それより大きい）に似たものでふいた木の屋根や，赤みがかったかわらの屋根があった。

家々には塗料が塗られていなかったし，水しっくいも塗られていなかった。

しかしもっと大きなりっぱな家もあった。私は二階建ての高さのある，煉瓦造りか石造りの家を二軒見たのを憶えている。この家は，前に庭があり，こわれたガラスかそれに類したものが上についた石の壁をめぐらしていた。つたやからみつく植物が一面におおっていた（マクドナルド 131-132）。

ところでマクドナルドは北海道から長崎に護送される僅かの合間にたちまち日本語を憶えて日常会話は何とか用を足すことができるほどになっていました。そして後で述べるように，この幽閉中に，後にペリーの第二次来航時に主席通訳として活躍する森山栄之助をはじめとするオランダ語通詞に英語を教えているのです。

さて揚がり屋[12]（座敷牢）に幽閉中の七ヶ月の間に，二度にわたって彼を取り調べた長崎奉行は，後年ペリーの第二次来航の際，浦賀奉行の一人として折衝に当たった井戸対馬守覺弘（？～1858）でした。井戸は開口一番マクドナルドを評して「肝っ玉の太い奴じゃ」と言ったといいますが，この井戸から「母船から離れた動機，手段，目的」を尋ねられ，「天にいます神を信じているか」と訊かれ「ハイ！」とマクドナルドは答えたが，そのあと「処女メアリーから生まれた，神の唯一の息子ジーザス・クライストの御名において」という彼の言葉を通詞に

12）　この「揚がり屋」のあった場所は崇福寺西山郷大悲庵とされている（冨田219）。わずか四畳のこの座敷牢が，日本の英学史において記念すべき場となったのである。それにしても，わずか七ヶ月という期間にもかかわらず，森山を初めとして，彼の生徒たちの多くが，後の対外交渉の場において重要な役割を果たす点においても，これほどめざましい効果を上げた「英語教育」もめずらしいし，さらに異文化交流の場として，これほどドラマティックな発展を遂げた機会もまた稀なのではないか。

当たった森山が訳さなかったのは，彼の「思いやりのあるはからい」であったろう，と後年回想するに至っています（マクドナルド 140）。

ところで，このマクドナルドの「日本上陸」の数週間前にアメリカの捕鯨船「ラコダ号」が難破して，やはり松前藩から長崎に送られ入牢中だったのですが，粗暴なラコダ号の15人の水夫たち――彼らは九ヶ月の期間，三人が逃亡を図ったため，立ち上がることもできない高さの牢に閉じこめられ，一人が自殺，一人が食中毒で死亡――と違って，マクドナルドの紳士的で生真面目な態度と，日本人とほとんど変わらないその風貌からも好感をもたれたようで，「日本滞在中，一度も荒っぽいことばを浴びせられたり，粗略な扱いを受けたことがなかった」とも言っております。森山を通して「貴殿が従順であれば，処遇は必ず改善される」と申し渡した井戸対馬守の言葉を信じて行動したようで，この奉行についても帰国後「誰もが親切だった。私がどれほど模範囚であったにしろ，あの善良なる魂の持ち主は，私の処遇について，自分の言葉を文字どおり誠心誠意守ってくれた」（マクドナルド 166）と語っているほどです。

マクドナルドの日本人観　これまで述べてきたことからも想像できると思いますが，彼はその著書で日本人を礼賛して「日本人はすべて文芸の民であり書物の民である」と聞いていたが「彼らの学識の広さはときに驚異的」であった，と最大級の賛辞を送っているほどです。「結論的覚え書き」（日本人論）と題した章の一部を抜粋してみようと思います。

> 日本人は生来おしゃべりで，いつもユーモアをよく解する気持ちでいる，といえよう。この点で，私は彼らと気が合った。容貌や顔のかたちなどの点で，私は彼らと似ていなくはなかった。そのうえ，海員生活をし，膚色もむしろ浅黒い方だった私は，彼らの一般的な膚色――健康的な赤銅色――をしていた。私はだれともいい争いをしたことはなかった。そして私は，私の「肝っ玉」に関する奉行の賛辞をおりおり誘い出して，彼らの間ではむしろ人気者として通ったと思っている。
>
> 生来彼らは勇敢で，まったく死を恐れない。彼らの本性は際立って戦闘的であるといわねばならない。彼らは祖国を防衛する際に，降伏よりもむしろ全滅を選ぶだろうと私は思う。一度も征服されたことがない，これが彼らの誇り高い立場である。彼らはその社会生活において，十分に保護された自由と，信仰上の完全な寛容を享受していた。ただし，二百年以上も昔，国家的理由から禁止されたローマ・カトリック教として知られるあのキリスト教については，このかぎりではない（私が述べているのは，私が滞在した時代のことだが）。彼らはこれについて何の不満もいっていなかった。にもかかわらず，彼らが平静を装っているその仮面の下に，私は世界の諸国に伍してより高い生活を求める向上心の内的な動きを見て取ることができた。わけてもこれは森山や私の生徒（みな成年）の若手の連中に認められた。彼らはもっとも鋭敏な探求心を身につけていたが，その鋭さたるや，

日本の伝統的生活は，死んでしまった過去の，腐敗した経かたびらのようなものにすぎなかった。（中略）

彼らは驚くほど英語が上達した。その理由は，彼らがこの課業にまじめに取り組んだこと，また彼らのもの分かりのよさや学識の広さは，なみなみならぬものであり，あるものなどは驚異的であったこと，にある。彼らの心は並外れて鋭敏であり，かつて私はうぬぼれて「目から鼻にぬけるほどだ」と自負していたが，その私をはるかに凌駕するほどである。

彼らは私の知る限り，生来もっとも賢い国民だといいたい。ここで「もっとも賢い」といったのは，人を惑わそうとして真実をゆがめているのではなく，もっと高次のものもっと純粋な意味でいっているのである。彼らが必要としているのは，外からの光だけである。それこそが今日，西洋的生活の英知をしだいに吸収し積み上げながら，急速に興起しつつある東洋の秘密にほかならない。（マクドナルド 164－167）

特に先にも述べた森山栄之助について，日本で会った人の中でもっとも知的であったと誉め，次のように記しています。

ムラヤマ「森山栄之助」

彼は，私が日本で会った人の中で群を抜いて知能の高い人だった。彼は青白い考え深げな顔つきで，人を射るような黒い眼をしていた。その眼は，魂のなかまで探り出し，あらゆる感情の動きを読みとるように思われた。彼の英語は非常に流暢で，文法にかなってさえいた。発音の仕方は独特だったが，日本語とは異質な文字と綴りの組み合わせを，おどろくほど見事に駆使していた。

彼はその後私が日本に滞在している間中，私の日々の伴侶――愛すべき伴侶――となった。彼は私と一緒にいるとき，いつも幾冊かのオランダの本と一冊の蘭英辞典をもっていた。長崎のオランダ商館長ジョン・レヴィンが私に語ったところでは，森山はオランダ語を彼自身より上手にしゃべるとのことだった。森山のもっている本はいろいろなテーマにわたっていたが，主としてヨーロッパ諸国の通商と習慣に関するものだった。

私は森山に国外に出たことがあるかどうか聞いてみた。森山は，出たことはない，と答えた。さらに森山は，たくさん蔵書をもっているし，ラテン語やフランス語も勉強していると私に語った。（マクドナルド 128－129）

とし，さらに別のところでは「彼は私の愛弟子であった」とも言っています。

彼は，私にとってあらゆる点でもっとも大切な，敬愛してやまない人物で日本人の中では中位の背丈で，五フィート六インチ（168センチ）くらいある。繊細で彫りの深い顔立ちで，高い知性があらわれ，眼は漆黒できらきらと輝き，人を射るような鋭さのなかにも温和な愛らしい表情を帯び，真に人を魅惑する力がある。膚色はきわめて淡く，平均的日本人よりずっと淡く，アメリカの南部諸州の白人のようである。休憩中には，どちらかというとわが国の牧師に見られるような表情で，おだやかな威厳ある雰囲気をただよわせていた。役人たちの前で私に話しかけるときには，いつも微笑をたたえ，あたかも私を励まし信頼をおいているかのような風情であった。彼は英語を習得したいという強い願望を示し，豊かな修得の才能を示した。彼はオランダ語がよくできた。それというのも，彼は正式のオランダ語の通詞の一人だったからだ。私は，彼が自国の歴史と古臭い伝統を十分に踏まえていることを当然なことだと思った。しかしそれについて彼は一言も私にいわなかったし，私も彼に一言も尋ねなかった。彼の全体的な風采は，研究熱心な学者のそれで，洗練された紳士であった。彼は私の愛弟子であった。（マクドナルド 192－193）

この森山栄之助（後に多吉郎と改名）は，文久元年（1861）十二月，遣欧使節竹内下野守一行の出発後間もなく，幕府外国奉行支配通弁頭として，帰国する英国公使オルコックに同行して，文久二年二月二十一日江戸を出発し，使節のあとを追った際にシンガポールで，あの宝順丸の遭難及びモリソン号事件で述べた音吉に会っていることを，同行した淵辺徳蔵が日記に記しています（春名 18）。音吉がフラッタリー岬に漂着してから三十年後のことですが，マクドナルドが「愛弟子」と称した森山が，そのマクドナルドとも関係の深い音吉と，こうしてシンガポールで出会ったことは，人間の縁というものの不思議さを感じさせる，極めて興味深いエピソードです。

マクドナルドは，嘉永二年（1849）4月5日，自国の漂流民を受け取りに来たアメリカ軍艦プレブル号に乗って，先述したラコダ号の13人の船乗りとともに日本を離れるのですが，彼は晩年，その10ケ月に及んだ日本での体験を偲んで『日本回想記』（Japan, Story of Adventure of Renald MacDonald, First Teacher of English in Japan, A.D. 1846-49）という著書を遺したことは既に触れました。

マクドナルドは，1894年8月5日，ワシントン州フェリーダ郡トロダの近くで世を去ったのですが，姪の腕に抱かれて旅立つとき，彼の口から洩れた最後の言葉は日本語の「ソイナラ（サヨウナラ），マイ・ディア，ソイナラ（サヨウナラ」だったそうです（マクドナルド 279，吉村 398）。

吉田松陰　マクドナルドの場合，当初の目的は必ずしも達成されたとは言えないまでも，それ

でも若い日の日本との「出会い」を胸に刻んで後半生を生きた点において，幸福な生涯だったといえるかも知れません。しかし次に取り上げる松陰の場合，同じく密航を企てたのですが，結果は完全な「裏目」と出たのです。

嘉永七年（1854）2月，前年の約束通り，再度来航したペリー艦隊は，和親条約（神奈川条約）を締結し，それによって開港した下田に3月21日から4月17日（陰暦）にかけて滞在していますが，その3月27日の午前中，下田の浜を散歩中のアメリカ士官[13]に手紙を手渡す者がありました。長州藩士，吉田松陰（寅次郎，天保元～安政六＝1830～59）と金子重輔（1831-55）の二人でした。手紙には「投夷書」と書かれていました。その全文（口語訳）を引用してみます。

投夷書

日本国江戸府書生瓜中万二・市木公太，この一文を貴大臣並びに各将官の執事あてに呈上ます。

われわれは生まれつき弱々しく，体つきも小さくて，われながら士籍に名を連ねていることをうしろめたく思っている者です。そして，いまだに武技に練達せず，兵法にも精通しないまま，なすところなくただ年月を空費しています。ただ中国の書を読むようになり，少しずつヨーロッパやアメリカの風習や教化のありさまを知り，世界中を周遊してみたいと思うようになりました。

ところがわが國は鎖国の法が厳しく[14]，外国人が国内に入るのも，国内の者が外国へ出ていくのも，ともに禁止されています。そのため，世界周遊の思いはさかんに胸中を去来するものの，長いあいだ考えあぐね，尻込みしてきました。幸いに 今，貴国の大艦隊が檣（マスト）を連ねて来航し，わが國の港にすでに長く碇泊しています。

われわれがよくよく観察したところでは，貴大臣ならびに各将官は深い仁愛の情をおもちであることを知ることができ，平素の念願がまたもや頭をもたげて参りました。すなわち，今や断固として意を決し，ひそかにお願いして貴艦に乗り，国外へ密航して五大洲をかけめぐろうというわけです。もちろん，それは国禁を犯してのことです。どうか執事の方々は，われわれの心中を察せられ，この計画が成功するように取り計らって下さい。われわれのできることであれば，どんな仕事を命じられても，それに従います。

そもそも足の悪い人が走るのを見，走る人が騎乗の人を見るときに，その心中のうらや

13）　ミシシッピ号館長付き書記 J. W. スポールディング（J. W. Spalding）。*Japan around the World, an Account of Three Vists Japan (1855)* を遺した。

14）　原文（漢文）では「然而吾國海禁甚嚴」（吉田[1] 420）となっている。

ましさはどんなものでしょうか。ましてやわれわれにとっては一生をかけていかに走り廻ったところで，この国の中から出ることはできません。ですから，風に乗り，波涛を乗り越えて千万里も迅速に航行し，世界中を隣りづきあいのように往き来するあなた方の様子を見ると，そのうらやましさは足の悪い人と走る人，走る人と騎乗の人のたとえなどではとても比較できるものではありません。

執事の方々が，われわれの気持ちを明察され，この願いを許されれば，これ以上の幸せはありません。しかしながら，わが国の海外渡航の禁は解かれていませんから[15]，もしこのことが，他へ知れたなら，われわれは捕らえられるのみならず，たちどころに首をはねられるでしょうし，そうなれば，貴大臣並びに各將官のせっかくの仁愛の情を傷つけることも大きいと思います。執事の方々がこのわれわれの願いを許され，われわれをかくまったまま出航されて，この首のはねられることのないようにしてくださることをお願いする次第です。

いつの日か帰国するようになっても，そのときはこの国の人もあえてわれわれの過去を追及することは致しますまい。われわれの言わんとするところは乱暴かもしれませんが，心中には本当に誠意もあり，また確かでもあります。執事の方々が，こうした事情と意のあるところを汲みとられ，われわれを疑うことなく，また拒絶されることのないことを希望致します。

万二・公太，ともどもこれを拝呈します。

日本嘉永七年甲寅（安政元年）三月十一日

別啓

本文であれこれお願いしたことは，われわれの長い間の念願で，これまでいろいろとその達成の方法を探し求めてきました。かつて横浜においては漁船をやとい，暗夜に乗じてあなた方の船に近づこうとしました。しかし，地方の巡視が非常に厳しくて，御用船のほかは一切近づくことができず，そのため躊躇しました。今般，あなた方の艦がここにくるということを聞いたので，いち早く来て待ち，一隻の小舟を掠めとってあなた方の艦へ近づこうとしましたが，まだそれもできません。

そこで貴艦乗組の各大官方が相談され，われわれのこの願いを許されるならば，明晩，人の寝鎮まったのちに，はしけ一隻を出し，柿崎村の海岸の人家のないところで，われわれを迎えてください。われわれはもちろん約束の時間に先立って，そこへ行って待ってい

15）　原文（漢文）では「但吾國海禁未除」（吉田[1] 420）。

ます。

どうか約束をたがえることなく，われわれの望みをかなえてくださることを祈ります。

三月十一日

（吉田[2] 270-72）

三月二十八日深夜午前二時，二人は小舟を乗り出し沖合いに停泊中のミシシッピ号に乗船し，アメリカに帰国する際の同行を依頼するのですが，旗艦ポーハタン号へ行くように手まねで合図されます。しかしポーハタン号で，通訳のウイリアムズを介して伝えられたペリーの回答は，断固たる「否」であり，彼等は悄然とアメリカ兵の漕ぐボートで陸に戻っていったのです。

この事件はアメリカ側も幾人かが記録しており，公式の文書では「もし提督が自由に自分の感情の赴くままにしようと思ったならば，アメリカ人が日本に現れたことによって刺戟された自制なき好奇心を満足せしめ度いとの欲求から，明らかに日本を逃れようとしたかの哀れな日本人をば喜んで艦内にかくまったことだろう。けれども，曖昧な人道心以上に重要な他の事を顧慮する必要があった。人民一人の逃亡を黙認することは日本帝国の法律に反することであり，又いやいやながらもすでに多くの重大な譲歩をした国の諸規定に対して，あらゆる顧慮を払って従うことこそ唯一の真実な政策であった」（ホークス 63）としているのですが，同時にまた次のように松陰らの行動を称賛してもいるのです。「この事件は，同国の厳重な法律を破らんとし，又知識を増すために生命をさえ賭けようとした二人の教養ある日本人の烈しい知識欲を示すもので，興味深いものであった。日本人は疑いもなく研究好きの人民で，彼等の道徳的並びに知識的能力を増大する機会を喜んで迎えるのが常である。この不幸な二人の行動は，同国人の特質より出たものであったと信じるし，又人民の抱いている烈しい好奇心をこれ以上によく示すものはない。ところでその実行は，最も厳重な法律と，それに違反させないやうにするための絶えざる監視とによってのみ抑えられてゐるのである。日本人の志向がかくの如くであるとすれば，この興味ある國の前途は何と味のあるものであることか，又付言すれば，その前途は何と有望であることか！」（ホークス 63-64）。

松陰は，その後「安政の大獄」（安政六年＝1859）に連座して処刑されるまでの五年間，獄中で囚人たちを教え，また「松下村塾」を開いて，幾多の有望な青年を教育したことはよく知られています。松陰の密航事件は失敗に終わりましたが，彼の尊敬する村田清風は「この行為の意義を高く評価して『これが事の端緒というものじゃ』と言ったと伝えられてい」（奈良本 63）ますが，松陰の遺志は弟子たちに伝えられて倒幕を果たす大きな原動力となったことはいうまでもなく，その意味において「明治維新」は松陰が成し遂げた，と評価する歴史家もいるほどです。

かくすればかくなるものと知りながら
已むに已まれぬ大和魂

江戸の獄に下る途中に松陰が詠んだと言われている歌です。

参考文献：

（*印は本章で引用・言及した文献を示す）
安達裕之『異様の船--様式導入と鎖国体制』平凡社，1995年
*池田皓「漂流・序」『日本庶民生活史料集成』第5巻，三一書房，1968年
*井上勝生『日本の歴史18 開国と幕末変革』講談社，2002年
*遠藤高環「時規物語」1849年『日本庶民生活史料集成』第５巻，三一書房，1968年
*川合彦充『日本人漂流記』現代思想社・現代教養文庫，1990年
*古賀十次郎「蕃談」1849年『日本庶民生活史料集成』第5巻，三一書房，1968年
司馬遼太郎『世に棲む日日』（一）文芸春秋社，昭和４６年
*高瀬重雄『北前船長者丸の漂流』清水書院，1974年
*鶴見和子・春名徹「《対談》開国と漂流民群像」『石井研堂これくしょん　江戸漂流記 総集』第五巻，日本評論社，1992年，2～61
童門冬二『吉田松陰』上下，学陽書房，2001年
*富田虎男「解説」『マクドナルド「日本回想記」－インディアンの見た幕末の日本』ウイリアムス・ルイス／村上直次郎遍，富田虎男訳訂，刀水書房，1975年
徳富猪一郎『近世日本国民史』32・神奈川条約締結編，昭和40年
*春名徹『にっぽん音吉漂流記』晶文社，1980年
*『蕃談』平凡社・東洋文庫，1989年
*ホークス，フランシス・リスター『ペルリ提督日本遠征記』（四），岩波文庫，1994年
*マクドナルド，ダナルド『マクドナルド「日本回想記」－インディアンの見た幕末の日本』ウイリアム・ルイス/村上直次郎編，富田虎男訳訂，刀水書房，1975年
*吉田松陰[1]「投夷書」『吉田松陰全集』第7巻，岩波書店，昭和10年
*————[2]「投夷書」『日本の名著』中央公論社，1977年
吉村昭『海の祭礼』文春文庫，1989年

第三章 捕鯨船と漂流民（その2）

Ⅰ．ジョン万次郎（文政十二～明治三十一年＝1827～98）

漂流の開始　漂流民と言えば真っ先に「ジョン万次郎」という名が浮かんでくるほど，ジョン万次郎こと，中浜万次郎は今や著名な「歴史」上の人物の一人となっています。しかしよく誤解されていることですが，彼はアメリカに行った最初の日本人ではなく，「アメリカ人の家庭に入って生活」し「アメリカの教育を受けた」最初の人である（プラマー 178），という但し書きをつけておく必要がありそうです。なぜなら，既に見てきたように，あの音吉ら宝順丸の乗組員以前にも，漂流してアメリカの海岸に流れ着き，偶然アメリカの地を踏んだ漂流民の数はおそらくかなりのものに上ると思われるからです。しかも万次郎の場合，「海難事故」は決して彼の不幸の始まりではなく，正に幸運の糸口になったという点において極めて特異な体験といえるでしょう。

万次郎の漂流は次のようにして始まりました。1841年（天保十二）正月五日，四国宇佐（土佐近く）から長さ四間一尺（約八メートル）の漁船は，はえ縄漁に出かけます。乗組員は船頭，筆の丞（後に伝蔵と改名，三十七才），その二人の弟重助（漁労係，二十四才）と五右衛門（櫓係，十五才），さらに宇佐出身の漁師，寅右衛門（櫓係，二十五才）と万次郎（炊＝飯炊き兼雑用係，十四才）の五人でした。最初の二日間は不漁で，三日目に足摺岬沖東の漁場で漁をしていたが，午前十時頃雲行きが怪しくなり，西南の風が吹き始めたので，漁を中止し陸の方へ寄せたが，やがて昼頃収まったので，再開するが，突然又西南の風が吹き起こり，「ハエ縄半分ヲ引揚ゲ，余ハ切捨テ，地方へ漕寄セントスルニ風益強ク吹，心ノ侭ニ進コトヲ得ズ（『漂洋瑣談』＝川澄 573）。総力を挙げて船を漕ぐも「吹きなぐる風に船は矢のように速く押し流された… やっとのことで小さい方の帆を立てたかと思うと帆柱が倒れた。一同，力が尽きはててくたくたになってしまった。そのうちに日が暮れた。着物は潮に濡れ寒さが身にしみた。櫓も一挺を残すだけで，舵も帆布も波にさらわれてしまった。もはや運を天に任し，ただ神仏を祈りながら五人のものは船板の上に打ち伏した。船は東南の方向に流れて行くように思われた」（井伏 147）。

こうして船が完全に自由を失って漂流を始めたのが，午後十時頃で「足摺岬の東，十キロから二十キロぐらい」（中浜 24）の位置らしく，翌八日の明け方に室戸岬を船は通過しています。『漂巽紀略』には「船は辰 巳の方へ流され其疾きこと箭の如し」とあることから「漂流開始の時，すでに黒潮に乗ったものと考えられる」（中浜 25）のです。こうして万次郎の船は五日後の一月「十三日午牌の頃，辰巳の位に一螺の小島なる物を見付けり」（『漂巽紀略』＝川澄 476）とあるように，「鳥島」（伊豆諸島南端の小火山島，直系東西2.5Ｋｍ，南北2Km）という無人島を見つけて上陸し，群棲していた信天翁などを捕まえて食べたり，溶岩の窪みに溜

まった雨水を飲み，洞穴を見つけて寝場所にし，辛うじて命を繋ぐことが出来たのです。

この孤島に暮らして五ヶ月後の六月二十七日，食料を求めて島内を歩いていた万次郎は一隻の帆船を沖合いに見つけ，やがて五人は船員たちのボートによって救助され，三本マストの帆船に運ばれたわけです。この船はアメリカの捕鯨船「ジョン・ハウランド号」で，船長の名はウイリアム・H・ホイットフィールド。その日の「航海日誌」には次のように記されています。

Sunday June 27

this day light wind from SE the isle in sight at 1 PM sent in 2 boat to see if there was any tuttle found 5 poor distresed [sic] people on the isle tuck [sic] them of cold [sic] not under stand [sic] anything from them more than that they were hungry

made the latitude of the Isle 30

（川澄 819）

（日曜日。六月二十七日。東南の微風。視界に島。この島に海亀がいるかどうか。

午後一時，二艘の寸船を出す。島には，疲労困憊したみすぼらしい五名の人間がいるのを発見。本船に収容。飢えを訴えているほか，彼らから何事も理解することができない。

島の位置は北緯30度31分。）

（プラマー 182－183）

アメリカの捕鯨業　万次郎らがハウランド号によって救助された，1841年はアメリカの捕鯨業の最盛期に当たっていました。世界の捕鯨の歴史は大きく三つに分けられ，第一期は「オランダ，英国をはじめとする北ヨーロッパの国々による十七世紀から十八世紀の初め」（中浜 175），第二期がこれから述べるアメリカの捕鯨，第三期は「二十世紀初めからの・・・南氷洋捕鯨でノルウェー，日本，旧ソ連邦によるもの」（中浜 175）です。そこでこの第二の黄金期に当たるアメリカの捕鯨なのですがこれは，ナンタケットと呼ばれる「大西洋側のコッド岬の南方にある」（中浜 176）小島より発祥した，と言われています。しかしそもそも1620年に入植した「ピルグリム・ファーザーズがケープ・コッド近辺に入植した」その理由の一つは「その場所が捕鯨に適していた」（森田 52）からであり，このニューイングランド地方では早くから捕鯨に対する関心が強かったことが分かります。この島の入植は1660年で「小さな丸木舟で岸の近くに来た鯨を石や原始的な銛を使って捕り，岸に運んで解体する沿岸捕鯨（shore whaling）を行っていた」（中浜 176）先住民であるワンパノッグ・インディアン，ノーセット・インディアンの労働力を得て捕鯨業が始まったのです。1839年，既に述べた長者丸を救っ

たジェームス・ローパー号は1672年，ロングアイランドから捕鯨技術を移植する目的でこの島に招かれた「捕鯨の専門家」の名にちなんで付けられたものでした。

しかし捕鯨がこうした沿岸でのものから，大型化して処理も沖でする boat whaling に移っていくと，大きな船が必要となり，海が浅く大きな船が入れないナンタケットは不便であったため，やがて捕鯨の中心地はニューベッドフォードに移っていったのも時代の推移としてやむを得ないことですが，これが1760年頃だとされています（中浜 176）。

ニューイングランド地方はもともと捕鯨への関心が深かったことは既に述べましたが，ナンタケットとは別に幾つかの捕鯨基地ができていました。これは「宗教の自由を求めて英国からアメリカに移住した者の中に第一期捕鯨の英国での捕鯨経験者もおり・・・1688頃には捕鯨もニューイングランド沿岸一帯の港町に広がってい」（中浜 176）たからで，ニューベッドフォードもその一つでした。

ところでアメリカやその他の欧米諸国の捕鯨の目的は，日本のように鯨の肉を食べることにあるのではなく，主に鯨油であり，これが「蝋燭の原料，灯油，台頭し始めた機械文明の機械のオイル」（中浜 177）に使われたものであり，莫大な収益を揚げたものの，しかし捕鯨業は不安定で不況など経済状況に影響され易かったようで，そのため「紡績業というバックグランドのあったニューベッドフォード」は有利で次々に沿岸の小さな捕鯨基地を合併して世界一の捕鯨基地となった」（中浜 176）というわけです。このアメリカの最盛期は，1835年から1855年までであり，万次郎のアメリカ滞在期間（1841～1850）はほぼこの期間と一致しています。

右の表はアメリカ捕鯨業の最盛期の様子を示したものです。

年　度	登録船数
1841	553
1846	735
1851	553
1856	635
1861	514
1861－1865 南北戦争	－
1866	263
1871	288
1876	169
1881	177
1886	124
1891	?
1896	77

表１　アメリカの登録捕鯨船数（５年ごとの統計）（Hoffman, Elma Paul, “The American Whaleman” 参照）。平尾信子『黒船前夜の出会い－捕鯨船長クーパーの来航』より転載

ところで1819年，「中国とハワイ間を航行するアメリカ商船」が日本近海でマッコウクジラの大群を発見したニュースが伝わると，ぞくぞくと大平洋に捕鯨船が乗り出し」（平尾 148）て，ニューベッドフォードの船が日本近海に現れたのもこのときからでした。

同時代の，今ではアメリカ文学の古典とも目されるハーマン・メルヴィル（Herman Melville，1819～91）の小説『白鯨』（*Moby-Dick*，*or the Whale*，1851）第24章「弁護」には「もしあの二重に閉鎖された国，日本が，外人を迎えることがありとすれば，その功績を負わしめられるべきものもま

た，捕鯨船のほかはない。それは今日すでにかの国の扉口に近づいてすらいるのだ」（メルヴィル上-198）と書かれていますし，同書には，この他日本に関して述べた箇所が10ヶ所以上もあるほどです。

さてホイットフィールド船長率いるジョン・ハウランド号は，ニューベッドフォードに帰港する途中，ハワイのホノルルに寄港して万次郎ら五人の漂流民を友人の G.P. ジャド博士に預け世話を依頼するのですが，万次郎の船上での生活ぶりを観察していた船長は，彼をアメリカ本土に連れ帰り教育を受けさせたいと思うようになりました。万次郎の意志を確かめると一も二もなく承諾し，こうして再びジョンハウランド号の船上の人となった万次郎は，歓呼の声を上げて彼を迎える乗組員から，その船名の一部をとって「ジョン・マン」と呼ばれるようになったわけです。

アメリカ生活　1843年5月7日，ジョンハウランド号は，長い航海を終えてほぼ二年ぶりにニューベッドフォード港に戻り，万次郎のアメリカ大陸での生活が始まるのです。時は五月，リラやドッグウッド（はなみずき）が咲き乱れ，楡の若葉の香りも清々しい，フェア・ヘイブン（美しい避難所）という町に船長の家はありました。しかし彼は，航海途中に夫人が病死して独身者であったため，万次郎はホイットフィールドの旧友である，大工・エベン・アーキン夫妻の家に住むようになりました。これが日本人の「ホームスティ第一号」です。

更にこのアーキン一家の隣人に三人の姉妹が住んでいて，その次女ジェーン・アレンは，地元の住民が建てたオックスフォード・スクールの先生をしており，万次郎はそこに入学することになりますが，これが日本人の「アメリカ留学生第一号」というわけです。

十六才になっていた万次郎は既に航海中にも教育を受けていたので，ここで30人の小学生に混じって勉強した「記録はなく」，どうやら専らアレン先生の個人レッスンを受けていたようなのですが，そのうちにホイットフィールド船長が再婚しスコンチカットネックという場所に土地を買ってここに農場を開いたため，万次郎もこの家に移転して，隣接する公立の「スコンチトネック・スクール」に転校しています。彼はこの農場で「（雇われていた）農夫の労働を助けながら暇を見ては勉強し，寒さが強く雪が降り，農業ができない時は一日中勉強していた」（中浜47）といいます。

このフェアヘイブンは五月になると「バターカップという菫によく似た黄色い小さな花が一面に咲」き乱れる。この地方では「その花を摘んで自分の名前を書かない匿名の詩をバスケットに入れて好きな女の子の家の前に掛けておく，メイバスケットというロマンチックな習慣があった」ので，「いつも学校で微笑を送って」きた「キャサリン・モートンという女の子に気が付いた」万次郎もまた，「バターカップの花とともに詩を書いてキャサリンの家にバスケットをつるしておいた」そうです。彼の作った「詩」は，

T'is in the chilly night	とても寒い夜のこと
A basket you've got hung.	あなたのバスケットをつるしたョ
Get up, strike a light!	目をさまして，明かりをつけて！
See me run	逃げていく僕を見つけておくれ
But no take chase me.	でも追い掛けたりはしないでネ

（中浜 47-48）

引用書の著者，中浜博は「父清がアメリカに行った時，もう大分高齢になっていたキャサリンがこの詩を書いて父に渡した」（中浜 48）と記しています。

万次郎が船長の勧めで「弁当持参で測量学，航海術の勉強」を始めたのは，フェアヘイブンの街の近くでバートレットという人が開いた「バートレット・アカデミー」という私立学校でした。万次郎はここに二年半にわたり通ったのですが，彼のこの時代の生徒ぶりを後年，当時の同級生，ジェイコ・トリップが次のように振り返っています。

「（彼は）いつもクラスのトップ・グループにつけ，知識の吸収力は著しく，恥ずかしがり屋で，態度はもの静かで丁寧，慎み深かった」

（プラマー 188）

捕鯨船での万次郎　1846年5月，十九才の万次郎は，ホイットフィールド船長が航海に出たあと，船長の友人，アイラ・デーヴィスの誘いを受けて彼の船フランクリン号で捕鯨航海に出かける許可を夫人から取り付けています。夫人は出発前ハワイの友人，サミュエル・デイモン牧師に「万次郎紹介の手紙」を持たせたのですが，この人は船乗りたちの新聞「フレンド」紙の発行者であり，後に，万次郎のみならず，ハワイに送られてくる数々の日本人漂流民の面倒を見ることになる人物です。

フランクリン号での三年半に及ぶ航海で船は二度も日本近海に近寄りましたが，祖国を目の前にしながら万次郎は帰国を果たすことはできませんでした。一度は小笠原諸島に十日間寄港したそのあとで，さらに本土に近づき，二，三十隻の漁船に出会ったそのとき。万次郎は鉢巻き姿の日本人の扮装をしてそのうちの二隻と話をするが，「陸奥の仙台」ということしか分からず，その上「外国船とはかかわりたくない様子」であったので早々に話を引き上げた，と言います。

なお次のエピソードは，この航海中特記すべきものとしてよく知られているものです。

「長い航海のせいか船長のデーヴィスの態度がおかしくなった・・・鉄砲を持ち出し，刀を振りかざして狩猟のまねや兵隊のまね。とうとう船で飼っている豚まで殺してしまった」（永国 16）とうので，ルソン島（現フィリッピン）のアメリカ領事館に預けることになったので

すが，船長不在では，船は動かないため，後任の船長を乗組員同士が選挙で選ぶことになりその結果，なんと日本人であり，弱冠二十一才の万次郎が一位に選ばれたのです。

実際には「たまたま同点トップのエーキン一等航海士（当時二十九才）がいたので，その先輩に船長の座についてもらい，万次郎は副船長兼一等航海士になった」（永国 17）というのです。この逸話について大宅壮一が語っている次の言葉は大変に示唆的です。

> 漂流という形で，より高い文化にふれるというのは，民族の素質テストの点では，製品の“ぬきとり検査”のようなものである。留学のばあいは，育った環境，能力，素質などの上で，どっちかというと恵まれた条件のもとにあるものが，より高い学問，教養，技術を身につけるため，計画的に，一種の投資として，文化の発達した国へ出かけるのである。これに反して漂流は，決して本人が希望したのではなく，まったく偶然の幸運によって，九死に一生をえたものである。しかも，その大部分は，もともと文化や教養とあまり関係のない，いわば社会の底辺に属するものだ。（大宅 133－134）

確かにこの万次郎の学校時代のエピソードや，この捕鯨船というあらゆる人種が集まった船上[1)]での選挙の話は「国際化時代の中で，日本人の態度がとやかく言われている今日。誠実かつ謙虚な万次郎を知ることは，日本人国際適応性の原点を学ぶこと」（永国 17）になると思われるのです。この「民衆同士の国際関係史」は，のちに合衆国の代表としてやってきたペリーによって道が開かれた「日本開国」のあり方が，日米交渉百五十年の原点として，今も両国の間でギクシャクした原因となっていると思われるフシがあるのと，実に好対照をなしていると言わざるを得ません。真の「国際人」とは「現政府の方針を巧みな英語で外国人に説明する」（鶴見 50）ことではなく，一人の人間として，「おそれることなく外国人の間にくらし，要求すべきことははっきりいう・・・民際人」（鶴見 50）に他ならぬことが，この万次郎によって実証されているといえないでしょうか。

帰国　万次郎はこののち，アメリカの捕鯨船員として生活することもできたはずですが，彼の帰国への意志は片時も緩んだことはなかったようです。故郷に残した母との再会を果たすこともその理由の一つでしょうが，彼には自分がアメリカで体験した知識とものの考え方を帰国後日本に広め，なんとかその手で日本を開国して国際社会に導き入れたいという，あのマクドナルドが抱いたのと同様の大望があったようです。この野望を実現するために，彼は1849年10

1）　メルヴィルの『白鯨』の捕鯨船ピークォド号がそうであるように，多文化・他民族の寄せ集まりである捕鯨船は，世界の縮図といっても過言ではない。摩擦と協力――捕鯨に関しては協力せざるを得ないが，時には反乱さえ怒った――を繰り返しながら前進するこの船は，その意味において，異文化が劇的に交錯する典型的な空間だったのである。

月，ホイットフィールド船長夫妻とわかれを告げたのち，ニューベッドフォードを出港して南米ホーン岬回りの船でサンフランシスコに到着します。折からのゴールドラッシュでわき返るこの街からサクラメント渓谷に入り全米中の砂金採りに混じって万次郎は，わずか40日間で600ドルを手にして下山，サンフランシスコから再びハワイに戻り，かつての漂流仲間，伝蔵と五右衛門（重助は死亡，寅右衛門は妻帯し大工として留まることを希望）とともに，帰国の途に着く計画を練るのです。

彼は，おそらくマクドナルドの成功の例に倣ったと思われるのですが，小ボートを買い込み，これにアドヴェンチャー号と名付け，三人は日本方面に向かう船，「サラ・ボイド号」（Sarah Boyd）に乗り込んだのです。1851年（嘉永四）一月末，船は琉球諸島の領海に入り，三人はボートを下ろす許可を船長から得て，那覇から25キロ離れた摩文仁間切（現・糸満市大度浜）に明け方上陸します。彼らは例によって取り調べを受けるため，まず，那覇から鹿児島，薩摩藩に送られています。薩摩藩主，島津斉彬の「厳重取調べ」を受けることになったのですが，英邁を詠われたこの君主が万次郎から聞き出したのは，他ならぬ「西洋の最新の文化・・・異国事情」（プラマー 196）でした。

帰国後の活躍　万次郎の帰国後の活躍について多くの言葉は必要はないでしょう。1852年，二十六才になった彼は十二年ぶりに母親との再会を果たした後，翌年土佐藩で武士の身分に取り立てられ藩校教授となっています。明くる1854年（嘉永七）幕府は，前年再来を約束して去ったペリーの第二次日本遠征を前にして周章狼狽の極にありました。政府の外国奉行江川担庵は，万次郎を呼び出して通訳として抜擢し，対外交渉に当たらせようとしたのですが，老中筆頭阿部伊勢守政弘や，外交顧問の水戸藩，徳川斉昭から，アメリカに有利な通訳をするのではないかと疑がわれて，結局ペリーに会うことなく外交文書の翻訳に携わるに留まりました。

開国後の日本が万次郎から学んだことは多岐にわたっています。まず「二百年の間施行されてきた外洋造船禁止令が解かれ」たあと，「大型帆船造船計画」に関わり「遠洋航海のための船員養成」の学校や軍艦教授所の教授，さらには捕鯨教授に任じられ，捕鯨航海という多忙な日々を送るさ中に『英米対話捷径』（1859）を作りました。翌万延元年（1860）1月，通訳として咸臨丸に乗り込んだことはよく知られています。1868年，明治に入ってから幕府崩壊のあとは，土佐藩に再び召し抱えられて百石とりの士分となり，1869年，明治新政府によって開成学校二等教授になり中博士（教授）となっています。

このように万次郎が日本の開国に果たした役割は少なからぬものがあったと言えるでしょう。

Ⅱ．アメリカ彦蔵（天保七～明治三十＝1836～97）

初航海　アメリカ彦蔵，あるいはジョセフ・ヒコこと，浜田彦蔵も，ジョン万次郎と同じく漂流中を，アメリカの船によって救われアメリカで教育を受けた漂流民ですが，彼の場合は，

「帰化してアメリカ人となった最初の日本人」として記憶されています。この二人にとって幸運だったと思われるのは，若いうちに異国の文化・文明に触れたことです[2)]。既に成年に達していた彼らの仲間の場合，海外渡航者は漂流という，たとえ自分の意志によるものでなくとも外国に一旦足を踏み入れたら，運良く帰還したあかつきにも厳しく罰せられるという幕府の「禁令」に対する恐怖が先立ち，外国人との交渉の鍵となる「言葉」の修得さえ，乗り気でなかったと考えられるからです。しかも二人とも「群を抜く優秀な頭脳と，鋭敏な感受性にめぐまれていたこと」（山下 600）も共通点として挙げられますが，生い立ちや，帰国後の活躍の場所，分野に関しては対照的といってもよいほど隔たりを見せています。

彦蔵（幼名彦太郎）は，播磨加古郡阿閇村古宮（現兵庫県加古郡播磨町）に生まれましたが，幼い頃父親を亡くしたため，母が彼を連れて再婚したのが，隣接の本庄村浜田の吉左右衛門でした。この義父は農夫ではありましたが，その一族は樽廻船で働く船乗りで，彦蔵を実子のように可愛がり，三歳上の義兄宇之松もまた，新しく弟ができたのを大変喜んだほどで，裕福で恵まれた環境に育ったといってよいでしょう。この点は，寺小屋にも行けなかった貧しい漁師の倅で，八才で父を亡くし，わずか十四才の身で一家の働き頭としてその生計を支えなければならなかった万次郎との大きな違いです。彦蔵が十三才のとき，母親には内緒で母方の従兄弟に連れられて，讃岐（香川県）金比羅参りに出かけ，帰途宮島の厳島神社や周防の錦帯橋を見物して戻ってきたとき，留守中心配をしていた母親が嬉しさの余り，脳溢血を起こして死亡，彼は「天涯孤独」の身になったのです。

彦蔵のあまりの落胆ぶりを心配した義父は，彼を航海に連れていき，悲しみを紛らせてやろうと考えたようです。

こうして嘉永三年（1850）秋九月，灘の新酒を満載して江戸へ向かう，吉左右衛門が船頭を勤める樽廻船「住吉丸」に同乗したのが彦蔵の初航海でした。往路，船は嵐を避けるために紀伊半島熊野に待機，このとき同郷の船「栄力丸」（船頭・万蔵）が入港してきたことが彦蔵の運命を変えました。この船の乗組員たちは，まだ幼い彦蔵の「可愛らしさに惹かれて，同じ江戸までの航海だから」（プラマー 229）といって彼を「栄力丸」に同乗させる許可を吉左右衛門から取り付けたのです。

遭難・漂流　無事積み荷を降ろした後，江戸見物を済ませた一行は，帰路浦賀へ立ち寄った後，大阪に向かうのですが，御前崎を過ぎて遠州灘を横切り，紀伊半島の熊野灘に入った四つ（午

2）　イシュメイルが「捕鯨船は私のイェールであり，私のハーヴァード大学」（メルヴィル上200）であったと述べているように，万次郎や音吉，彦蔵（捕鯨船ではなく商船に救助されたが）らにとって，この捕鯨船上を初めとする異文化体験は，若い彼らの精神の深層にまで影響を及ぼし，単に知能のみではなく，その人格形成にも大いに関与したと思われる。言い換えれば，遭難・漂流で一度は彼らの「命を奪った」海＝鬼母は，同時に彼らに「再生」の機会を与えた「慈母」だったのである。

後十時）頃，それまで快晴だった天候が一変したのです。強い台風に遭遇したのでした。「風波益烈敷舩巳に覆らんとすること数度なり」（浜田[1] 339）。この頃の「弁才船」が遭難の際とるべき以下の処置を万蔵以下乗組員は次々と実行して何とかこの苦境を乗り越えようとしています。

１．帆を下げる　２．あか出し（浸水の汲み出し）　３．後ずさり　４．刎ね荷（荷打ち，捨て荷）　５．髪を切り，神仏に祈る　６．帆柱の切断　７．仮帆　８．たらし（碇綱）　９．ランビキ（蘭引き）

しかし，舵を失い帆柱を無くした船は「風波漸く鎮り，天気快晴」（浜田[1] 339）となっても「大海の只中に浮いている」（プラマー 229）のみで，そのまま南の方向に 流されていくしかなす術はありませんでした。三日目に，島影を発見するが，「上陸」をめぐって議論を始め，「みくじ」をしているうちに，その機会をのがしてしまいます。

アメリカ船オークランド号　こうして波の間に間に漂うこと五十一日，「十月二十一日曙七時，水主一人舟の表に出て神を拝しゐる処に，遥かに白く見えたるを，帆影にてもあらんかと思ひ，歓び来り，寝入りたるものまで起こしたて，かくと告げ，よって皆々出てながめながら，色々と評するうちに，次第に近寄るをみれば慥かに船なり」（浜田[1] 348）。この白い三本マストと黒い船体を持つ巨船は，ジェニングズ船長が指揮する商船「オークランド号」で，中国からアメリカ本国に帰る途中，日本の沿岸約500マイル沖合いに「難破している一隻の和船」を見つけたと，船長の報告書には記載されております。

救われた栄力丸の船員達は，涙を流し両手をついて「甲板の上に立つ男たちに手を合わせて拝み……何度も頭を深くさげた」（吉村 56）といいます。彦蔵が後に英文で出版した自伝によると「乗組員は，船長と，航海士がふたり，水夫が六人，あとはコックとボーイがひとりずつだった。士官や水夫の外見は，どれも同じように思われた。たいていの者があごひげをはやし，フランネルのシャツ（黒いのも，赤いのもあった）を着て，黒ズボンをはき，ズボン吊りを肩に十文字にかけていた。船長は長靴をはいてズボンをそのなかに突っこんでいた。ほかのたいていのものは短靴だったが，なかにはこの寒空に，はだしのままの者もあった」（浜田[2] Ⅰ-49）。コックは「せいが低くて一見日本人と見紛う」（プラマー 230）中国人で「たっぷりした袖の丈の短い上着にだぼだぼのズボンを穿き，弁髪を結って」（プラマー 230）おり，互いに言葉は通じなかったのですが，救出騒動も収まって船が再び航路に就くと，後甲板まで船長に呼ばれたこのコックが，紙に漢字で「金山」と書いて船を指さした。「その船が金山の国たるカリフォルニアに行く，ということなのだと分かったのは，ずっと後にサンフランシスコに着いてからであった」（浜田[2] Ⅰ- 50－51）ということです。

サンフランシスコ　彦蔵らが到着する三年前の1848年と言えば，メキシコとの戦争に勝利したアメリカが，カリフォルニアをその領土の一部に加えた年であり，またその翌年の1849年

は，サンフランシスコ近郊のサクラメント渓谷（コロナ近くサッターズ・ミル）で砂金鉱が発見されて，いわゆる forty-niners と呼ばれる，「黄金捜し」に狂奔した人々が全米から殺到して，ゴールド・ラッシュが始まった年でした。以後，サンフランシスコは急速に発展し人口が増え，太平洋を挟んで日本や中国との通商の要求が高まる大きな背景・要因となっていたのです。

船がゴールデンゲートをくぐると目の前にはほぼ百日ぶりに見る陸地がありました。オークランド号はテレグラフ・ヒルの真下，ノース・ブリッジに投錨します。税関の役人が「ハワイヤ」（How are you?）といったのを「カワイヤ＝可愛いや」と言われたように聞こえて嬉しかった，と彦蔵は自伝に記しています（浜田[2] Ⅰ-69－70）。

ともかく栄力丸の日本人にとって初めての外国であり，見るもの，触れるものすべてが物珍しく，道幅が広く「石畳になっていて両側に歩道があり，車道には馬車が行き交っている。家は大半が石で出来ていて，二階建や三階建のものが多」（浜田[2] Ⅰ-70）いサンフランシスコの街は，故郷の播磨とは天と地の違いがあるように思えたようです。

彦蔵は，先ほどの税関の役人に連れられて上陸し，靴を買って貰ったり，一緒に入った酒場で菓子をご馳走になったりして仲間から羨ましがられております。

彼ら漂流民はこのあと，サンフランシスコ湾に繋留されている税関の監視船「ポーク号」の船内で生活することになるのですが，その間，ポーク号に隣接する船の船長に連れ出され，舞踏会の客たちの前で「見せ物」にされるという，自尊心を傷つけられる不愉快な体験をしたりしながら，約一年をこのサンフランシスコで過ごすことになったわけです。

しかしときには，「俺たちはなんでこんなに親切にされるのだろう」という疑念に悩まされたようで，「何か魂胆があるせいだろう」（プラマー　233）という船乗りもいたが船頭の万蔵は，「ここの人たちは，ただ善良で慈悲の心があるだけなんだよ。それにおれたちは何から何までなくしてしまったし，異郷に来て知人もなし，ひとつふたつの赤んぼう同様に土地のことばも話せないんだ。それを知っているからこそ，親切にしてくれるんだよ」（浜田[2] Ⅰ-82）とたしなめたという話です。しかし日本人漂流民の疑念は満更根も葉もない「妄想」というわけでもなかったようです。次に引用するのは，漂流民がサンフランシスコに到着した1851年3月5日付の「アルタ・カリフォルニア」紙の記事です。

> この事件は日本との国交開始計画に絶好の機会を与えたものと思われる。この人びとを好遇し，アメリカの軍艦で祖国に送還するべきである。その軍艦の司令官には，日本政府開国を申し入れる権限を与えるべきである。（プラマー 233）

また，これに同調する意見が政府閣僚（国務長官＝ダニエル・ウエブスター）からもこの後

五月に出て来ます。

（サスケハナ号座乗の）オーリック司令長官が私に提案してきた件については，確かに，この（栄力丸生存者を救出した）出来事は，日本帝国との通商交渉開始にあたって，少なくともあの島国との交渉を円滑に進める上で願ってもない糸口を与えてくれる可能性があり，私としては，オーリック司令官の意見に大いに賛成である。（プラマー 233－234）

香港へ　その政策が実施されて漂流民たちは，1852年3月13日，ほぼ一年少しでサンフランシスコを後にすることになります。彼らは前述したように，次の航海に出ていくオークランド号から既にポーク号に乗り移っていましたが，この船の「先任衛兵伍長」であるアイルランド系アメリカ人，トーマス・トロイと親密になっており，日本訪問を夢見るこの人物は，漂流民との交際で日本語もかなり堪能になっていました。いよいよ極東へ連れ戻されるという話を聞いた彼らは，このトーマスに通訳として同行を依頼するのです。根っからの好人物であったらしく，給料が50ドルから12ドルに減ることになるにも拘わらず，この先任伍長はこれを了承してくれたのでした。

途中サンドウイッチ諸島（ハワイ）に立ち寄った際，最年長の万蔵が六ヶ月の罹病の末，死去したため，彼の死を悼んだ部下の乗組員たちは，大きな墓を建てこの異郷の地に果てた船頭を手厚く葬ったのです。

さて彦蔵らを乗せた軍艦「セント・メリー号」は，一週間ヒロに滞在した後，香港に向けて出帆し，5月20日，マカオ港に到着しています。このとき，ジョン・オーリック提督の指揮下で日本に向かう予定（後年ペリー遠征の折りの旗艦となる）の「サスケハナ号」は既に入港を果たしていました。彦蔵たちは，すぐにこの船に移され，いよいよ日本遠征の時期を待つことになったのです。ところが，この「サスケハナ」の船上での待遇はこれまでのどの船でも経験したこともないような酷いものでした。その「理由」を彦蔵がトーマスに聞くと，

サスクェハナ号は，長いあいだ清国の基地にいて，清国人の取扱い方になじんでしまっている。さてその清国人というのは貪欲で卑屈な種族で，金になるというのなら，どんな待遇でも甘んじて受ける，けもののようにけとばされようとなぐられようと一向にかまわないのである。そんなわけでサスクェハナ号の乗組員は，どうせ私たちも同じような根性，いやむしろ根性のない連中だと思って，清国人同様に扱っているのだということであった。

（浜田[2] Ⅰ-92）

しかし次のようなこともあって遂に彼らの不満は頂点に達するのです。

七月のある晩のこと，暑さで息もつまりそうになった。ほとんどがまんができないほどであった。そこで仲間の何人かがデッキに出て，数名の水兵が大の字になって寝そべっている外輪おおいの間のところに寝そべった。私たちは，たしかに誰のじゃまにもならぬところにいたのだから，まさかこれが悪いことだとはすこしも考えなかったのだ。しかし見張りの士官の目が私たちをとらえると，何ごとか大声でどなった。そして靴で蹴り，下に降りていけと指さした。こんな風に私たちは，豚の群みたいに下甲板の居住区に追いおろされたのだ。（浜田[2] Ⅰ-92－93）

そんなうちにある事件がもちあがったのです。それは彼ら以外の漂流日本人「力松」との出会いでした。この人物は，かつて熊本のある回船の乗組員で他の三人とともに，航海中天草沖周辺で時化に遭い，フィリッピンにまで流されたところをイスパニア人に救助され同国の船によってマカオに送られた，そのあとギュツラフという宣教師[3)]の世話を受けるようになったとき，彼らより先にギュツラフの元で暮らしていた，音吉ら宝順丸の三人と共に生活するようになり，さらにまた1837年，一緒にモリソン号で日本に向かったあと，マカオに舞い戻って現地の人として暮らしていたのでした。

それから十五年，七人の漂流民のうち，既に三人が死亡しており，そのうちの一人「寿三郎」は「阿片の吸引でやせ衰えて」死んだが，中でも哀れを留めたのが宝順丸の「岩吉」で「寧波に住んで清国の女を妻としてい」たが「その女が不義をし，間夫に殺された」というのです。残る四人のうち，同郷の「庄蔵」は裁縫商を営み，清国の女性を娶って子供もでき彼のすぐ近くに暮らしていること，宝順丸の「久吉」は上海の役所に勤めてやはり妻帯している。また音吉も「上海に住み，イギリス商館の支配人」として活躍，「漢字をよく知り，イギリス語を話すのも巧みで，天竺の女を妻としてなに不自由なくくらしている」（吉村121）し，自分（力松）は，「当時三十一歳で，『チャイニーズ・フレンド』というプロテスタント系新聞 発行所の従業員」（プラマー 238）で「アメリカ女性と結婚して二人の間に三人の子供を儲け，香港での生活にすっかり根を下ろし，かつて自分の受け入れを拒絶した祖国に戻ろうという気持ちはもはやない」（プラマー238）ように見えたのです。事実彼は永力丸の連中に向かって帰国を諦めてこの地に留まることを勧め，自分が「役所に願い出て女房をめとり……職業の世話」（吉村 127）もすると申し出たのですが，彼らはこれを断り，サスケハナ号に戻ったといいます。

ところでこれより先の1851年11月，アメリカの第13代大統領フィルモア（Millard Fillmore，1800～74，1850～53）は，「病気」を理由にオーリックを更迭し，ペリーを「アメ

3） 拙論第二章106頁注６参照。

リカ東インド艦隊司令長官」に任命したのですが，この決定がオーリックの元に届いたのは1853年3月であり，後任のペリーが中国に着任したのは4月7日のことでした。この間，永力丸の漂流民らは帰国の意思も固く，なんとか日本に行く船をもとめて奔走する焦燥の日々を送っていたことになります。そうしてある日彼らは，帰国を祈願に出かけた香港の寺の僧から「アメリカの軍艦で帰ることを諦め長崎に向かう唐船」に乗ることを勧められ，サスケハナ号脱出を試みてその船の出る広東（乍浦＝チーフー）に向かう途中，盗賊に襲われ，身ぐるみ剥がれたあげく，やむなく戻ってくるという事件がありました。

ところで通訳として彦蔵らに同行してきたトーマス・トロイというアメリカ人もいつまでたってもやって来ぬペリーに業を煮やし，「ゴールド・ラッシュが終わる前にカルフォルニアに戻って一山あてたいと考えるようになって」（プラマー 240）彦蔵を誘います。彼は，仲間も同行するならという条件で承知したので，こうして，カメ（亀蔵），トラ（次作），彦蔵，トーマスの四人は，サンフランシスコ行きの船「サラ・フーパー号」で1852年10月，香港を出たわけです。

残った永力丸の十三人は，なおサスケハナ号に留まるのですが，この軍艦がフィリッピンに回航し，1853年上海に入港した際，今度はあの宝順丸の音吉に出会っています。イギリス商社デント商会で重要なポストに就いていた音吉の自宅を訪れた一同は，その豪奢な生活ぶりに驚嘆の目を見張っています。音吉は彼らの帰国のために献身的な世話をし，現下の国際状況からアメリカ船でなく，中国船での帰還を提案し，こうして漂流民たちは，サスケハナ号を降りることになったのです。彼らは音吉の斡旋で上海で仕事を見つけ，帰国の機会を待つことになりましたが，しかしながらその理由は定かではありませんが，ここにサスケハナ号に残った一人の日本人がおりました。その名は，「仙太郎」という炊で，結局この年七月，彼のみがペリーの日本遠征に同行することになった[4]わけです。

税関長サンダース　再びサンフランシスコを訪れた彦蔵と二人の日本人は，トーマスの世話で仕事に就きますが，彦蔵は，サンフランシスコから北のベネシアと言う町の下宿屋で働いていたころ，重太郎（勇之助？）という日本人に出会います。この人物は，越後の出身で，越後－函館間を航行する千二百石積の船の船員だったのですが，函館からの帰途，津軽海峡付近で嵐により遭難，四ケ月の間漂流中，乗組員は全員死んで一人だけになった，鰯の干物を食べて命長らえ，アメリカ船「アーガス号」に救助されてサンフランシスコに連れてこられた，というのです。

4）　仙太郎は、サム・パッチ（Sam Pach）と呼ばれ，そのままサスクェハナ号の水夫にされた。のちにコックとしてジョン・ゴーブルや外国人教師クラークに雇われ，キリスト教（バプティスト）に改宗して1847（明治七）年，41歳で没した。東京・大塚本伝寺のその墓石には「三八君墓　明治七年」との文字が刻まれている（プラマー 270～271，春名 208～209）。

船長から重太郎を税関に連れていくように頼まれ，そこで通訳をした彦蔵は，以後彼の「恩人」ともいってよい税関長ビバリー・ C．サンダーズ氏との運命的な出会いを果たすことになります。政府役人であると同時に富裕な銀行家でもあったサンダースは，彦蔵の「通訳ぶり」を見て，この優秀な若い日本人をなんとか，自分の手でアメリカで教育を受けさせたいと考え，東海岸に連れていくことにしたのです。

二人はホーン岬経由でニューヨークまで船で，それからワシントンまでを蒸気機関車で旅行していますが，無論汽車に乗ったのは初めての体験でした。ワシントン滞在中にサンダースに伴われホワイトハウスを訪れた彦蔵は，日本人として初めてアメリカの大統領（フランクリン・ピアス）[5] に面会するという栄誉に浴することになるのです。

> ピヨスの屋敷に至り見れば，方二三町にて，周囲は石を重ね，凡そ高サ三四尺，その上に鉄ぎぼしを付けたる垣を廻して，その内に，大なる二階建の家有り，大なりといへど，商人の家にもかよふの大家あり，只柱その外とも白色の蝋石を以て造り，結構美麗を尽くせるを，常人の家にことなりとするのみ，大王の住所には，案外手がるの事なり，門番人もなく，家に至りておとづれをなせば，下男一人出て取り次ぎをなし，座敷へ通るべしと有るによって，サンドスと共に入るに，凡そ五十畳ばかりの間，二間つづきて，奥の間に，客人二人と対話の様子につき，次の間に，対話の終わるを待つ。客戻り，大頭領自身立ちて，我々を迎ひ入れ，手を握り，礼終わりて，サンドスより我うへを告げれば，我が手をも握り，自から腰かけをもち我を座につけ，種々の物語ある間，退屈にあらんと察して，遠慮無く内外を見めぐり遊ぶべしとあるままに，家内又庭等を見物せるに，悉く目をおどろかすばかりなり…（浜田[1] 382-383）

ピアス大統領は「彦蔵におだやかな眼をむけながら，年少であるので政府の学校に公費で入れ，学問を学ばせば大いに役に立つだろう」（吉村 232）といってくれたが，サンダースは「私ハ，自費でカレヲ学校にイレルツモリデス」（吉村 232）とこれを断ったという話です。

入学・洗礼　ボルチモアの自宅に戻ったサンダースは，ロシアに商用に出かけるのですが，彦蔵を学校に入学させるように夫人に託しています。1854年1月20日，カトリック系のこの学校の生徒数は，百五，六十人位で彼は学生寮に入ることになりました。学科は「英語の書き方，読み方，天文，地理，算術，音楽」でしたが，会話と簡単な単語の文字しか知らない彦蔵を

5）　Franklin Pierce（1804～69）。アメリカ合衆国第14代大統領（1853～57）。ニューハンプシャーヒルズボロ生まれ。1827年弁護士となり，その後ジャックソン率いる民主党議員に選出され，1837年から連邦上院議員。大統領任期中の業績はミズリー州妥協法の廃止，南北戦争の遠因となったカンサス＝ネブラスカ法制定。この法律が不評で1857年には政界から引退。

「担任のウオルター先生は最も我慢強く私のことに一番注意を払い，クラスの仲間たちもたいそう親切だった。休み時間になると，彼らは必ず私の周りに集まって来て，勉強を手伝ったり，言葉を教えてくれたりした」（プラマー 244）。

夏休みになると，サンダース夫人の母親の農場に避暑に行き，黒人奴隷の労働ぶりに感心し，「夜にやるダンスに興味をそそられ」また老夫人から牛乳を勧められて戸惑うが，思い切って飲んでみると「おいしくて飲みよい」ことに驚いています。

教会に通うようになったのもこの頃からでした。帰国したサンダースとともにサンフランシスコに出発する直前，彦蔵が「文明の恩恵に浴す」ことを望んだ夫人に同意して，キリスト教に改宗し洗礼を受け，「ジョゼフ」という名を貰ったのでした。

サンフランシスコ大学　1854年11月28日，サンフランシスコに到着した彦蔵は，サンフランシスコ大学に入学し，ここで一年間，経理や商業英語などを学びましたが，サンダースの事業が不況のために大損失を蒙ったので，退学して彼の貿易会社「マコンダリー」で事務員として働くようになりました。しかしこれより先同年3月31日，日本は既に「鎖国」を解いて，下田・函館の二港を海外との通商のため解放することになっており（「日米和親条約」），それを報道する「ニューヨーク・タイムズ」の記事を彦蔵が，永力丸の仲間の治作，亀蔵に読んで聞かせたのもこの頃でした。

アメリカ人ジョセフ・ヒコ　彦蔵の波乱に満ちた人生が始まるのは実はこれからで，彼は以後日本とアメリカの両国を何度も行き来する運命を迎えることになるのです。

1854年サンダースの友人，上院議員のグゥインに連れられ彦蔵はワシントンを再訪，当時の大統領ブキャナン[6]に面会しています。グゥインの計画は大統領の推挙によって彦蔵を国務省のポストにつけることでした。これは成功しませんでしたが，結局彼は，中国・日本の沿岸調査計画を進めている，ジョン・ M・ブルック中尉[7]と知り合い，この人物が艦長を勤める太平洋海洋調査船「フェニモア・クーパー号」の書記に任命されたのです。

ところで彦蔵はボルチモアを去る前，アメリカの国籍を得ていますが，これはサンダース夫妻が，日本に帰った彦蔵が，キリスト教徒であることで迫害を受けるのではないかと心配し，帰化を勧めたからでした。

6）　James Buchanan（1791～1868）。合衆国第15代大統領（1857～61）。ペンシルバニア州ストーニー・バター生まれ。1812年法曹界に入る。1845年国務長官になり，オレゴン境界問題の解決に成功。民主党から指名を受け，1856年大統領に当選。就任期間中に奴隷問題が危機に面した。奴隷制の維持に強く賛成し，奴隷州としてカンザス州を設立する試みを支持した。1861年退陣後は，公務につかなかった。

7）　John Mercer Brooke（1826～1906）。アメリカの海軍軍人・科学者。1859（安政六）年測量船フェアニモア・クーパー号艦長としてサンフランシスコから香港までの航路調査後，横浜に入港。同船の難破により横浜に滞在していたが，遣米使節の別艦派遣に際して助言を与え，60（万延元）年部下とともに咸臨丸に同乗して帰国。咸臨丸での日本人初の太平洋横断の成功はブルックらの貢献によるところが大きい。

六月七日。故国への出発の日が近づいた。そこでサンダース氏の考えでは，ボルチモアを出発する前に帰化しておくのが一番だ，ということだった。サンダースは私を合衆国地方裁判所に連れてゆき，そこで私は，合衆国地方判事ジルと，裁判所書記スパイサー氏のサインの入った帰化証明書を手に入れた。ここに私はアメリカ合衆国の市民となった（浜田[2] Ⅰ-129）。

「フェニモア・クーパー号」は1858年9月，サンフランシスコを出港しています。船はサンドウイッチに寄港し，それから「シーサーペント号」で香港に渡り，ここで彦蔵は，かつての永力丸の同僚の「岩吉」に再会したのです。彼は「伝吉」と改名し，開国直後の日本初代英国総領事として近日赴任するラザフォード・オールコックの召使いとして働いており，ダンと呼ばれていました。オールコックに紹介されたとき，総領事付きの通訳の仕事につくよう要請されていますが，「アメリカ人であることと，岩吉より高い地位につくことになるため」これを断りました。

彦蔵はブルックの紹介でアメリカ公使タウンゼント・ハリス[8)]から，神奈川領事ドールの通訳を勧められ受理し，ハリスに同行して「ミシシッピー号」によって遂に十年ぶりに帰国することになったわけです。

神奈川領事付き通訳　安政六年（1859）6月17日の夜，艦は長崎港に入り，投錨しました。翌朝，鮮やかな緑に覆われ陽光に輝く長崎の町並を目にして万感胸に迫ったのでしょう，彦蔵は不覚にも涙をこぼしてしまった（吉村 312）ようです。5月24日，ミシシッピー号は長崎を発って下田港，それから江戸湾に入港，神奈川沖に停泊しました。彦蔵は，横浜に着くと，日本人から距離を置いた「外人社会」に身を置く決心をするのです。

7月21日，噂を聞きつけた十年前に別れた義兄，宇之松が彼を訪ねて来ます。久方ぶりの兄弟の対面を『自伝』より引くと，

…私には兄がすぐ分かった。というのは，私の遭難以前に兄はもう大人になっていたので，すこしも変わっていなかったからである。ところが，私の方はそうではない。なにしろこちらが一人前になったのはあのとき以後で，着物も物腰も，風采も，ひどく変わってしまっていた。

したがって兄には私が分からなかった。兄は苦しさと，うさんくささとを顔に浮かべて，

8）　Harris，Townsent（1804－78）．アメリカの外交官。ニューヨークの商人出身。中国・東南アジアで貿易に従事したあと，1854年寧波領事。55年下田の初代米国総領事に任命され，通商条約締結の全権を委任された。58年他国にさきがけて日米通商条約の調印に成功。59年初代駐日公使となり，江戸麻布善福寺に公使館を設けた。62年（文久二）帰国。

気の毒にも私の方を見つめたまま，立っていた。一言もしゃべらず，だまりこくって，哀しそうにじっと私をみつめたままで，この私が，ひょっとすると自分の弟ではないかもしれぬぞ，と思っているのは明らかであった（浜田[2] Ⅰ-179）。

そこで親戚や近所の人々の名前を次々と挙げて消息を尋ねていくと，

とうとううれしそうなほほえみが兄の顔にひろがり，口もとがほころび，私の質問に一つ一つ答えはじめた。そして本当に文句なしに，この私が自分の弟だと思えるようになってくると，兄はわっと泣き出し，長い年月の後に二人がふたたび会えた喜びに，大粒の涙が頬を流れ落ちた。これを見ると私も，胸が迫って泣けてきた（浜田[2] Ⅰ-179）。

さてこの後，彦蔵は神奈川領事のドールのために「通貨制度，外国人居留地のこと，対外的事務の通訳」と八面六臂の活躍をするのですが，ホノルルの『フレンド』紙にデイモン牧師は，この頃の彦蔵の活躍について次のような記事を載せて高く評価したのです。

The Friend, Honolulu, July, 1862

（ヒコは）我が国神奈川領事館にあっては，日本語と英語の知識を駆使して，この度大変な活躍を見せた。ロシア，フリゲート鑑の下士官が横浜で日本人に殺傷されるという事件が起きたときのことである。ロシア総督は，下手人の引き渡しを日本当局に要求した。日本当局から満足のいく返答を得られなかった総督は，横浜の町を武力攻撃しようと決意したが，アメリカ領事ドールは，日本当局との仲裁役にヒコを使うように進言し，ヒコはその大役を果たしたのである。下手人を捕らえることこそ出来なかったが，ヒコは日本側と折衝して樺太の一部をロシアに割譲する妥協策を取り極め，そうすることによって横浜の町をロシア艦隊による砲撃と破壊から守った（プラマー 249－250）。

万延元年（1860）1月，咸臨丸が，日米修好通商条約の批准のために，日本人使節をワシントンに送るアメリカ軍艦「ポウハタン号」に伴走していくとき，「ジェイムス・フェニモア号」のブルック中尉とその乗組員は，サンフランシスコまで水先案内を務めることになったのですが，彦蔵はブルックに別れの挨拶を交わしに「咸臨丸」を訪れます。このとき船上で提督の木村摂津守，艦長勝海舟とともに通訳の中浜万次郎に紹介されています。万次郎は，彦蔵のことを聞いていて「私と同じように漂流の憂き目にあった由ですが，お互い国のために働きましょう」と言って，彦蔵の手を固く握ったといいます。万次郎はこのとき三十四歳，「風格があっ

て十歳年下の彦蔵は何か圧倒されるようなものを感じた」（吉村 359）ようです。

リンカーンに会う　咸臨丸がアメリカに滞在中の3月，故国では井伊大老暗殺の「桜田門外の変」が勃発しているように，この時期の日本は，「攘夷」の嵐が吹き荒れた時代でした。生麦事件，ヒュースケン（アメリカ公使ハリスの通訳）殺害などを初めとして何人もの外国人が攘夷の刃に倒れたのみでなく，日本人でありながら，外国の領事館で働く通訳やコックその他の人たちも「国賊」としてこの「攘夷」の対象になり，イギリス公使館通訳「ダン・ケッチ」こと伝吉（岩吉）も殺害されたように，彦蔵も身の危険を感じるようになり，「アメリカ帰国」を決意することになって彼は，文久元年（1861）十月，日本を後にしました。

1862年，サンダースとの再会を果たした後，3月13日，彼は第16代大統領エイブラハム・リンカーン[9]と会見しているのです。

私たちが大統領室に入ると，大統領は肘掛け椅子に腰をかけていたが，そっくりかえっているので，床についているのは後の二本脚だけ，自分の両足首は組んで重ねて前の机の上に投げ出し，眼鏡を額までずり上げていた。彼はすぐ近くにすわっている一人の陸軍将校の話をじっと聞いていた……。

この男がいなくなった後，大統領は腰をあげてこちらへやってきたので，私たちも席を立ち上がった。

「シーワード君（国務長官，筆者注），こんにちは」

と彼は言って，相手と握手した。そこでシーワードは言った。

「私の友人で，日本人のヒコ氏を紹介したいと思いますが」

大統領は大きい手をさしのべて，日本のような遠いところからよく来てくれましたね，と言った。それからアメリカでの私の境遇について，数多くのことを尋ねた…」

（浜田[2] Ⅰ-269，270）

言うまでもなく，このときアメリカは南北戦争（1861～65）の最中であり，その激動の真っ只中に彦蔵はかつてのアメリカには見られなかった殺伐たる雰囲気を感じとるのですが，それのみか，ワシントンで南軍のスパイと間違われて北軍憲兵大尉に逮捕され一晩を拘束されるという，体験までしているのです。こうして「自分の生きるのは日本以外にはない」ことを知った彦蔵は，日本に戻ろうと決心したのでした。

9）　Abraham Lincoln（1809～65）。アメリカ第16代大統領（1861～65）。ケンタッキー州ホッジェンヴィルに近い丸太小屋で生まれた。1836年，独学で弁護士の資格を得る。1858年ホイッグ党の後身である，共和党員となり，イリノイ州連邦上院議員選挙に立つが落選。1860年大統領選に出馬し，当選。1863年１月１日，南部同盟諸州すべての奴隷解放を宣言。1864年再選に向けて奴隷制廃止を唱えた。南北戦争集結後の1864年４月14日，観劇中に俳優ブースの銃弾を受け，暗殺される。

『海外新聞』の発行　彦蔵はアメリカ領事館勤務を辞したあと，横浜で貿易商を営むことになりますが，1864年（元治元年）6月，岸田吟香，本間靖雄とともに日本最初の新聞を発行しています。『海外新聞』と呼ばれたこの新聞は海外からの情報を聞きにくる　武士や商人に無料で情報を提供していた彼が，外国新聞の翻訳を思い立って始めたものです。26号まで続きましたが，6号では「リンカーン暗殺」を報じています。

その他彦蔵の活躍として特記すべきは，イギリス人アレキサンダー・シャンドとともに日本の「国立銀行条例」の編纂に力を尽くしたことでしょう。「このとき制定された条例は，その後，長期間に亘って日本の金融制度を支配することにな」（プラマー 253）りました。

彦蔵の生涯　さて彦蔵の数奇な一生を垣間みた我々は，先の万次郎とは違ったものを感じざるをえません。万次郎の場合，幕府の中枢から召し抱えられ，国政に参与し，維新後も大学その他の教育に携わった「公人」として位置づけられるのに反し，「アメリカ人」でもある彦蔵の場合，その活躍の場は，あくまで「外国人社会」にありました[10]。いわば，彼は二重の国籍を得た者のみが味あう，あの「故郷喪失」に似た悲しみ，「国外（籍）離脱者」（expatriate）の苦しみを身をもって体験した人物なのです。

万次郎の家系は存続していて，彼の代々の子孫は，万次郎の恩人である「ジョン・ハウランド号」のホイットフィールド船長の子孫達と今も太平洋を挟んでの交流が繁く続いているという話です。

しかし結婚はしたものの，子供のいない彦蔵の直系は絶えています。このように二つの祖国を持ちながら遂にどちらにも安住することの出来なかった彦蔵の人生は「波間に漂う木の葉」のようで彼自身の人生が「漂流」そのものであったと言えないでしょうか。

彦蔵の墓　明治三十年（1898）十二月十二日，夕刻，激しい胸痛に襲われ，彦蔵は遂に帰らぬ人となりましたが，その「臨終の床で最後に口から洩れた言葉はミスター・サンダースだったと伝えられ」（プラマー 254）ています。

翌日の新聞は，

「アメリカ彦蔵死す
　　日本で新聞の創設者」

とその死を報道しました。

10）　ただし「明治五年（1872），一時大蔵省に出仕し」（田中 470）たことがあるし，維新政府の伊藤博文，井上馨らとも親交はあった（吉村 498）。

翌年十二月，妻の鋹子の手で青山の「外人墓地」に墓碑銘が建立されましたが，その碑面には，英文で彦蔵の墓であるという表示とともに，漢字で，「浄世夫彦」（ジョセフ・ヒコ）という文字が書かれてありました（吉村 550-551）。

参考文献

（*印は，本章で引用・言及した文献を示す）
石井研堂[1]『異国漂流奇譚集』新人物往来社，1971年
*――――[2]『石井研堂コレクション　江戸漂流記念総集第五巻』日本評論社，1992年
*井伏鱒二「ジョン万次郎漂流記」昭和12年『日本の文学』中央公論社，昭和42年
*岩波＝ケンブリッジ世界人名辞典，岩波書店，1997年
*大宅壮一『炎は流れる』第2巻，文芸春秋新社，昭和39年
*川澄哲夫編著『中浜万次郎集成』小学館，1990年
*田中彰編『開国』日本近代思想大系1，岩波書店，1991年
*中浜博『私のジョン万次郎』小学館，1994年
*永国淳哉他『ジョン万次郎のすべて』新人物往来社，1992年
*『日本史広辞典』山川出版社，1997年
*浜田彦蔵[1]「漂流記」『石井研道これくしょん 江戸漂流記総集 第五集』日本評論社，1922年
*――――[2]『アメリカ彦蔵自伝』Ⅰ，Ⅱ，平凡社・東洋文庫，昭和39年
*春名徹『にっぽん音吉漂流記』晶文社，1980年
*――――・鶴見和子「開国と漂流民像」『石井研堂これくしょん　江戸漂流記総集』日本評論社，1992年
平尾信子『黒船前夜の出会い-捕鯨船長クーパーの来航』日本放送出版協会，1994年
*プラマー，キャサリン『最初にアメリカを見た日本人』酒井正子訳，日本放送出版協会，平成元年
*メルヴィル，ハーマン『白鯨』上下，田中西次郎訳，昭和60年
*森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会，1994年
*吉村昭『アメリカ彦蔵』新潮文庫，平成13年

第四章　黒船艦隊の来航

Ⅰ．第一次来航－ペリー・ショック

異国船見ゆ　嘉永六年（1853）六月三日（7月8日）の「朝五つ時頃（午前八時頃）」，伊豆半島の南端，下田沖合から相模湾に入る辺りで，「何(いずれ)も帆檣を二本建て」た「異国船大二艘小二艘都合四艘」が「北西の風を受けてやってきたが，間もなく北風に変わったので四艘とも帆を下げて北の方に向けて通り過ぎていった」（『大日本古文書　幕末関係文書之一』嘉永六年癸丑一，『通航一覧続輯』第四巻，巻之百二十五）という報告が，五日，下田在勤の浦賀同心より浦賀奉行所に届けられました。発見者は，下田町の漁船主，与八，久次郎，吉平で，彼らによれば「小船の方は，大船に曳かれ，いづれも帆を下げたあとは，大船の方からは二度ばかり煙が上がり，波を掻き立てるようにして猛スピードで走り去っていった」（同上，傍点現筆者）というのです。「帆檣二本」という部分は，正しくは「帆檣三本」とすべきところなのですが，これは「三本マスト」の帆船を見たことがなかったことに加えてさらに，慌てふためいていたところから起きた見間違いというべきでしょう。ともかくこの三人の漁師が「黒船」[1]の第一発見者なのですが，しかし何故か届け出の日付は二日も後の五日になっています。従って「黒船発見」の第一報という栄誉は，「今三日未上刻（午後二時～二時四十分）」，浦賀奉行の「家人」から江戸湾警護に当たる「四家（藩）」，つまり，彦根・会津・忍・川越の陣屋に届け出られたという，次の文書に与えられることになります。「以手紙啓上仕候，然らば今三日未上刻松輪崎辺江異国船四艘ほと走り参り候由三崎詰め組之もの注進申出候，此段為御承知可得貴意旨伊豆守被申付如此御座候」（『続輯』百二十四）。浦賀奉行所では，ほぼこれと同時に奉行の戸田伊豆守氏栄から早船が出されており，江戸詰めのもう一人の奉行，井戸石見守弘道のもとに次のような書付けが届いたのが，その夜四つ（午後十時～十二時），直ちにそれは老中阿部正弘に差し出されました。「相模国城ケ嶋沖合ニ異国船四艘相見候趣三崎詰之もの注進申出候ニ付き，早速見届けとして組之もの出張為仕御固四家に為心得早々相達候処，只今千駄崎迄迅速に走り込み候，依之此段先御届申上候」（『続輯』第四巻，百二十四）。

こうして城ケ島の沖合いから三崎沖，さらに松輪崎，上宮田，千駄崎の沖合「と，この四隻が，薄い靄のたちこめる相模湾を北上して浦賀水道に入るに従い，沿岸の詰所から奉行所に向けて目撃の情報が続々と寄せられていくのですが，そうこうするうち，この黒塗りの四艘の軍艦は江戸湾口に姿を見せて，とうとう浦賀沖に投錨してしまいます。それが三日午後四時頃の

1）　黒船とは，『大辞林』によれば「①室町時代以降，欧米諸国から日本に来航した帆船の称。船体が黒塗りだったのでいう。のち，蒸気船を含む大型の外国船の俗称。②江戸時代，大名の軍船などに用いた黒漆塗りの船」で，ここでは①を示す。しかし「現代の用語法では，幕末の開国を導いた船，すなわちペリー艦隊の汽船とほぼ同義に受け取られている」（加藤[1]　42，加藤[2]　472－473）。

こと，第一報が浦賀奉行所に届いたのは「黒船艦隊がすでに浦賀沖に錨を下ろした後」（加藤[1] 1）だったようです。

以上は日本側の記録ですが，アメリカ側は日本人との最初の「出会い」について以下のように記しています。

かやうに陸地に接近したから，（七月七日）夜中から翌朝四時まで船首を沖合に向けていた。四時には燦頭から伊豆岬が望まれた....その朝，大気には靄が非常に多くて，険阻な海岸の形がおぼろに見えるだけであったが，天気は晴朗であった。けれども間もなくその靄の中からイヅ（伊豆）の岬が徐々に海面に威容を現はして来，高い山又山が重畳している日本の奥地まで遠く連なってゐるのが見うけられた。嚮導艦たるサスクェハンナ号の針路は真直ぐに江戸湾の入り口に向けられた。同艦が険峻なる伊豆沖を通過するや，やがて岩島と云はれてゐる低くて草木のない，一見したところ無人島らしい長さ約四分の三哩の一小島に近づいた。…島から一哩半以内の距離を保ってここを通過した。艦隊が沿岸近くを航走していると，八艘乃至十艘ばかりの小舟が視界に入ってきた。

その中の二三の小舟は間もなく方向を変えて，あたかも遠来の客の到着を知らせに行くかの如く，海岸の方へ引き返して行くのが見受けられた。

この朝は空が非常に曇って靄が濃かったので，不幸にも視界は極めて狭く，噂に聞く日本の天気の特徴が確かめられたやうに思はれた。そして艦隊が浦賀の町の沖合に碇泊するに至るまでは，海岸の形をはっきりと知ることが不可能だった。風があったのにも拘わらず汽船は帆を全部捲き下ろして，八乃至九節の速度で進んだので，海岸に群がったり湾口の水面に散らばったりしてゐる日本漁船の乗組員を驚かしたのであった。彼等は自分たちの船の上に立ち上がって日本の海に現れた最初の汽船を眺めながら，明らかにいたく驚愕の色を現していた。…艦隊が湾内に入ると漁船は益々警戒したが，そのうちの一隻は蒸汽船に追いつかれてしまった。船の者等は恐ろしく興奮している様子で，幅広い帆を下ろして，明らかに艦隊から遠く離れて行かうとの心遣ひらしく懸命になって櫓を漕いでゐた。…艦隊が陸地から二哩以内の所まで接近した時，その数一ダースを超ゆる程の大形の船が艦隊めがけて漕ぎ寄せてきた。見かけたところ吾々の船に来るつもりらしかった。けれども吾々はそれを待とうとしなかったので，彼等は間もなく後ろに取り残されてしまった。彼等は風に抗して進む快速の汽船を見て疑いもなくひどく狼狽してゐた。それ等の船には人が一杯乗ってゐて，各船には或る文字を記した大旗が立ててあったが，武装してゐるようには見えなかった。その文字から推測すると，船は或る種の政府御用船であったらしい。

（ホークス[1] Ⅱ-182－183，184，下線現筆者）

同じく『遠征記』によれば，直ちに「数多の防備船が四方八方から漕ぎ寄せて来」て「サラトガ号の舷側に船を横付けにして乗船を企」て「麻縄を無遠慮に投げかけ」て「鎖で攀じ登らうと企てた」ので，「（水兵が）槍や短剣やピストル」を出して見せ付けると「辟易して…乗船の企てを断念した」ともいっています。一方，中国語の通訳として広東からペリーに同行したサミュエル・ウエルズ・ウイリアムズの『ペリー日本遠征随行記』（*A Journal of The Perry Expedition to Japan 1853-1854*）では，停泊後の日本側との「接触」を以下のように記載しています。

> 四時ごろ，各艦は浦賀 Uraga の沖に停船し，蒸気艦二隻は町の近くに位置をとった。スカウ scow（どろや石炭などを運搬する平底の船）に似た多数の小船が筋骨たくましい裸体の船乗りを満載して，近くにやって来た。私は，舷門に一番近づいた船に乗っている身形を正した男（浦賀奉行支配与力中島三郎助永胤）に，使いを陸にやって，皇帝（将軍）に宛てた親書を受け取るため，高官を寄こしてくれるように求めた。しゃべっていると，もう一人の役人（和蘭小通詞堀達之助）がやってきて「オランダ語が話せる」という。そこでポートマン氏 Mr. Portman（Anton L. C. Portman 提督の書記。上海で育ったオランダ語通訳）が，提督は高官の来艦を望まれているのです，と伝えた。彼は，そのような任務を遂行するために来合わせていた，自分のそばに立っている最上位者（与力中島三郎助，すなわち浦賀副奉行 the second governor in Uraga を指さして，副奉行はその任務を遂げることなくして，岸に引き返すことはできない，といった。しばし交渉が行われたが，この二人の身分が認められたので，ビューカナン艦長の室でコンティー大尉に応接させることにした。そこでお両人に，「大統領は皇帝に親書を贈るため四隻からなる艦船で平和使節を派遣した。この親書をしかるべき人物に託して江戸へ至急送ってほしい」と伝えた（ウィリアムズ 90）。

ところで当初はいろんな誤報が乱れ飛び，この「異国船」を「イギリス船」と考えた届け出もあった[2)]（『続輯』百二十四）ぐらいでしたが，この結果，この四隻はアメリカの軍艦，サスケハナ号（旗艦，2450トン），ミシシッピ号（1692.225トン），プリマス号（989.147トン），サラトガ号（882.150トン）であり，サスケハナ号とミシシッピ号は汽走帆船であり，プリマス号とサラトガ号は三本マストの帆船で，大統領の書簡を「日本国王」に渡すためにやってき

2） 幕府は，アヘン戦争（1840～42）で清国がイギリスに敗れ，南京条約（1842）を結んだ結果，香港を割譲し，開国を余儀なくされたことを「唐風説書」や「別段風説書」を通じて知っていたし，1808年のフェートン号事件後も，日本の沿岸にたびたび姿を見せ，住民との軋轢を引き起こしていたイギリスの捕鯨船をことの外警戒していたからであろう。しかし後述するように，「アメリカ艦隊の来航」も既にオランダ国王を通じて報じられていたのである。

たことが判明したわけです。彼は，1852年11月24日，　ミシシッピ号に乗って，アメリカのワシントンの南のノーフォークを出港し，マディラ，セントヘレナ，ケープタウン（希望峰），モーリシャス，セイロン，シンガポール，香港，マカオに寄港し，広東を経て上海に到着したもので，日本に来る直前，琉球，小笠原諸島に立ち寄っています。

六月四日から，艦隊が再来を予告して立ち去る六月十二日までの九日間，日本列島を震撼させた未曾有の大事件はこのように始まったのです。

庶民の反応　これまで述べたことから「異国船出現」に対する日本人の反応は，おおよそ想像できるのではないかと思います。六月四日の夜，浦賀の町に駆けつけた人々のうち，佐久間象山（1811～64）らは，つぶさに黒船をみて，その大きさに驚き，またその周囲を取り巻く多数の和船との違いを「大たらいの下にはまぐり貝があるようだと形容」（松本 9－10）しているのですが，このとき「大八車に荷物を積んで逃げ出す人々の様子を書き留めていた」（松本 31－32）のです。さらに「黒船現る！」の第一報が伝えられて大混乱に陥った江戸市中の有り様が，次の文章によってよく表現されています。

> 浦賀よりの注進の汗馬，海陸飛脚の往来，櫛の歯をひくよりも忙かわしく，江戸の大都繁華の巷も，俄に修羅の街に変じ，よろずの武器調度を持ち運び，市中古着商なう家には陣羽織，小袴付（こそでつき），蓑笠等をかけならべ，鍛冶を業とする者は，家毎に甲冑刀槍を鍛え，武器を累ねて其価平時に倍せり，海辺に本宅ある士民老幼婦女の立退かんとて，家財道具を持ち運ぶさま，さしもに広き府下の街衢も，奔走狼狽して，錐を立つべき所もなし，流言随って沸騰し，人心悩々として定まらず，…（小西 5－6）

しかし，どうやら戦争は起こりそうもないということが分かり，さらに「国書授受」のために久里浜に「上陸」して日米の交渉が始まる頃には，庶民の心からは，最初の「恐怖」は消え，さしもの大騒動も鎮まって来ました。そうこうするうち，「黒船来航」のニュースは錦絵や瓦版さらに口コミによって瞬く間に日本列島を駆けめぐり，今度は前代未聞の怪物を一目みようと海路，陸路，全国からどっとばかりに人々が押し寄せてくるのです。これらの人々の狂騒ぶり，さらにはこうした動乱の世相が当時流行した「戯れ歌」によってよく伝えられています。

「泰平の眠りを覚ます上喜撰（蒸汽船）たった四杯で夜も眠れず」
「井戸の水あってよく出る蒸汽船　茶の挨拶で帰るアメリカ」
「アメリカが来ても日本はつつがなし」
「甲冑は異国のかげで土用干し」
「武具馬具屋渡人さまとそっと云い」

最初の狂歌は，よく知られているので説明の必要はないと思いますが，二番目の歌の「井戸」というのは，当時の浦賀奉行の井戸石見守弘道という人物をさしており，「茶にする」というのは「馬鹿にする」の意味でもあることから，ペリーが「ちょっと からかった」というニュアンスが込められています。三番目は「つつがない」（平安無事）と「筒」（大砲，鉄砲）がないのを掛けているわけです。四番目，五番目の歌 は，江戸市民の混乱ぶりを写した先の引用文からわかるように，合戦を覚悟し武具に手入れする武士の日頃のなまくらぶりや，この騒動で大儲けした武具商を冷やかしたものです。

幕府の対応とその施策　以上，黒船に右往左往する庶民の反応を見て来ましたが，それでは幕府の上層部は，この事件をどのように受けとめ，また，どのように対処しようとしたのでしょうか。庶民とは違って彼らは，「鎖国」中とはいえ，第一回の「出島から見た世界」でお話したように，「オランダ風説書」というオランダの商館長の伝える「情報」によって「ペリーの来航」についても既にある程度の予備知識は得ていた筈なのです。

幕府に初めて「危機感」らしきものが芽生えたのは，「阿片戦争」（1840～42）の敗北によって清国がイギリスによって半植民地化されてしまったことを「唐風説書」によって知ったときであり，対外政策を変更して文政八年（1825）以来の「異国船打ち払い令」（無二念打ち払い令）を廃して，天保十三年（1842）年の，より温和な「薪水給与令」に切り替えたことも既に述べました。その翌年の天保十四（1844）年，オランダの新国王ヴィレムⅡが長年の友好関係にもとづいて幕府に開国を勧める書簡を送ってきました。それは「アメリカやロシアが強圧的な手段によって日本を開国させようとしている事情[3)]を述べ，自主的な開国こそが日本の将来の安全を保証する」という内容のものでした。これに対して日本政府の返答では，一応はその好意を感謝しながらも，鎖国の「祖法」においては「通信の国と通商の国」を明確に区別し，オランダは「通商」相手に過ぎず，あくまでこの「祖法」を厳守したいので，開国の勧告は拒否することを了承されたい，というものでした。

さらにペリー来航の前年の嘉永五（1852）年五月，アメリカの対遣日計画がオランダ政府に公式に伝えられてその協力を求めて来たときにも，オランダ・バタヴィアのオランダ東インド会社は，新オランダ商館長のクルチュウスに命じてその旨を徳川幕府に知らせる「別段風説書」を提出させ，またアメリカに先駆けてオランダと条約を結ぶことを提案したのです。しかしながら，結局このときもまた幕府は相手にならず，時の老中首座阿部政弘は確かに「これを

3）　欧米列強の中ではロシアが最も早く，既に18世紀から通商を要求して日本の北辺を脅かしていた。18世紀の中ごろまでのヨーロッパはまだ農業国であったが，産業革命を経て19世紀に入ると，いわゆる資本主義の発展により，各国は商品の販路拡大のための，市場獲得，植民地獲得を目的として一斉にアジア，アフリカ，新大陸へと進出して行った。19世紀半ばの世界情勢はこの215年間に大きく変化して，今や北からはロシア，東はアメリカ，東南アジア・中国を経て，西南からはイギリス・フランスと，三方向から「通交」を求める列強の手が日本列島へと伸びていた（小西 4－6ほか）のである。

憂慮して部内の意見を聴いたが確定的な案は出されず，大事に至る可能性はなかろう」として「真剣に対策を立てるに至らなかった」（山口 34）のです。いずれにせよ，このときの「別段風説書」とは，

別段風説書

阿蘭陀所領印度之都督千八百五十二年第四月七日自注嘉永五年閏二月十八日

評決之旨日本商館之かひたん職子トンクルキュルシュス〇人名に命しフレテレッキ〇ユルネヘリス〇ロフセ人名と交代いたせ申候，尤ロフセ儀ハ当人の願により首尾能かひたん職を免シ申候，

一　新かひたん儀ハ以前阿蘭陀所領印度ニ有之候大裁判所之評儀役ニ有之候，

一　爰ニ又一説有之候，北アメリカ共和政治之政府日本國に使節を送り日本國ニ通商遂度由ニ有之候，右使節は共和政治之フレジデント共和之司より日本ケイスル帝之儀書翰并日本漂民送り越候由ニ有之候，右使節日本湊之内二三所北アメリカ人交易之為開度且日本湊之都合宜敷所ニ石炭を貯置，カリホルニー地名唐國と蒸気船之通路用度願置致之由ニ有之候，

一　北アメリカ蒸気船仕掛軍船シュスリカンナ船号右船將アウリッキ人名船四艘則サラトカ船号フィモウト同上ファンタリア同上当時唐國ニ罷在候，

一　一説ニ右船之使節を江戸に指越候命令を請候由ニ有之候，

一　当時之説ニテハ船將アウリッキ人名使節之役を船將ヘルリィ人名に譲り且唐國に有之候アメリカ海軍数艘之蒸気船左之通相増候由，

一　ミスシッピー船号船司キリンネイ人名此船將ヘルリィ人名御座候，

一　プリンシセトウン船号船司シットネイスシット人名一兵粮運送船シュフレイ船号船司アルトヒュルシントカライル人名

一　風聞書ニハ上陸國圍軍之用意もいたし諸道具積入有之由ニ候，併右船第四月下旬当三月初旬ニアタル前ニハ出帆難成只今少し延引相成可致由ニ有之候，

古かひたん

フレテレッキコルネヘリロフセ

新かひたん

トンクルキュルシュス

（『通航一覧続輯』第四巻，巻之百二十四）

久里浜上陸　最初は，祖法を盾に幕府は長崎に行くように要求して，上陸，国書の受理を拒否したのですが，江戸湾内の測量を行ったり，空砲を発したりする威嚇や，「もし国書の授受を

断るなら江戸へ直接乗り付けて将軍に渡す」などという脅しに屈して結局浦賀近くの久里浜で親書を受け取ることに同意したのです。

六月九日（7月14日），久里浜海岸を五千人を越す武士が警護する中を，アメリカ側の水兵，陸戦隊，軍楽隊，士官ら約三百人らが先ず上陸し，最後にペリーが上陸したと伝えられています。日本側の交渉委員は，浦賀奉行の井戸石見守弘道と戸田伊豆守氏栄，その脇に香山栄左衛門，中島三郎助，通訳として前述の堀達之助，立石得十郎ら総勢わずか二十数名でした。井戸と戸田は「日本帝国の主席委員」（First Counsellor of the Empire）としてつまり老中扱いでしたが，これは碇泊直後の交渉で，アメリカ側が「浦賀の最高役人としか協議しない」とするペリーの方針を頑強に主張したため，通訳の堀が実際には浦賀奉行所の与力に過ぎない中島三郎助を「副奉行」と偽ったことで，次には同じ与力の香山を「奉行」に格上げせざるを得なくなって行ったやむを得ない措置でした。しかしこの点については，ペリー自身も自分自身を「合衆国の最高位」の高官としており，結局双方とも「地位詐称」を行ったと言えるでしょう。

国書授受　国書を長崎以外の場所で受け取るのは国法に触れるため，主席委員の井戸，戸田は終始一言も口をきかずに押し通しています。こうして「国書の受理のみに終わり双方の代表は沈黙，会談は一切行われなかった」（加藤 9）のですが，ペリーはこのとき，「大統領の国書，提督の信任状と二通の親書を手渡した」と言われています。会見が終わるとペリーは立ち上がり次のように通訳に告げています。「（私は）二，三日中に艦隊をひきいて，琉球ついで広東へと立ち去るだろう。そして来年四月か五月に，日本に戻ってくるつもりである。そのさいにはもっと多くの艦船をひきいてやってくるだろう」（松本 29－30）

その言葉通り，三日後の六月十二日（7月17日），ペリー艦隊は一斉に江戸湾を離れています。その日の「昼九つ（正午）頃，三宅島では北東方向から四隻の黒船が島に近づいてくるのが望見され」（吉村 76）ましたが，やがて「同所にて楫取直シ東え向候節は一段迅速ニて鳥之飛候如く乍ち見失ひ候」（『続輯』百二十四）という書状が，早船で浦賀奉行所に届き，黒船艦隊の退帆が確認されたわけです。

白旗伝説　さきほど国書受理の際，使節ペリーは，フィルモア「大統領の国書と，提督の信任状一通，（ペリーから日本皇帝への）二通の親書を手渡した」と述べましたが，最近の研究では，どうやら彼は，この他にもう一通の「親書」と「白旗二旒」を贈ったというのが，ことの「真相」に近いことが判ってきました。確かに『大日本古文書Ⅰ　幕末関係文書』には，次のような記載[4]があります。

一一九　六月九日（？）米国使節ペリー書簡我政府へ白旗差出の件

4）　ただしこの文書は，「偽書」であるとの見解も浮上して，その文書の存在自体をめぐり識者の間で，最近激しい論争が起こっている。しかし，偽書説を取るものも，「白旗」らしきものの授受があったことに関しては否定していない。岸俊光『ペリーの白旗』毎日新聞社参照。

〇町奉行書類ニハ，初メニ「亜美利加極内密書寫」ト題す，高麗環雑記ニハ，初メニ「北亜墨利加より差越候書翰九通之内此壱通は諸大名御旗本ニ至るまで被見御免無之書面和解」ト題シ，未ニ右は御小姓久留氏日記ニ有之候を極密寫取候事」ト附記ス，

先年以来各国より通商の願いこれあり候ところ，国法を以て違背に及ぶ。元より天理にそむくの至罪，莫大なり。然ば蘭船より申し達し候とおり，諸方の通商是非に希うに非ず，不承知に候わば，戈干を以て天理に背くの罪を糺し候に付き，其方（日本）も国法を立てて防戦いたすべし。左候わば，防戦の時に臨み，必勝は我等（アメリカ）にこれあり，其方敵対成り兼ねもうすべく，若し其節に至り和睦を乞い度くば，此度贈り置き候ところの白旗を押し立つべし。然らば此方の炮を止め，艦を退て，和睦いたすべし。（松本 38）

直接『幕末関係文書』より引用した部分，「注記」（〇印のあるところ）は，「（次の文書は）町奉行書類では極秘文書となっていたし，高麗環という外国奉行所の役人が記した記録（『高麗環雑記』）の初めには，ペリーが日本に渡した文書は九通であったが，それに白旗が二旒つけられていた。その一通は大名・旗本にも見せてはならない極秘扱いであり，小姓の久留氏が日記に付けていたのを写し取った，と附記されている」という意味ですが，この「原本」は「安政六年（1859）の火事の際江戸城本丸が消失し，外国奉行所所蔵の外交文書が燃えてしまった」（松本 43）ため現存はしていない，というのです。

松本『白旗伝説』より引用した「本文」の大意は「先年来，各国が通商を求めてきたのに，貴国日本は国法を盾にどうしても承知しなかった。これは天理に背く罪で大罪である。オランダを通じて連絡した通り，こんども通商を拒むならば，武力をもってその罪の制裁を加えることにするから，日本も国法を理由に応戦せよ。そうなれば，勝利は我が方にあるので，戦争にならないから和睦したいというのなら，ここに白旗を渡すから，これを立ててでてこい。そうすれば，こちらも砲撃を中止して和睦をしよう」というものです。

高坂正尭は，ペリーのこの姿勢について「砲艦外交の見本のようなもの」（高坂 20）と述べ，この話がペリーの『遠征記』にも『日本遠征日記』にも書かれていないことについて「どうやらペリーは歴史の改竄をやったよう」だ，と断定を下しているのです。高坂はさらに「それは日本に対するショック療法という，おなじみのパターンの最初のものとなった」とも言っていますが，日米関係史の上でこれは，忘れてはならない重要な「逸話」と考えるべきであり，また後で取り上げることになると思います。

マッシュー・カルブレイス・ペリー　さてペリーがこのような「砲艦外交」をとるに至った背景には，いろんな理由が考えられるのですが，まず第一に考えられるのは，彼自身を生んだ

「アメリカ海軍」という存在でしょう。

1850年前後のアメリカは，メキシコ戦争（1846－48）に勝利してカリフォルニアを獲得したことが，アメリカが太平洋の彼方，日本や中国との通商を望む大きな契機となったことも既に述べましたが，このメキシコ戦争で大活躍し，アメリカの勝利に大きな貢献をしたのが，他ならぬこのペリーだったのです。

彼はアメリカの東部のロード・アイランド州ニューポートで生まれ育っておりますが，彼の家系は，祖父も父も，また兄二人もかつては，アメリカ海軍で重きをなした経歴を持つ，「海軍一家」でした。いわば生え抜きの「海軍魂」を持つペリーは，当然のことのように1809年，十四歳のときに海軍に入隊し，たちまち頭角を現してきますが，1812年～14年の第二次対英戦争での参戦を皮切りに，その後アフリカ，西インド諸島，地中海方面で海賊鎮圧などに従事しています。33～41年には，海軍教育の改革に尽力し，海軍の近代化を強力に推進していますが，1837年アメリカ最初の蒸気軍艦フルトン号の艦長となり，「蒸気船海軍の父」と呼ばれるようになり[5]ました。

また1843年，アフリカ艦隊司令官として奴隷貿易の禁圧に従事しましたが，先ほど述べたように，46～48年の対メキシコ戦争では，メキシコ湾艦隊副司令官として「メキシコ湾南岸のベラクレス，カンペチャ湾とシエラ・マドレ山系とに囲まれた部分を制圧して，ユカタン半島の諸港と首都メキシコシティとの間の補給線を断つと同時に，敵将サンタ・アナの軍隊を壊乱状態に陥れる，ホイッグ党の将軍ザカリー・テイラー[6]（第12代大統領，在位1849～1850）の追撃を側面から支援」（曽村 111）することに成功し，「アメリカ軍が得意とする水陸両用作戦」（曽村 110）の先駆けとなったほどでした。なお，彼の作戦の特徴が「砲艦の集中使用」（曽村 11）にあった，というのは，後年の日本遠征における，彼の「手法」を予告してはなはだ興味深いところです。1847年メキシコ湾艦隊司令長官に任命され，アメリカ軍を勝利に導いた「英雄」として彼は，故郷に凱旋するのです。司令官職を解かれた後は陸上勤務となり，郵船総監督官に任命されたのが1848年11月，このときペリーは既に五十四歳となっていました。日本遠征の四年前のことです。

5） 「1807年，米人フルトン（Robert Fulton，1765～1815）による汽船の発明によって世界の海運界は大きく変わり，資本主義は飛躍的発展を遂げた。こうして1810年代から「汽船の時代」が始まり，その蒸気機関は逸早く軍艦に採用された。ペリー来航の1853年ころには，すでに3000トンクラスの大型軍艦が，黒煙を吐いて七つの海を自由に航海するに至った。また木造から鉄製となり，外側は黒色に塗装され，数十門の砲を積んだ黒船は，まさに近代資本主義の武力的象徴といえ」（小西 5－6）た。

6） Zachary Taylor（1784～1850）。将官，政治家，アメリカの第12代大統領（1849～50）。ヴァージニア州モンテベロ生まれ。1808年に陸軍に入隊し，インディアンと戦った。1840年にはアメリカの南西部で軍隊を指揮した。アメリカ・メキシコ戦争（1846～48）では，マタモロスを攻略し，兵の数では圧倒的に劣っていたものの，ブエナビスタで重要な勝利を収めた。同戦争で英雄となり，ホイッグ党が大統領に指名，当選した。大統領任期中の主な問題は，新しく獲得した領土とその土地への奴隷制度導入に関するものであったが，就任後わずか16ヶ月で死去した。

このようにペリーの経歴を見ると，彼がオーリックの後を継いで「東インド艦隊司令長官」に選ばれたのは，メキシコ戦争での武勲によるところが大きい，とみるのは順当な意見だと思われますが，このような華々しい戦績に加えて，その指揮官としての「人間評価」の高さも大いに与って力あったものと推測されます。それは当時の国務長官 J.ビュカナン[7] が，「彼こそは現在まさに海軍にふさわしい人間だ。今時海軍であれくらい熱心で，勤勉で，精力絶倫で，集中力があり，粘り強く，その上企画性に富んだ人間はほかにいない。ともかく多芸多才でまさに驚嘆に値する人物だ」という「最大級の賛辞」（曽村 113）を送っているからです。

来航の目的　「黒船来航」の目的については，ペリー自身の個人的な経歴を考慮するよりも，やはりフィルモア大統領の「国書」に書かれていることに尽きるのではないかと思います。それは彼の前任者オーリックに宛てたものと内容はほぼ同じであり，ペリーはオーリックの任務をそのまま引き継いだに過ぎないからです。その「大統領国書」は極めて大部なために一部を抜粋すると，以下のようになります。

日本皇帝宛の合衆国大統領書翰

……アメリカ合衆国は，大洋から大洋に達し，しかもわが国のオレゴン州とカリフォルニア州は直接に貴皇帝陛下の領土の対岸に横たわっています。

わが国のカリフォルニアの大きな州は，銀，水銀，宝石類及びその他多くの貴重な品はもとより，毎年約六千万ドルの金を生産しています。日本もまた豊かで肥沃な国であり，多くの大変貴重な品々を生産しています。貴皇帝陛下の臣民たちは，多くの技芸に才能を示しています。私は，われわれ両国が日本及び合衆国の両者の利益のため，相互に貿易を行うことを望んでいます。

……私はペリー提督に，もうひとつのことを貴皇帝陛下に指摘するよう命じてあります。すなわち，わが国の船舶は毎年カリフォルニアからシナへと通過しており，しかも，わが国民の甚だ多数は日本近海で捕鯨業を営んでいます。時には嵐となって，わが国の船舶中の一隻が貴皇帝陛下の海岸で難破することもあります。すべてのそのような事件で，われわれは，わが不幸な国民が親切に待遇され，そして彼らの財産が，われわれが船を送って彼らを連れ去ることのできるまで，保護されるべきだと要望し，かつ期待しているのです。この点において，われわれは甚だ真剣なのです。

7）　James Buchanan（1791～1868）。第15代大統領（1857～61）。ペンシルヴァニア州ストーニー・バター生まれ。1812年法曹界に入る。1845年国務長官になり，オレゴン境界問題の解決に成功。民主党から指名を受け，1856年大統領に当選。就任期間中に奴隷問題が危機に面した。奴隷制の維持に強く賛成し，奴隷州としてカンザス州を設立する試みを支持した。1861年退陣後は，公務につかなかった。

ペリー提督はさらにまた，私によって，以下のことを貴皇帝陛下に説明するよう命ぜられています。すなわち，われわれは日本帝国には甚だ貴重な石炭と食糧があると理解しています。わが国の蒸気船舶は，大洋を横断するのに大量の石炭を焚きます。しかもこれを全航路にわたりアメリカからもって行くことは便利ではありません。われわれは，わが国の蒸気船舶やその他の船舶が日本に停泊して，石炭，食料，及び水の補給を受けることを許されるべきだと願っています。それらの船舶は，それらに対して，貨幣でなり，もしくは貴皇帝陛下の臣民たちが好む他の何物でなり，支払いをすることでしょう。そしてわれわれは，貴皇帝陛下に，この目的でわが国の船舶が停泊できる便利な港ひとつを，帝国南部の地に指定していただくことを要望いたします。

これらのこと，すなわち，友好関係，商業，石炭及び食糧の補給，及びわが難破国民に対する保護こそ，私が，そのためペリー提督に強力な艦隊を従えて貴皇帝陛下の名高い江戸の都市に訪問するよう派遣する唯一の目的なのであります（ペリー[3] 435－438）

この文面を要約すると，

1. 日米両国の自由貿易
2. 日本近海で遭難した捕鯨船などのアメリカ船泊・乗員・財産の救助と保護
3. カリフォルニアー中国間の定期航路[8]に就航するアメリカ船のために日本国の海岸に貯炭所を設置すること

となり，日本との「通商・貿易」が第一の目的ということになりますが，おそらくそれは「外交辞令」であって，当時の日本を市場として見た場合，アメリカにしてもまだ，それほど評価は高くなかったので，これはやはり，三番目に来ると考えるのが妥当な線でしょう。

しかしこれらの目的を如何にして達成するかが大きな問題であり，モリソン号事件（1837）の例やペリーの前任者，アメリカ東インド艦隊司令長官海軍代将ビッドル提督（Commodore Biddle）の穏便な「開国要請」が失敗した例（1846）の示すように，従来のような融和的で穏健な手段では不可能だと考えられた，と思われます。これについては，1852年11月，ペリーの出発に先立って国務長官代理コンラッドが，海軍長官ケネディへ宛てた書簡で「過去の経験からすれば，圧倒的兵力に裏づけられるのでなければ，日本人にたいする議論や説得がまった

8） アメリカの太平洋定期航路の開発の根底には，当時世界の海の盟主たるイギリスに対する競争心があった。このイギリスの力の及ばぬ唯一の海域が太平洋であり，もしここにアメリカが中継基地を得れば，中国貿易の拡大による経済的利益のみならず，軍事的戦略的においても，それは東アジアにおいてイギリスに対抗できる強固な足掛かりとなると考えられた。

く無益であることは明らかである」（石井孝 34）と述べたことから少なくともこの時点においては，アメリカ側の一致した見解だった，と言えるでしょう。

こうした背景をもってすれば，ペリーは，このような役柄に最も相応しい人物として正に「適材適所」だった，ということになり，引用した箇所より少し前にある，フィルモアの国書の中の「私は，貴皇帝陛下の領土の安寧を乱すようなことのありうるあらゆる行為を慎むようペリー提督にとくに諭してあります」という言葉とは裏腹に，ペリーにはかなり「広汎な自由裁量権が付与」（石井孝 34）されていた，と見るのが常識でしょう。日本人との交渉において，終始「断固とした決然たる態度」を取り続け，彼が「砲艦外交」とまで言われる強硬な手段に訴えたのは，必ずしもペリー一人の「資質」に帰せられるものではなく，当時のアメリカの国情や，一種の「膨張政策」を合理化・正当化した，その独特の「マニフェスト・デスティニィ」[9] と呼ばれる精神をも視野にいれて検討すべきだと思うわけです。

Ⅱ．第二次来航－日米和親条約

横浜村上陸　日本中がまだ屠蘇も醒めやらぬ，厳冬の安政元年一月十四日（1854年2月12日），ペリーは，今度は七隻の軍艦を率いて再び江戸湾に姿を見せました。まずどこで応接するか，その場所が問題となり，日本側は浦賀を提案したのですが，アメリカ側はこれを受け付けず，「江戸に近いところ」を主張して譲らず，結局浦賀・江戸間の中間である「横浜」が選ばれたのですが，このときもペリーは「幕府に圧力をかけるべく，一次は江戸市街を見渡せる羽田沖まで進入」（松本 65）し，また「もし条約の締結が受け入れられない場合には，戦争になるかもしれない，その場合，当方は近海に五十隻の軍艦を待たせてあり，さらにカリフォルニアにも別の五十隻を待機させている。当地まで二十日で到着する」（加藤 115）と言って脅しをかけています。当時の横浜は，戸数わずか八十ほどの寒村にすぎなかったのですが，ペリーは「あらゆる点において目的にかなう場所」として承知し，ここに仮説の応接場が建設されました。

条約交渉　二月十日（3月8日）の昼すこし前，ペリー一行四百四十六人が横浜村に上陸しました。日本側の交渉委員は，儒者の林大学頭輝，浦賀奉行の井戸対馬守覚弘，同浦和奉行の井沢美作守，目付の鵜殿民部少輔長鋭，同目付の松崎満太郎の五人です。

アメリカ側の提示した条約案は1844年清国と締結した「望厦条約」（ワンシア条約）をモデルにし，三十四条あった同条約を二十四条に縮小したものでした。

9）　Manifest Destiny.「明白なる使命」。米国が国民の発展のためにその領土を広げ，米国の精神を広めていくことは，神から与えられた責務だとする説。1845年にジャーナリストの John O’Sullivan が Democratic Review 誌７月号で初めて用いた言葉で，以後拡張論者の理論的支柱となった（清水 20）。

これに対して日本側が提案したのが七条，二月十九日の第二回の会談でこれに対するアメリカ側の回答がなされ，種々論議の末，日本側が大きく譲歩してほぼ同意に達し，条約調印の運びとなったのは，三月三日（3月31日）でした。

日米和親条約　さてその十二条のうち，主な条項を列挙すると，

第一条は日米両国の「完全にして永久なる広き平和と誠実，懇篤な和親」を謳い，

① 第二条　下田，函館の開港

② 第三条　海難事故や救助経費を双方が負担

③ 第四条　アメリカ人は「日本の公正な法律に服す」

④ 第五条　アメリカ人漂流民と来日アメリカ人の取り扱い

　　アメリカ人の下田における自由な行動半径は七哩（里）とする。

⑤ 第十一条　十八ケ月以降アメリカの領事または代理人の駐在許可

となりますが，このうち，①，④，⑤の三ケ条は，特にアメリカ側が強く主張したもので，これに対して日本側も②，③の双務性を主張して譲らず，最終的に取り入られたものです。ペリーは，②と③で譲歩したため，「本国に書簡を出し，これは人道主義に基づいてなされたもので，政府がこれを了承されることを期待する」（加藤 116）と述べています。さらにこの条約では，通商に関する条項が盛り込まれていないのは，日本側が強い難色を示したのを，ペリーがあっさりと引っ込めたからで，この問題は，今後の新たな交渉事項（下田条約＝日米修好通商条約）[10] として残ることになったものです。

この「日米和親条約」によって幕府の「祖法」たる鎖国が完全に撤廃されたことはいうまでもありませんが，このことについて，ペリー自身は次のように言っています。「如何なることが達成されたかをよく観る際に忘れてはならないのは次の事である。即ち吾が代表が到着したのは，二百年以上に亘り厳重な法律によって兎に角にも僅かにひとつの港，即ち長崎だけを外国人のために開港することを許している人民の所に行ったことであり…．吾々の知っている限りでは過去の歴史中に文明国と正式の条約を結んだことの全くなかった人民のところに行ったことである」（ホークスⅢ 249）から「それ故に吾々は，当時の事情に於いて合理的に期待し得たすべてのもの，しかも実際十二分のものを達成したのだった」（同上）と深い満足の意を

10）　アロー戦争（1856～60）の結果，天津条約（1858）を清国に締結させたイギリス，フランスの脅威を力説して，通商条約の調印を強く迫る，アメリカ領事ハリス Townsent Harris（1804～48）に屈して大老井伊直弼（1815～60）は，勅許を得られないままに日米修好通商条約に調印した（安政五＝1858年６月）。しかしこの条約は，横浜，函館に加えて新たな開港場とする神奈川・長崎・新潟・兵庫内に居留地を設け（第三条），その居留地における領事裁判権（治外法権）を認め（第六条）たり，貿易に関する第四条では，関税について日本に税率の決定権がない（関税自主権の欠如）などの条項を含んだ「不平等条約」であった。

吐露しているのです。さらに彼は，和親条約で実現しなかった通商問題についても「日本は西洋諸国家のために開国された。…今後日本の偏見が次第に消失するに従って，吾が国自身の利益のためのみならず，ヨーロッパの海国全部の利益のため，日本の進歩のため，吾が人類共通の人道の向上・発展のためにより益々自由な通商条約の協商を見るだろうと待望してよいと思う」（ホークスⅢ 264，傍点現筆者）と将来に期待しています。

さて『遠征記』は，最後にペリーの日本の将来に関する興味深い，次の「予言」とともに「神奈川条約」の項を締めくくっているのです。

> 日本は通商諸国の交際場裡で最も若い妹である。年長の国々は親切にその手を取り，その覚つかない足取りを助け，自力でしっかり歩くことが出来るような気力に達成せしめよ。今日注意深く親切に待遇するならば，やがて希望し得べき限りの自由な通商条約を結ぶことになるであろう。（ホークスⅢ 264）

これらの言葉の数々は，百五十年を隔てた現代の日米関係にもそのまま当てはまるような気がしてくるのは，まことに「不思議の関係」といわねばなりませんが，松本健一氏もまた「ここにある『協商』という言葉を『民主主義』に置き換えれば，これはそのまま昭和二十年（1945）年のマッカーサー元帥の言葉になるだろう。それは，文明の最先進たらんとするアメリカが『最も若い』，つまり文明の幼いものを教化し，啓蒙してゆこうとする態度だった」（松本 77－78）と述べているのはまことに至言だと言えるでしょう。

宰相阿部政弘　阿部伊勢守政弘は1842（天保十三）年，福山藩から弱冠二十三歳で老中に抜擢され，1845（弘化二）年には老中首座となり，三十五歳のときにペリー対応の最高責任者となっています。

一方のペリーが，全権使節として縦横無尽の活躍をして，帰国後[11] アメリカ国内の高い評価を得ているのに対し，我々日本人としては，この阿部政弘という人物に対してどのような評価を下すべきでしょうか。

従来の阿部評価というのは，徳富蘇峰[12] のそれに代表される「無能・無策」説でした。蘇

11）　1854年12月28日，二度目の日本遠征を終えたペリーは，帰途リバプールのアメリカ領事館に立ち寄り，当時領事職にあったナサニエル・ホーソーンに「遠征記」の執筆を依頼したことが，ホーソーンの『日誌』に記載されている。この『緋文字』（1850）の作者は，はっきり断る代わりに「メルヴィルほか数名の名を挙げたが，提督は現代文学にもかなり知識があると見えて，私が思い付く限り挙げた名前のいずれに対しても，さほど積極的な興味を示さなかった。若い作家にとっても，老年の作家にとってもこれはやりがいのある仕事に違いない。今，日本ほど新鮮なテーマは他に見当たらないので」（Howthorne，147－8，モリソン427－8，Morrison，415）

12）　徳富蘇峰（1863～1957）。明治～昭和期の言論人。本名猪一郎。父一敬は横井小楠の高弟，徳富蘆花は弟。肥後国生まれ。熊本洋学校を経て同志社に学ぶ。1887（明治二十）年民友社を創立して雑誌「国民之友」，90年「国民新聞」を創刊。平民主義を唱えて言論人としての地位を確立。日清戦争後は国家主義的論調の時局論を展開。政治的には桂太郎と密接な関係を持った。修史事業をライフワークとして「近世日本国民史」100巻を完成。第二次大戦中には大日本文学報国会・大日本原論報国会の会長に就任，戦後はＡ級戦犯容疑となった。

峰は，例のアメリカ大統領「国書」の内容について「いかにも穏当平和にして，これを見て騒ぎ立てるほどのことはひとつもないではないか」と述べ「もしペルリ提督来航の際に，わが日本の当局者が，彼の来航の真意を詳らかにし，決して日本人に向かって，戦争を仕掛けるとか，もしくは日本を侵略するとか，併呑するとかいう野心無く，ただ日本と和親を修め，交通を開き，貿易を為し，而して日本を加州からシナへ赴く一種の仲次所となすに止まることを詳らかにし，この大勢をば，到底阻止することの不可なるを知り，ここに断々乎として開国の進取の国是を確定し，これを実行したならば，日本の開国史は現在のものとすこぶるその趣を異にしたであろう」（徳富 99－100）と批判をしているのですが，これは「現代人の目をもって怠慢を攻め無策をあげつらう」（山口 35）こといってよく「過酷にすぎる」意見というべきでしょう。さらに「幕府内部開明派の一人として幕末維新期を生きた」福地桜痴も「オランダ国王の開国勧告は拒絶，ペリーの要求はこれを容れるという矛盾した対外方針をとってしまった」（山口 26）ことを非難していますし，石井孝氏もまた「阿部政弘は包容力と柔軟に富む人物で，名宰相と評価されているが，対外政策については，はじめ鎖国説を取り，開国政策に転換する展望を持つことができなかった」（石井孝 76－77）と述べ「ぶらかし策が当時彼が抱いていた対外政策であった」（石井孝 77）とその外交面における「無定見」ぶりを指摘しているのです。

しかし，阿部政弘は蘇峰がいうような「事なかれ主義」に徹していたわけでは決してなく，むしろ彼の本領は，いわゆる「根回し」や「待ちの政治」にあり，日本的な「協調型政治家」であったと見るのが妥当なのではないでしょうか。この特徴が最も発揮されたのが，第二次来航前に彼が取った施策であります。彼は受理した大統領の国書を回覧して広く各界の意見を聴取する「諮問」を行ったのです。老中が各界にこのような意見を募るのは，それこそ前代未聞のことで，皮肉なことにそれは幕藩体制を緩める契機ともなりました。ともあれ，提出された意見は記録に残るだけでも七百十九通で，大名から，藩士まで，奉行から小普請組までの幕臣，学者，さらに「商」に当たる吉原の遊女渡世・藤吉という男の意見までがあり，各階層に亘っているのです。

第二に，「隠居謹慎中の前水戸藩主徳川斉昭を海防掛参与とし，薩摩藩主嶋津斉彬をはじめ，外様・譜代の差別なく声望の高い大名と提携し，さらに幕臣では川路聖謨，岩瀬忠震，井上清直，永井尚志，江川英竜ら多数の人材を要職に配置したこと」（坂本 410），第三に，品川など江戸湾周囲にいわゆる「お台場」を築いたのを初めとして，全国の主要な場所に砲台を築いて防備を固めたこと，さらには第四として，幕府に海軍がないことを反省して，1853年10月17日，「大型船所有建造禁止」の解禁を決定したことは，日米和親条約以前に開国に踏み切ったことにも等しく，高く評価されるべきでしょう。

阿部政弘は，「日米修好通商条約」を目前に控えた1857年（安政四）年の六月十七日，わず

か三十八歳で世を去りますが，彼の取った漸進的な開国路線は，そのまま次期老中首座の堀田正睦（1810～64）に引き継がれたのです。日本の国防のために燃え尽くした，その生命は，束の間歴史の中での役割を終えて永劫の眠りに就いたのでした。

参考文献

（*印は本章で引用・言及した文献を示す）

１．和文のもの

石井進他編『詳説日本史』山川出版社，2003年

*石井孝『日本開国史』，吉川弘文館，1996年

井上勝生[1] 編『開国』幕末維新論集②，吉川弘文館，2001年

————[2]『日本の歴史18 開国と幕末』，講談社，2002年

井上光貞他編『詳説日本史』山川出版社，1988年

*岩生成一監修・日蘭学会／法政蘭学研究会編『阿蘭風説書集成』上下巻，吉川弘文館　昭和54年

*ウイリアムズ・サミュエル・ウェルズ『ペリー日本遠征随行記』洞富雄訳，雄松堂，1970年

大江志乃夫『ペリー艦隊大航海記』朝日文庫，2000年

大塚武松『幕末外交史の研究』昭和27年

加藤祐三[1]『黒船異変』岩波新書，1991年

————[2]『黒船前後の世界』筑摩書房，1994

*————[3]「日米和親条約の締結－ペリー艦隊第二次来航」『歴史と旅』特集：黒船の世紀・日本開国秘史，平成八年11月号

川崎勝「友好的な開国要求－ペリー艦隊第一次来航」『歴史と旅』平成八年11月号

*岸俊光『ペリーの白旗』毎日新聞社，2002年

*クリスタル，デヴィッド『岩波=ケンブリッジ世界人名辞典』岩波書店，1997年

*坂本太郎編『日本史』山川出版社，昭和50年

司馬遼太郎・大野勝己「対談・アメリカとつきあう方法」『文芸春秋』昭和45年9月 特別号

*清水克祐『アメリカ州別文化事典』名著普及会，1986年

清水博編『アメリカ史』山川出版社，昭和47年

*曽村保信『ペリーは，なぜ日本にきたか』新潮新書，昭和62年

*高坂正尭『不思議の日米関係』PHP 研究所，1996年

*小西四郎1『日本の歴史19 開国と攘夷』中公文庫，1974年

*————[2] 監修『図説黒船の時代』河出書房新社，1995年

*『大日本古文書・幕末外国関係文書』一～六，東京帝国大学文科大学資料編集掛，明治43年

田保橋潔『増訂近代日本外国関係史』原書房，昭和54年

田中彰編『開国』日本近代思想体系1，岩波書店，1991年

土居良三『開国への布石--評伝・老中首座阿部政弘』未来社，2000年

*徳富威一郎『近世日本国民史』31，32，時事通信社，昭和40年『日米交渉百年史』洋々社，昭和31年

*『日本史広辞典』山川出版社，1997年

『幕末維新外交史料集成』第1～6巻，財政経済学界，昭和18年

『幕末政治論集』日本思想大系56，岩波書店，1976年
服部之総『黒船前後・志士と経済』岩波文庫，1997年
*平井信子『黒船前夜の出会い』日本放送出版協会，1994年
*ペリー，マッシュー・カルブレイス[1]『ペルリ提督日本遠征記』(四)，岩波文庫，1994年
————[2]『ペリー提督日本遠征記』木原悦子訳，小学館，1996年
————[3]『ペリー日本遠征日記』金井圓訳，雄松堂出版，1989年
細谷千博・本間長世編『日米関係史－摩擦と協調の百四十年』有斐閣，1995年
*松本健一[1]『白旗伝説』新潮社，1995年
*————[2]『開国・維新1853-1871』日本の近代1，中央公論社，1999年
*宮永孝『ペリー提督--日本遠征とその生涯』有隣堂，昭和56年
モリソン・サミュエル『ペリーと日本』後藤優訳，原書房，昭和43年
————『伝記・ペリー提督の日本開国』座本勝之訳，双葉社，2000年
*箭内健次『通航一覧続輯』第四～第五巻，清文堂，昭和47年
*山口宗之『ペリー来航前後』ぺりかん社，昭和63年
*吉村勇『黒船』中公文庫，1997年
ワイリー，ピーター・ブース『黒船が見た幕末日本』興梠一郎訳，TBSブリタニカ, 1998年

2．英文のもの

Barrows, Edward M. The Great Commodore, the Exploits of Mattthew Calbraith Perry, The Bobbs-Merrill Company, New York, 1935
*Morrison, S. E. "Old Burin" Commodore Matthew C. Perry, 1794-1860, Oxfor University Press, London, 1968

3．図録

『黒船と咸臨丸』図説・人物海の日本史⑧，毎日新聞社，昭和54年
横浜資料開港資料館『ペリー来航関係資料図録』平成13年
『週刊 TIME TRAVEL /再現日本史第11号幕末・維新①1853～1854』講談社，平成13年7月10日

終章　日米交渉百五十年

Ⅰ.「鎖国」と「開国」

はじめに　以上「日本開国」という歴史的大事件を四章にわたって考察してきたが，最後にその総括をしておきたい。本論の視点は，「鎖国」と「開国」を別個に考えるのではなく，連続的に捉えるということであった。さらに鎖国といっても，既に見てきたように，事実は完全に「国を鎖」した状態ではなかったところから，その実体はむしろ「鎖国の中の『開国』」[1] とも言えるものであり，また開国についても，幕末・明治維新直後，一挙に諸外国との通商・交通が実現したわけでもなかったので，「開国の中の『鎖国』」という表現の方が，より適切に事態を把握できることを述べた[2]。このように，鎖国，開国を連続的，かつ相対的な相互関係において捉え直すことによって，従来の「鎖国」，「開国」という機械的で硬直した表現・用語が，後述するような現代日本の「対外意識」――その閉鎖性――をもカバーできるような，かなり柔軟で幅広い適応力をもった表現へと生まれ変わることも可能なのである。

鎖国の中の「開国」　いわゆる「鎖国」体制といわれる期間（1639～1854）であっても，長崎・出島のオランダ，清との貿易[3] を初めとして，朝鮮と国交を結び，琉球や蝦夷との交易を行っており，これらの国，民族を通じて間接的ながら，東南アジアやヨーロッパの商品が日本に入っていた。従ってこの体制を「鎖国」というのは正しくなく，いわば「鎖国の中の『開国』」とでもいうべき特異な体制であった。

また江戸時代の中期以降に頻発した「海難事故」――漂流――は，都市の発達により生じた海運業の隆盛と，物資を運ぶ「弁才船」と言われた特殊な構造，さらには日本近海の潮流などの諸条件が重なって起きたものであったが，しかしこれは「鎖国」という体制の元で，大船建造を禁じられた結果，和船の特殊な構造ゆえに発生した悲劇であり，人災といってもよい[4]。この期間に起きた「漂流民」とアメリカの捕鯨船員との遭遇は，海外渡航を禁じられた「鎖国」下の国民同士の予期せぬ偶然の接触であった。いわば，水面下における非公式の「国際交流」ともいえる，万次郎や，ジョセフ彦，さらには，「日本音吉」らを初め，その他多くの「漂流民」の体験は，国家という介在なしに多くの民族・国民との間に友好関係を築き上げたもので，大部分は，自然で好ましい「異文化接触」の在り方と成り得ている。このような「国民」同士の交流と「民際化」こそが，ペリー来航によって結ばれた，いわば正式ルートによる――とかくギクシャクした関係になりがちな――国交よりも，ある意味ではよほど重要なのではなかろ

1）拙論第一章102頁参照。
2）拙論第二章109頁注22)参照。
3）拙論第一章101頁，および102頁注15)参照
4）拙論第三章104頁参照。

うか[5]。ともあれ，「漂流民と捕鯨船」の接触・交渉もまた「鎖国の中の『開国』」と呼ぶことのできる極めて特異な事件であった。

開国の中の「鎖国」　キリスト教の禁止と，日本人の海外渡航禁止を目的に実施された「鎖国」体制は，1853年のペリー来航と，翌年の日米和親条約の締結によって瓦解し，これによって更に十五年後には明治維新という，日本の近代が始まったわけである。鎖国時代には厳禁された，「海外渡航」，「自由貿易」，「信教の自由」[6] を手にいれ，文明開化の時代を経て近代国家へ脱皮を遂げた日本であったが，それから一五〇年，平成十五年の日本に果たして「鎖国」はない，と言い切れるであろうか。

欧米列強に伍して，植民地獲得に乗り出した日本は，日清（1894）・日露（1904）戦争の勝利に続き，韓国併合（1940）を果たす。更に第一次大戦（1914～18）への参戦を挟んで，満州経営（1934～45），日中戦争（1937～45），大平洋戦争（1941～45）での敗戦に至る近現代史を遡ると，ほぼ十年置きに戦争を行ったこと勘定になり，こうして見れば，近代日本とは，文字通り戦争に明け暮れした「軍国主義」日本であった，ということもできる。またこの目まぐるしい変転を辿ると，そこには，「後進国」である日本が，「近代化」を急ぐ余りに犯した「過誤」や，その「ひずみ」の痕跡がクッキリと刻印されている。

戦後「奇跡的」復興を遂げた日本であるが，その「ひずみ」や「ゆがみ」から発生した幾つかの問題が，未解決のままに残されている。それは，中国大陸に置き去りにされた「残留孤児」に限ったことではない。日本国内における「在日朝鮮人」の問題がそうであり，さらには高度成長時代，また安定期において，東南アジア，南米からの「外国人労働者」への対応において，我々の側に「偏見」，あるいは，「排他的行為」は皆無であった，と言い切れるであろうか[7]。「開国の中の『鎖国』」とは「内なる外国」と置き換えてもよいのであり，「一民族・一国家」というのが，もはや幻想となった21世紀において，これはあらゆる国家が抱える問題であるとすれば，我々は，国家という枠を越えた「多民族・多文化」の共存する〈トランス・ナショナル〉な市民社会のネットワークの実現を図る必要があろう（坂本 111）。

「鎖国」という言葉　元禄時代にオランダ商館の医師として日本に二年間滞在したエンゲルト・ケンペル（1651～1716）の著書『日本誌』（『廻国奇観』）の中の一章を享和元（1801）年，元長崎通詞志築忠雄が訳出して「鎖国論」という表題をつけたことに由来する。元の章題は

5）拙論第二章125頁参照。

6）我が国におけるキリスト教の解禁は，明治六（1874）年であるが，しかし真の意味で「信仰の自由」が認められるのは，国家神道が解体した第二次大戦後，日本国憲法第二十条で信教の自由が保障されてからである。

7）林華生教授（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科）は，近い将来「少子化高齢社会」が到来する日本の労働力不足を解決する方法として，移民や外国人労働者を受け入れることを提案している（『朝日新聞』2003年１月24日号）

「今の日本人全国を鎖して国内国外に限らず，敢えて異域の人と通商せざらしむる事，実に所益あるに与れりや否やの論」（小堀 60）であり，いわば鎖国是非論で，鎖国の妥当性を論証しようとしたものであった。

鎖国令　寛永十年（1633）～十六年（1639）年に徳川幕府の布告した五回の禁制令を「鎖国」令と称するようになったのは，いつごろからかはっきりしないが，志筑がケンペルの著書の表題に「鎖国」という訳語を用いた1801年という時代は，ロシアが頻繁と通商を要求してきたころのことであり[8]，それまで庶民はむろん，幕府も「鎖国」しているという意識はなかったことは，例えば新井白石（1652～1725）の著書によっても検証できる。

「慶長十八年の冬，番舶の耶蘇之徒を帯来る事を禁じられ，寛永十六年に及びて，番舶の来ることを止めらる」（新井[1] 37）。「海禁の厳なるとき」（新井[2] 390），「（清の康熙帝が）海禁を開かれしかば」（新井[2] 390）

つまりまだ18世紀はじめの白石の時代では，「鎖国」に相当するものとして「番舶の来ることを禁止」とか「海禁」という言葉が使われていたわけであるが，前述したような事情から日本列島が，漸く太平の眠りから目覚め，国防の必要に迫られるようになってはじめて対外意識が芽生えてきた[9]。「鎖国」令を「祖法」として堅持しようという意識が生まれたのも，また，窮屈な国法として自覚され始めたのも，従ってこの19世紀以後のことである。

こうして志筑が訳語に使用してから三十年後，天保九（1831）年，高野長英（1804～50）は，この語を用いるに至る。「当御代の初めより，蛮国交易は阿蘭陀のみにて他には御免無之，鎖国の御政道に付，とても交易御免の儀は思いもよらず。兎角近付候ては，面倒に候間，打払之事に御定めに候得者，此の度も御内払いに可有之候。左候はゞ先方の者，如何心得可申哉」（高野[1] 166）。

しかし吉田松陰の「投夷書」（1854）の中ではまだ「海禁」という語が使われていたことは既に見てきた通りである[10]。

安政四（1857）年四月，幕府の海防係は，勘定奉行への上申書の中で次のように述べている。「御国は萬国に比類これなく富饒かつ質朴なる風俗にて，痩地不毛の國ながら花美を好み候諸蛮とは別段にて，ことに第一は，邪宗伝染の患，尤も容易ならずもって候ところ，諸蛮と親しみ候へば，おのずから其の風に染み候様なり行き候に付き，いにしへ鎖国之制度をも御立

8）ロシアとの交流に関しては，1792（寛政四）年にラックスマンが根室に来航して通商を求め，1804年にレザノフが日本との通商を要求して長崎を訪れている。また1811（文化八）年，国後島に上陸したロシア軍艦の艦長ゴロヴーニンが，日本の警備兵に捕らえられて函館に監禁された。ロシア側は，報復として翌年，択捉航路を開拓した淡路商人高田屋嘉兵衛を抑留したが，1813（文化十）年，事件は解決した。

9）時の老中松平定信（1758～1829）は，対外防備を増強させ，全国の主要な海岸に台場を築いた。北越の柏崎にもその記念碑が立っている。

10）拙論第二章116頁注14），117頁注15）参照。

て有之候儀にて，アメリカ内海に乗り込み候一條これなく候へば，いこふ申し候とも，諸蛮と交易等然る可きと申すものは之有る間敷く候」（『大日本古文書幕末外国関係文書之十五・三一八』。従ってこれ以降，幕末にいたって漸く鎖国という用語は一般化したことが分かる。

鎖国是非論　「歴史は未来を予言する」（ウィンストン・チャーチル）という立場から，ここで「鎖国」の是非を論じることもあながち無駄ではあるまい。それは決して単なる「結果論」ではなく，我々が日本の将来の方向を定める際の，そのよすがとも成りうるように思えるからである。

まずは否定派から見ておこう。

（1）徳富猪一郎「徳川幕府が鎖国の国策を，徹底的に励行した結果，日本国民はまったく蓑虫になってしまった。そうしてこの蓑虫が，袋から首を出して，周辺を見回す時には，最早世界の何処にも，殆ど立錐の地はなかった」（徳富 1）。「我が大和民族は，少なくとも鎖国政策において約二百年の損をしている。そしてこの損は，果たして将来において，取り返しの付くべきか，すこぶるおぼつかなく思う」（徳富 425）。

（2）福地源一郎[11]「天主教禁を厳にしてより，島原教匪の乱となり，さらにその禁を重くしたるがために，併せて外交までも厳にし，遂に鎖国の政略を断行するに至れり。…徳川幕府二百八十年を保ちたるも封建と鎖国にして，その幕府を衰亡せしめたるもまた封建と鎖国なりき」（福地 257，256）。

（3）和辻哲郎[12]「キリスト教を無制限に摂取しても，それがただ一つの運動に統一され，日本の侵略の手段に用いられるなどということは，到底起こり得なかった。この事情は少しく冷静に観察しさえすればすぐにわかることである。それを為し得なかったのも為政者の精神的怯懦のゆえである。ただこの一つの欠点のゆえに，ベーコンやデカルト以後の二百五十年の間，あるいはイギリスのピューリタンが新大陸に渡って小さい植民地を経営し始めてからあの広い大陸を西へ西へと開拓して行ってついに大平洋に到達するまでの間，日本人は近世の動きから遮断されていたのである。このことの影響は国民の性格や文化のすみずみまでに及んでいる。それはよい面もあり，悪い面もあって単純に片づけることはできないのであるが，しかし悪い面は開国後の八十年

11）福地源一郎（1841～1906）。号は桜痴。明治期のジャーナリスト。肥前国長崎生まれ。漢・蘭・英学を修めたが，英語は森山多吉朗に師事した。1859（安政九）年，幕府出仕。翌年遣米使節，以後二度遣欧使節に随行。70年大蔵省出仕，翌年岩倉遣欧使節団に随行。74年「東京日日新聞」に入り，82年立憲帝政党を組織，88年まで新聞を主宰。以後は寄稿のほか政治小説や歌舞伎脚本も執筆。代表作『幕府衰亡論』（1892）。

12）和辻哲郎（1889～1960）。大正・昭和期の倫理学者。兵庫県出身。1934年東京帝国大学教授。主著『風土－人間学的考察』（1935）

をもってしては容易に超克することはできなかったい，良い面といえども長期の孤立にもとづく著しい特殊性のゆえに，新しい時代における創造的な活力を失ったかのように見える。現在のわれわれはその決算表をつきつけられているのである」（和辻306－307）。

ただし，（2）は，あくまで旧幕臣という立場から論じられたもので，徳川幕府の存続は一にかかって鎖国制度次第であったし，良くも悪くも鎖国は幕府の命運を決定した最大の要因であったことを福地は説いている。従ってそこに「日本」という視点は欠落している。

次に「肯定派」として代表的な意見を挙げるが，まずは，「鎖国」という用語の生みの親である，当のケンペル自身の論文を忘れてはなるまい。

（1）ケンペル「この民は，習俗，道徳，技芸，立居振舞いの点で世界のどの国家にも立ちまさり，国内交易は繁盛し，肥沃な田畑に恵まれ，頑強強壮な肉体と豪胆な気性をもち，生活必需品はあり余るほどに豊富であり，国内では不断の平和が続き，かくて世界でも稀に見るほどの幸福な国民である。もし，日本国民の一人が彼の現在の境遇と昔の自由な時代とを比較して見た場合，あるいは祖国の歴史が太古の昔を顧みた場合，彼は一人の君主の至高の意志によって統御され，海外の全世界との交通を一切断ち切られて完全な閉鎖状態に置かれている現在ほどに，国民の幸福がよりよく実現している時代をば遂に見出すことはできないであろう」（小堀 100）

（2）内田銀蔵[13]「第一に鎖国ということに依って外国貿易の利益ということは失ったけれども，其のために日本の国内で以って商工業の発達ということが，ある程度まで助成せられたことである。...それより肝腎なことが二つある。それは鎖国をやることに依って日本は国内の統一を保つことが容易であった。二百余年間も其の統一を続けられたのは是がためである。今一つは，日本の文化が今までは十分成熟しないで居った，其の時以来若し引続いて歐羅巴の性質の違った強い影響の下に立って居ったならば，日本が日本だけの特色ある文明を，今日のように円熟させることは出来なかったろう」（内田 119－120）

（3）中村孝也[14]「（鎖国のおかげで）宗教問題によって治安を乱されることを免れ，幕府

13）内田銀蔵（1872～1916）。明治後期～大正期の経済史学者。東京都出身。東京専門学校・燈台卒。898（明治三十一）年，「経済誌の性質及びその範囲に就きて」を『史学雑誌』に発表，翌年東京帝国大文科大学講師となり，日本で初めて日本経済史を講義した。1907年から京都帝国文科大学の専任教授。

14）中村孝也（なかむら・こうや1885～1970）。大正・昭和期の歴史学者。文学博士。群馬県出身。東大卒。同大学院を経て1925年退官後，1925（大正十四）年同大学史料編纂係編纂官となる。38年同教授兼任。45年退官後，明治大学教授。江戸時代の文化史や徳川氏関係の研究などに業績を残した。

の基礎を確立し，国家組織を完成して二百年の泰平を維持し，文化の整頓と産業の発達を遂げることができた」（中村 393）

（4）森嶋通夫[15]「鎖国は，保護貿易をしたのと同様の役割を果たしました。徳川時代の時点で，日本と西欧諸国の農業と工業を比較しますと，日本が比較的優位にあったのは農業でありましたから，工業生産物を日本で生産するよりも，その代わりに農産物をつくり，それを売って西欧から工業生産物を買った方が日本にとって得になります。それ故，日本と西欧の間に自由な貿易が許されますと，日本人は遂には農業ばかりするようになり，日本の手工業は壊滅してしまいます。すなわち徳川時代に自由貿易が行われていたならば，幕末，したがって明治維新の頃には，日本は完全な農業国になってしまっていて，明治政府が近代国家をつくろうとしても，工業は無から出発しなければならず，大変なことになっていたと思います。（中略）鎖国は消極的でありますが，二百年にわたって有効でありえた輸入管理法でありました。このように考えますと，鎖国は西欧の文化・技術の無視ではなく，裏返しの劣等感，恐怖感の表明以外の何ものでもないことがわかります」（森嶋 150－160）

近年，殊に日本の経済成長期からバブル崩壊を経て現在に至る，この期間は，戦後日本の国力を背景にした「鎖国肯定論」を取る史学者が多く見られたように思われる。（4）の森嶋の場合は，経済学の立場からであるが，徳川三百年を「平和」の時代と見る考え方，さらに国内産業の充実，文化の熟成，また公害による環境破壊の問題が浮上してからは，特に資源が循環していく，その自給自足の農業・経済システムに注目して，江戸文化全体を見直そうとする傾向がある。確かに鎖国時代からも学ぶことは多々あると思われるし，それはまた必要ではあろう。しかしだからといって筆者は，海外渡航や信教の自由を禁じた鎖国制度や，「士農工商」という身分制度を容認し，またそれによって持続した，徳川封建社会をそっくりそのまま肯定する気には到底なれないのである。「近年，日本は鎖国体制という"合理的な"体制を選択したからこそ，内なる成熟の道を歩むことができた，という解釈を主張する者が時を得顔で横行するようになった。また，日本の近代国家の起源を徳川幕藩体制のところまでさかのぼらせる理論まで飛び出すようになった。元来，幕藩体制は，徳川一家の利益の確保のために設立されたもので，その軍事機構を駆使して反対勢力を制圧したり，国民と海外との交流を禁圧して海外情報を独占したりすることによってかろうじて存続できる，という，システムである。諸外国との交渉においても，もっぱら徳川一家の私益を中心に動いており，外に向けて国民を代表す

15）森嶋通夫（1923～）。1946年京都大学経済学部卒。阪大教授，イギリス・エセックス大学教授を経て，ロンドン大学（ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス）経済学部教授。1976年文化勲章受賞。専門は経済成長理論など。

る政権という性格は，まったく持っていないのである。したがって“処士横議”[16]は，その内容の当否にかかわらず，いっさい厳禁する，という原則を固持していた。このような幕藩体制の根本的性格を無視して，やたらに徳川国家の“近代性”をもてはやす輩は，日本の近代をめざした開明思想家たちが，鎖国や幕藩体制のためにどれほど悪戦苦闘したか思い知る必要があると思う」（杉浦・別所 6）という見解に深く賛同するものである。

開国の時期（タイミング）「鎖国」は，当時の世界情勢を考えれば，当初ある程度は必要であったとも思われるが，それにしても二百二十年は長過ぎた。しかしそれでは，いったい，「いつ」頃が「開国」の時期として最も妥当であったのか，これには少なくとも次のように三度はその「機会」があったのではないか。

（1）安永・天明年間（1772～89）田沼時代

オランダ商館長の記録によれば，田沼意次[17] の指導する幕閣には開国の計画があったという（上垣外 243）。田沼意次の側用人の需めに応じて，工藤平助の『赤蝦夷風説考』には「扨日本の力を増すには蝦夷の金山をひらき，並其出産物を多くするにしくはなし。蝦夷の金山を開く事，昔より山師共の云ふらす所成が，入用と出高と相當せず，依之すたれ有所也。然に先に云所の『ヲロシア』と交易の事おこらば，この力を以開発有度也。此開発と交易乃力をかりて，蝦夷の一國を伏從せしめば，金，銀，銅に限らず一切の産物皆我國の用を助くべし。右交易場所あながち蝦夷に限るまじ。長崎をはじめ惣て要害よき湊に引請けて宜事也」（工藤[1] 221）とあるように，ロシアとの交易を解禁して，日本のどの港でも交易が行われるようにする，というプランが提案されるが，天明の大飢饉（1782）に続く，一揆やうちこわしにより田沼は失脚する。その後の老中首座松平定信の登場により，開国案は潰える。

（2）弘化元（1844）年，オランダ国王の開国の勧め

オランダ国王ヴィレムⅡは長年の友好関係に基づいて幕府に開国を勧める書簡を送ってきた。それは「アメリカやロシアが強圧的手段によって日本を開国させようとしているが，自主的な開国こそが日本の将来の安全を保証する」という友情に満ちた内容であったにも拘わらず，幕閣の中で開国に賛成したのは，水野忠邦[18] ただひとりで

16）「仕官しないような人々までがさまざまな政治的意見をほしいままに議論すること」（小西 47）

17）田沼意次（1719～88）。江戸中期の側用人・老中。1734（享保十九）年，将軍世子徳川家重の小姓となり，家重の将軍就任に従って本丸小姓組み番頭・御側を勤め，58（宝暦八）年以降，評定所に出座し幕政を主導。72（安永元）年老中となる。株仲間に冥加金を課して商品流通に課税。鎖国制度を緩めて，銅・俵物を輸出し，金銀を逆輸入して，それを財源に金銀通貨の一本化を企図した。さらに蝦夷地開発計画，大規模な新田開発工事などの斬新な経済政策を推進したが，86（天明六）年将軍家治の死後老中罷免。翌年所領を没収され謹慎。

18）水野忠邦（1794～1851）。江戸後期の老中。肥前国唐津・遠江国浜松藩主。1828（文政十一）年西丸老中，34（天保五）年本丸老中。39年老中首座。大御所家斉没後，41年から天保の改革を主導。鳥居耀蔵を町奉行に登用し，強圧的な政治を行ったために反発を受け，43年失脚。44（弘化元）年老中再任。翌年辞職。

あったという。

(3) 嘉永五（1852）年五月

オランダは，アメリカより，その遣日計画を聞かされ協力を求められた際，新オランダ商館長クルチュウスに命じて，その旨を徳川幕府に知らせる「別段風説書」を提出させアメリカに先駆けてオランダと条約を結ぶことを提案した。しかし，時の老中阿部政弘ら幕府は「大事に至る可能性はなかろう」として，これを顧みなかった。

以上は「ペリー以前」の場合であるが，もし幕府が彼の「要求」を拒否してなお鎖国を堅持していた場合を想定してみよう。というのは「開国」は時の流れであり，当時の世界情勢からみて遅かれ早かれ，日本は開国せざるを得ない状況にあったからである。従ってペリーが最初に来航した1853年の７月，アメリカの大統領は既にホイッグ党のフィルモアから民主党のピアスに代わっており（1853年3月4日），アメリカの対外政策はより「いっそう穏健な対日外交を展開しようとしていた」（石井孝 66）し，そもそも民主党政府は「帝国主義に反対し，外国領土占領するが如き一切の行動を許容しな」（田保橋 560）かったことから，ペリーが「開国」に失敗していたとすれば，その後任に任命されたはずの「文官」（石井孝 66）は「砲艦外交」というような非常手段に訴えることはなかった[19] かもしれない。

Ⅱ．日本の近代化

日米交渉一五〇年　夏目漱石（1857～1916）は「現代日本の開化」（1911）という講演の中で，「西洋の開化は内発的であって，日本の開化は外発的…皮相上滑りの開化である」（夏目[1] 368，376）と言い，「これを続けると神経衰弱になるが，自分はどうすることもできずまた何も提案できない」（夏目[1] 378）と嘆いている。彼のいう「日本の開化」が，ペリーの黒船来航による「日本開国」と，それ以後の「西洋文明受容」を示していることはいうまでもない。

漱石は，既に『三四郎』（1908）において，熊本から大学に入るため上京する三四郎が，東京へ向かう列車の中で出会う広田先生なる人物を創造し，三四郎の「これから日本もだんだん発展するでしょう」という言葉に対して「滅びるね」（夏目[2] 25）と言わせている。彼の「予言」は三十七年後に半ば的中したことになる。

19）しかし「このときの民主党は，もはやジャックソンやジェファーソンの時代ではな」く「アメリカは地理的にはすでに大国であり，民主党もまた中西部への移民や，ヨーロッパからの移住者などの，雑多な分子を抱え込んでいた」し，「領土と通商の拡大を求め」る一派もいた。「ピアス自身もキューバとハワイの併合を計画したこともあり，…その海軍路線においても，完全にペリーの近代路線のあとをついだ」（曽村 176）との正反対の意見もある。とはいうものの，当時のアメリカは「たとえ『開国』が拒否されたとしても戦争にまで訴える準備はなかったし…ペリーに託された大統領ピアスの国書」には「内政不干渉と開国の時期を限定し中止も可能である旨述べられていた」（井上寿一 11）ことは否定できない。

いずれにせよ，漱石が述べた「日本の現代の開化は外発的である」という言葉は，第二次大戦後の占領時代[20]，さらには1980年代から90年にかけての「日米貿易摩擦時代」にもソックリそのまま繰り返され，第二，第三の「黒船時代」が出現するのである[21]。「黒船」とは，アメリカという「外圧」によってしか，国を近代化し，改革することができない日本の宿命であり，その象徴でもあるのだ。

ところで，ヨーロッパでも「国際間の外交において『国家間の平等』システムが完成するのは，ようやく十八世紀後半の国際法の形成によって」（井上勝生 155～156）であり，「近代以前において，国家同士が『対等』かつ『平等』な関係を結ぶことはきわめて困難」であったのであるが，しかし「国際人」のイメージをめぐってジョン・万次郎の項で述べたように[22] 国と国との関係も本来，「対等」かつ「平等」を原則にして築き上げなければならないのは，もはや自明のことであろう。この国と国との関係にも，個人間の心理学が適用できるようであり，岸田秀[23] という心理学者は次のように言っている。「ペリーが来たというのが，アメリカと日本の最初の関係のはじまりなわけですけれども，その最初の事件に関するアメリカ人の見方と日本人の見方に，非常に大きな開きがあって，そこに日米誤解の出発点があるんじゃないかと思います。日本の側から言えば，あれは強姦されたんです」（岸田[1] 25）。つまり「アメリカの方は，近代文明をもたらしてあげた」（岸田[1] 26）恩人くらいに自分を考えているが，日本の方には，このときのショックや恨みが今も尾を曳いていて，以後アメリカとの関係において，どうしても素直に振舞うことができない「トラウマ」として残っている（岸田・松本221）というわけである[24]。

20）拙論第四章153頁参照。マッカーサー自身もペリーを意識して行動した節がある（保坂 71）。それが単なるポーズでなかったことは，日本がポツダム宣言を受諾して第二次大戦が終了した後，正式の調印式が行われた1945年９月２日のミズリー号において，ペリーが来航時に使用した星条旗が，その艦上に飾られたことによっても分かるであろう。つまり彼らはどちらも自らを「解放者」（亀井244）として位置付けていた。ペリーは鎖国ニッポンを世界へ誘導し，マッカーサーは軍国日本を自由で民主主義の国へと指導する「それ」として。

21）したがって占領時代は「第二の開国」，「第二の文明開化」期（細谷・本間20）ということになろう。しかしこの占領時代は，日米相互の文化交流が見られた点で第一のそれとは性格を異にしている。すなわち，日本に駐留した米兵（GI）は日本の文化の愛好者となり帰国して後にいわゆる「ビート・ジェネレーション」，「禅ヒッピー」などの「対抗文化」を生み出すきっかけをもたらした。一方日本の若者は，ジャズやポピュラー音楽など，アメリカの商業文化の虜となった。

22）拙論第三章，125頁参照。

23）岸田秀（1933～）。1933年香川県生まれ。早稲田大学文学部卒。心理学者。現在和光大学表現学部教授（精神分析）。フロイト理論を独自に発展させた唯幻論で，個人から集団，歴史までを縦横に論じる。著書は『ものぐさ精神分析』（中公文庫，昭和57年）他多数。同書によれば，フロイトの精神分析における超自我，自我，本能（エス）という概念には，当時の現実世界における国民を構成する，宗教的または天上的権威（皇帝），世俗的権威（政府），民衆という三つの部分との類比が根底にあり，通常考えられているのとは逆に，集団心理現象を下敷きにして個人の心理を理解しようとしたのだという（岸田[1] 10～12）。

24）『コリア・レポート』誌の辺真一氏によれば，韓国人もまた，日本による「開国」，さらに四十五年に及ぶ被植民地支配について，ほぼ同様の感じを抱いているという。

岸田氏によれば，日本はこのときのショック（ペリー・ショック）以来，外国（アメリカ）を崇拝する「外的自己」と，外国（アメリカ）を憎悪する「内的自己」に分裂した。自分が分裂したままの日本は，時に「外的自己」が表面に出て，「内的自己」は抑圧され，時にはその逆となる。反米や嫌米が広がったり，アメリカべったりの態度が顔を出すのはそうした理由だという（岸田[3] 151）。

一方アメリカもまた歴史的にインディアンを虐殺したというコンプレックスを持っている。アメリカはそれを「彼らインディアンは野蛮な文化に固執し，我々の優れた文化を拒否したから」（岸田[2] 210）と正当化している。この点が反省されていないため，メキシコ戦争（1848～49），ハワイ併合（1898），さらにはベトナム戦争（1954～75）などと，際限なく異民族の「虐殺」を繰り返す「反復強迫」という病人と言える（岸田[2] 165）。

この「分裂」した自己を「統一」さすため，また「反復強制」を止めるには，精神分析でいうところの「病因」を突き止めることであり，このためにまず日米は，隠蔽や欺瞞はやめて互いの真実の姿――日米の歴史――を知ること（岸田[2] 218）が喫緊であろう。

最後に，今回我々の12回にわたる講議が，「日本開国」の正しい姿を知る一端，もしくはその契機になればと願い，総括を終えたいと思う。

参考文献

(*印は本章で引用・言及した文献であることを示す)

*新井白石[1]『西洋紀聞』村岡典嗣校訂，岩波文庫，200年

――――[2]「折りたく柴の記」『戴恩記，折りたく柴の記，蘭東事始』小高敏郎・松村明校注，日本古典文学大系95，岩波書店，昭和43年，149～450

石井進他『詳説日本史』山川出版社，2003年

*石井孝『日本開国史』吉川弘文館，1996年

*井上勝生『日本の歴史18開国と幕末変革』，講談社，2002年

*井上寿一『日本外交史講義』岩波書店，2003年

岩生成一『日本の歴史14鎖国』，中央公論社，昭和48年

*内田銀蔵『日本國民生活の發達』創元社，昭和16年

*上垣外憲一『「鎖国」の比較文明論-東アジアからの視点』講談社，1994年

川勝平太[1]『近代文明と近代西洋-鎖国再考』日本放送出版協会，平成３年

――――[2]『「鎖国」を開く』同文館，平成12年

*岸田秀[1]『黒船幻想』トレヴィル，1986年

*―――[2]『日本がアメリカを赦す日』毎日新聞社，2001年

*―――[3]「日米歪みの根源は黒船とインディアン」『サンデー毎日』2001年6月3日号

*―――・松本健一「見れども見えず，という病理」『諸君！』2001年10月，220～229

*工藤平助[1]『赤蝦夷風説考・蝦夷拾遺・蝦夷草紙』大友喜作解説校訂，国書刊行会，北門叢書（全六冊）第一冊，昭和47年

————[2]「赤蝦夷風説考」『日本の名著25』責任編集佐藤昌介，中央公論社，昭和47年，391～416
*小堀桂一郎『鎖国の思想-ケンペルの世界史的使命』中公新書，昭和49年
*坂本義和『相対化の時代』岩波新書，1997年
司馬遼太郎・大野勝己「アメリカとつきあう方法」『文芸春秋』昭和45年9月特別号，110～122
*杉浦明兵・別所興一『江戸期の開明思想－世界へ開く近代を耕す』社会評論社，1990年
*曽村保信『ペリーは，なぜ日本に来たか』新潮選書，昭和62年
*高野長英[1]「戊戌夢物語」『渡辺華山・高野長英・佐久間象山・橋本左内・横井小南』（日本思想大系55）岩波書店，1971年，162～170
————[2]「戊戌夢物語」『改定史蹟集覧第17冊』近藤活版所，明治三十六年，787～794
*田保橋潔『増訂近代日本外国関係史』原書房，昭和４５年
*徳富猪一郎『近世日本国民史第14巻鎖国篇』時事通信社，昭和39年
*東京帝国大学文科大学編纂『大日本古文書幕末関係文書之十五』東京帝国大学，大正11年
*中村孝也『江戸幕府鎖国史論』東京・奉公会，奉公叢書，1914年
*日本史広辞典編集委員会『日本史広辞典』山川出版社，1997年
*夏目漱石[1]「現代日本の開化」『評論・雑篇』漱石全集第十三巻，岩波書店，昭和11年，352～380
*————[2]『三四郎』漱石全集第五巻，岩波書店，昭和11年
*福地源一郎『幕府衰亡論』石塚裕道校注，東洋文庫84，平凡社，1989年
*保坂正康『昭和史七つの謎』講談社文庫，2003年
*森嶋通夫『続イギリスと日本』岩波新書，1997年
*和辻哲朗『鎖国』上下，岩波文庫，1997

［付記］なお拙論は，平成13年後期及び平成15年前期開講の富山大学人文学部「国際文化論特殊講義：「日本開国」－異文化接触のケース・スタディ」において，筆者が担当した五回分の講義録に若干の加筆・修正を施したものである。